13
タルタロスの薔薇
三雲岳斗
illustration マニャ子
ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD
電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド 13

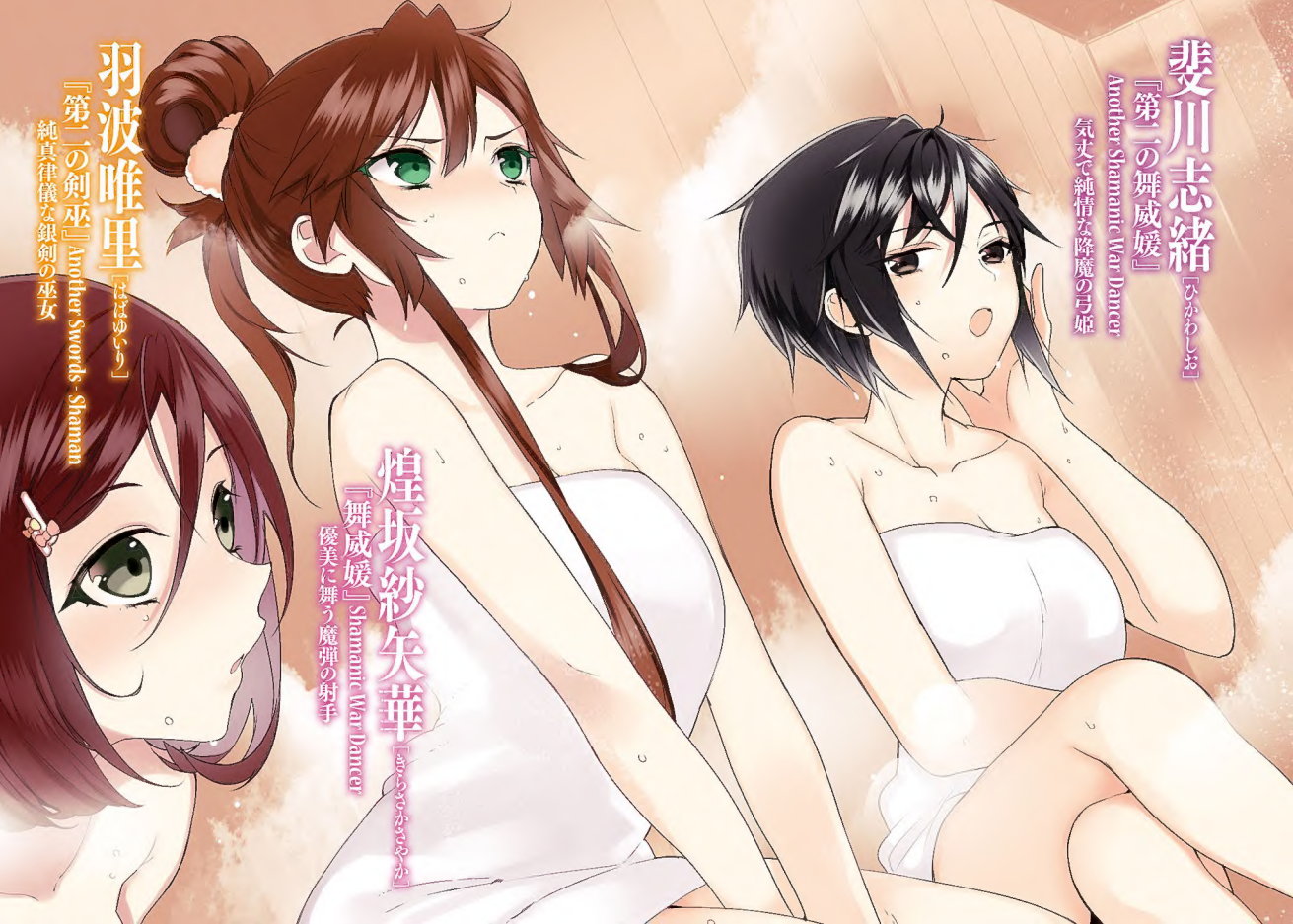
タルタロスの薔薇

三雲岳斗

illustration マニャ子

姫柊雪菜「ひめらぎゆきな」
『剣巫』Swords - Shaman
獅子王機関の可憐な監視者
暁古城「あかつき、じょう」
『第四真祖』The Fourth Primogenitor
世界最強の〝怠惰な〟吸血鬼

矢瀬基樹［やぜもとき］
『過適応者』Hyper Adapter
陽気な級友、あるいは双貌の道化師
藍羽浅葱［あいばあさぎ］
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生


斐川志緒［ひかわしお］
『第二の舞威媛』
Another Shamanic War Dancer
気丈で純情な降魔の弓姫
煌坂紗矢華［きらさかさやか］
『舞威媛』Shamanic War Dancer
優美に舞う魔弾の射手
羽波唯里［ばばゆいり］
『第二の剣巫』Another Swords Shaman
純真律儀な銀剣の巫女

Contents

序　章　Intro　11

第一章　特区封鎖　The Blockade　27

第二章　ディセンバー　December　85

第三章　照準　In Her Sights　149

第四章　タルタロスの薔薇　Tartaros Roses　215

終　章　Outro　311

あとがき　326

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

7　ご利用上の注意

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア／プログラム／データ／情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。

法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

CONTENTS

序　章　Intro
第一章　特区封鎖　The Blockade
第二章　ディセンバー　December
第三章　照準　In Her Sights
第四章　タルタロスの薔薇　Tartaros-Roses
終　章　Outro
あとがき

ストライク・ザ・ブラッド13

タルタロスの薔薇

序章
Intro

夜明け前の仄かな曙光が、空と海の境界を白く染めていく。

曇った窓の外に広がる水平線を眺めつつ、煌坂紗矢華は、広い湯船に脚を伸ばしていた。時刻は午前五時半を過ぎたあたり。やや熱めの湯加減が、目覚めた直後の身体に心地好い。

「んー、いいお湯」

満足げな表情で呟いて、紗矢華は浴槽の縁にのんびりともたれかかる。

その頬にかすかに伝わってくるのは、ディーゼル機関の振動だ。東京発、絃神島行きの大型貨客船のエンジン音。乗客として絃神島に移動中の紗矢華は、この船自慢の展望風呂を、朝から満喫していたのだった。

「たまには船旅も悪くないわね。久しぶりによく眠れたし、景色もいいし」

透明なお湯を手の中で弄びながら、紗矢華はうっとりと独りごちる。

東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ人工島――絃神島までの所要時間は約十一時間。

飛行機の予約が取れなかったせいで仕方なく選んだ船旅だったが、想像していたよりも快適だった。広々とした湯船に浸かって眺める夜明けは、ビジネスホテルの狭いユニットバスでは決して味わえない絶景だ。が、

「これで任務じゃなかったら最高だったんだけど……」

声のトーンを低くしながら、紗矢華は湯船に身体を沈めた。まったく人使いが荒いったら、と無意識のうちに愚痴が洩れる。謹慎明けの休暇返上で関東に呼び戻された紗矢華は、獅子王機関の本部に戻る余裕もないまま、新たな任務を命じられたのだ。

せめてもの救いと言えるのは、行き先が〝魔族特区〟絃神島ということだった。絃神島には、紗矢華の大親友である姫柊雪菜がいるのだ。このまま予定どおりに船が到着すれば、任務を開始する前に、彼女と話をする時間くらいは確保できるかもしれない。

突然会いに行ったら、雪菜は驚いてくれるだろうか――紗矢華は口元をほころばせながら、姉妹同然に育った元ルームメイトとの再会の場面を想像しようとした。

だがしかし、紗矢華の脳裏に真っ先に浮かんできたのだった。雪菜の監視対象である世界最強の吸血鬼。〝第四真祖〟暁 占城――

「な……!?　ち、違っ……あ、あんな男のことなんてべつにどうでもよくて……!」

紗矢華は激しく赤面しながら、うがーっ、と頭を抱えて浴槽の中をのたうち回る。

さらに言えば、浴場内で奇声を発していたのは紗矢華だけではなかった。

「うーっ！　いやあぁ――っ！」

紗矢華の背後。洗い場の方角から聞こえてきたのは、少女の甲高い悲鳴だった。声の主は、十二、三歳前後とおぼしき小柄な少女。鋼色――とでも形容すべき不思議な光沢を帯びた彼女の髪は、シャンプーの泡で覆われている。どうやら洗髪中にシャンプーが目に入ってしまって、パニックに陥っているらしい。

「あ、グレンダ……!?　待って！　シャンプー、ちゃんとすすがないと……!」

そう言って少女を呼び止めようとしたのは、シャワーヘッドを握った優等生っぽい雰囲気の女子だ。姉妹にしては似ていないが、母親にしては若すぎる。おそらく紗矢華と同世代だろう。どことなく見覚えがある気もする。

しかし彼女の素性を思い出す前に、紗矢華はギョッと目を見開いて硬直した。泡まみれになった鋼色の髪の少女が、目を閉じたまま、紗矢華のほうへと突っこんできたのだ。

「やあぁ――っ！」

「だめ、グレンダ！　止まって……!」

「え……!?　なに……!?　え!?」

見覚えのある顔立ちの少女が、必死で泡まみれの少女を止めようとする。

突然の非常事態に、混乱しながら立ち上がる紗矢華。泡まみれの少女が、このままの勢いで浴槽にぶつかっ

たら、最悪、大怪我をする可能性もある。なんとかしなければ、と焦る紗矢華だが、肉体が思うように反応しない。

結局、紗矢華に出来たのは、浴槽に片脚を突っこんだままの姿勢で、突き進んでくる少女を真正面から受け止めることだけだった。

「ごふっ！」

激突の衝撃に息を詰まらせながら、紗矢華は仰向けに浴槽に倒れこむ。

盛大に噴き上がった水飛沫が、息継ぎしようとした紗矢華の顔面へと降りそそいだ。たまらず噎せて咳きこむ紗矢華。

一方のグレンダと呼ばれていた少女は、ぷはあ、と水中から顔を出して、ホッとしたような表情を浮かべていた。浴槽に転落したことで、シャンプーの泡が洗い流されたらしい。

「す、すみません！　大丈夫ですか……!?　怪我は!?」

保護者役の少女が、焦った口調で紗矢華に訊いてくる。紗矢華はズブ濡れの前髪をかき上げながら、相手を半眼で睨みつけた。

「あのねえ、これで大丈夫なわけ……あれ？　あなた……」

「煌坂……さん？」

怯えたような表情で紗矢華を見つめていたのは羽波唯里――かつて紗矢華と同期だった獅子王機関の攻魔師だ。裸身にバスタオルを巻いただけの姿で、呆然と動きを止めている。

「唯里！　なにがあったんだ!?　グレンダは……!?」

そんな唯里を追いかけてきたのは、気の強そうな顔立ちのショートヘアの少女だった。湯船の中で泳ぎ始めているグレンダに気づいて、彼女は疑問の表情を浮かべ、次に立ち竦んでいる唯里に視線を向ける。

「し、志緒ちゃん？　そ、それが、その……」

唯里は、なぜかうろたえたように腕を上下させながら、背後を振り返った。明らかに不審な唯里の挙動に、志緒と呼ばれた少女は怪訝そうに目を細め、

「げっ!?」

「あーっ!?」

彼女と紗矢華は周囲の迷惑も顧みず、同時に相手を指さして大声を上げた。

予想どおりの紗矢華たちの反応に、唯里が頭を抱えている。

ショートヘアの少女――斐川志緒も紗矢華のかつての同級生。獅子王機関の攻魔師だ。だからといって仲が良かったのかといえば、むしろ天敵とでも呼ぶべき間柄だった。同じ舞威媛の候補生で、成績が拮抗していたこともあり、二人はなにかにつけて衝突していたのだ。

「どうして煌坂がここにいるんだ!?」

「それはこっちの台詞なんだけど!?」

紗矢華と志緒は素っ裸のまま、額を突きつけて睨み合う。久々の再会にもかかわらず、和やかな雰囲気など微塵もない。困ったように眉を上げて、二人を必死に取りなそうとする唯里。

「……だ？」

そんな唯里たちの様子を見上げて、グレンダが不思議そうに首を傾げていた。

紗矢華と志緒は、木製のベンチに並んで座っている。

温度計の針は九十度近くを指していた。大浴場の片隅に設置されたサウナルームの中である。

紗矢華がちょっとした好奇心で入った直後に、たまたま中にいた志緒と鉢合わせてしまい、なんとなく先に出たら負けという雰囲気になってしまったのだ。

すでに二人の肌はしっとりと汗に濡れ、不敵に笑っていた。

「あなた、いつまで人ってるつもり？　斐川志緒？」

平静を装った口調で紗矢華が訊く。志緒は、表情を変えないまま横目で冷たく紗矢華を睨み、

「そっちこそ、さっさと出たほうがいいんじゃないか。ぶっ倒れても面倒は見ないぞ？」

「誰がぶっ倒れるのよ……!?　あなたとは違うのよ！」

「私はあと一時間は人っていられるが」

「わ、私なんか二時間でも余裕なんだけど……！」

「だったら私は二時間五分はいけるな！」

「じゃあこっちは二時間六分よ！」

「嘘をつくな！」

「あなたが先に言い出したんでしょ！」

互いに歯を剝き出しにして、小学生男子のような言い争いを続ける紗矢華と志緒。　高神の杜で暮らしていたころに、幾度となく繰り返されてきた光景だ。

「ところで、この船、まだ着かないのかしら？」

さすがに不毛な諍いにも嫌気がさして、紗矢華は唐突に話題を変えた。　もうすぐ船が着くということになれば、サウナを出る口実になると思ったのだ。

「さっき霧のせいで到着が遅れるというアナウンスがあったぞ」

だが志緒は素っ気なくそう答えてくる。紗矢華は、ぐぬ、と唇を痙攣させて、

「そ、そう……ちょうどよかったわ……」

「そうだな。時間を気にせずにサウナに入っていられるからな……」

強がる志緒の頬も強張っていた。明らかに彼女も限界なのだ。

重苦しい沈黙がサウナ室に訪れる。熱せられた空気で喉を痛めるので、迂闊に溜息もつけないのがつらい。

「ずいぶん懐かれてるのね」

紗矢華がぼそりと志緒に訊いた。もちろんグレンダと呼ばれていた少女のことである。

「まあね」

志緒は真面目な表情でうなずいた。

グレンダが単なる一般人ではないことは、紗矢華にもわかっている。なにしろ新人とはいえ獅子王機関の攻魔師が二人もついているのだ。

「彼女、何者？」

「それを調べるために紘神島に移送中なんだ。魔術や魔獣関係の検査機関がいちばん充実しているのは、やっぱり〝魔族特区〟だから」

抑揚の乏しい志緒の言葉に、ふうん、と紗矢華が気のない相槌を打つ。つまりグレンダの正体を、志緒たちもまだ知らないということらしい。

「ていうか、あんたたち、二人がかりであの子の護衛をしてるわけ？」

「聖殲派の残党が彼女を狙ってる可能性があるんだ。仕方ないだろ」

馬鹿にされたと思ったのか、志緒が少しムキになって言い返す。

「それにグレンダが本当に懐いてるのは、唯里と第四真祖だけだし……」

「は……!?」

志緒が何気なく口にした言葉に、紗矢華があからさまな動揺を見せた。

「第四真祖って……なんでそこで暁　占城の名前が出てくるわけ!?」

「神縄湖の事件で、グレンダを助けてくれたのが第四真祖だったんだ。いや……あれはグレンダが第四真祖を

助けたのか……？」

「わ、私の知らないところで……なにやってんのよ、あの男は……!?」

タオルでまとめた長い髪を思わずイライラとかきむしる紗矢華。

そんな紗矢華を、志緒は訝しげな表情で見返して、

「第四真祖の監視役は姫柊雪菜だろ……？　どうして煌坂が彼の動向を気にするんだ？」

「そ、それは……つまり、私の雪菜を危険に晒すような真似をするなってことよ！」

「ああ……なるほど」

半ば自分自身に言い聞かせるような紗矢華の言葉を、志緒は疑いもせずにすんなりと信じた。紗矢華が、年下の元ルームメイトを溺愛している事実は、彼女もよく知っているのだ。

「そういえば、煌坂は絃神島になんの用があったんだ？」

「任務よ、任務。ＭＡＲの内偵」

紗矢華は肩をすくめながら即答する。苦手な相手とはいえ、同じ獅子王機関の舞威媛同士、任務の内容を明かしても問題ないと判断したのだ。

「ＭＡＲ？　あの多国籍魔導企業の？」

「そう。マグナ・アタラクシア・リサーチ社。絃神島にあるＭＡＲの研究所が妙な荷物を運びこんだ形跡があって、その中身を調べてるの」

「内偵って……煌坂にそんなことができるのか？」

「どういう意味よそれ!?」

真顔で訊き返してくる志緒を睨んで、紗矢華が声を荒らげる。獅子王機関の舞威媛は呪術と暗殺のエキスパートだ。現代では暗殺を実行することなど滅多にないが、それでも暗殺者としての技能を生かした要人警護やスパイ活動は、舞威媛の重要な任務である。

しかし志緒は、本気で心配しているような視線を紗矢華に向けて、
「いや、煌坂は目立つだろ？」
「悪かったわね、でかくて！」
紗矢華が、こめかみを引き攣らせて攻撃的に唸る。ファッションモデル並の長身は、レックスなのだ。しかし志緒が見つめていたのは、バスタオルで隠された紗矢華の胸の膨らみのほうだった。
「けなしてるわけじゃない。少しうらやましいという気持ちはある」
「あなただってべつに小さくはないじゃない」
志緒の視線に気づかないまま、紗矢華が不機嫌な口調で呟いた。志緒の身長は百六十センチ前後。紗矢華を羨むほど小柄なわけではない。
「それは嫌味で言ってるのか？」
自分の胸元に視線を落として、志緒が刺々しい声を出す。グラマラスな紗矢華と比べるまでもなく、志緒の体型には圧倒的に起伏が乏しかった。
「は？　なにそれ、あなたこそケンカを売ってるの？」
攻撃的な志緒の視線を、紗矢華が正面から受け止める。汗だくのまま再び睨み合う二人。
サウナ室の扉が開いて唯里が飛びこんできたのは、その直後のことだった。紗矢華たちを二人きりにするのが不安で、扉の外で聞き耳を立てていたらしい。
「ストップ、志緒ちゃん！　煌坂さんも……駄目！」
「だ？　けんか？　め！」
唯里にくっついて入ってきたグレンダが、キラキラとした瞳で紗矢華たちを見つめてくる。そんな眼差しを向けられてしまっては、さすがに紗矢華たちとしても子どもじみた言い争いを続けることはできなかった。
「内偵って言ったって、研究所の中に乗りこむわけじゃないからいいのよ。人工島管理公社が協力してくれる

段取りになってるし、ＭＡＲの絃神島研究所にはコネもあるしね」

紗矢華が渋々と説明に戻る。志緒は少し意外そうな顔をした。

「コネ？」

「暁　古城のお母様が、ＭＡＲの主任研究員なのよ」

「え……!?」

志緒がめずらしく動揺を顔に出す。

「暁古城の母親……って、牙城さんの奥さんってことか？　煌坂の知り合いなの!?」

「は？　牙城さん……？」

今度は紗矢華が首を傾げる番だった。

志緒の口振りから察するに、牙城というのは暁古城の父親なのだろう。しかし、そんな人物のことを、どうして志緒が気にかけているのかがわからない。

一方、唯里にはなにか思い当たる節があるらしく、

「志緒ちゃん……やっぱり……」

「ち、違う！　違うから！　そういうんじゃないから……！」

いつになく余裕のない表情で、志緒が必死に首を振る。サウナにいるせいで目立たないが、よく見れば志緒の顔面は耳の先まで真っ赤になっていた。

これは詳しく問い質さなければなるまい、と紗矢華が舌舐めずりしようとした瞬間――

衝撃が船を襲ってきた。

落雷に似た轟音と、巨大な鉄槌で殴られたような重々しい振動。

貨客船の船体が激しく軋み、床が少しずつ傾いていく。

「な、なに……この衝撃……!?」

「座礁か？　まさか、こんな海域で……？」

紗矢華と志緒はうなずき合って、サウナ室の外に飛び出した。全身が汗に濡れたままだが、それを気にしている場合ではない。

「ゆいりー！　ふね！　いっぱい！」

「う、うん。そう……だね……」

グレンダが、窓の外を指さしてはしゃいでいる。

彼女の言葉にうなずきながら、唯里が呆然と立ち尽くす。

夜が明けた直後の海面を、純白の霧が覆い隠していた。ほとんど視界が効かないほどの濃密な霧だ。その不自然な濃霧の中に、無数の巨大な影が浮かんでいる。

それは難破した船舶の群れだった。貨物船、漁船、それに沿岸警備隊（コースト・ガード）の巡視船まで――おびただしい数の漂流船が、この海域に集まってきているのだ。

どうやら紗矢華たちを乗せた貨客船は、その中の一隻に激突したらしい。

「なによ、これ……!?」

船の墓場――としか形容できないその光景を、紗矢華たちは為すすべもなく見つめている。

緊急事態を知らせるサイレンが船内に鳴り響いたのは、その直後のことだった。

†

少女は目を閉じたまま、夜明けの海を眺めていた。

洋上に停泊した巨大なクルーザーの展望デッキ。かすかな湿り気を帯びた朝の風が、彼女の髪を揺らしている。洩れ射す朝陽に透ける金色の髪は、光の加減で虹のように色を変えていた。まるで揺らめく炎のように

「朝焼けか……忌々しいが、美しい色だネ」

少女の傍らに現れたのは、長身の美しい青年だった。忘却の戦王の血脈に連なる〝戦王領域〟の貴族――旧き世代の吸血鬼だ。

「汝も無聊を慰めにきたか、蛇の王よ」

振り返りもせずに、少女が訊く。

彼女の前のティーテーブルには、ガラス製のチェスセットが置かれていた。試合途中とおぼしき駒の配置だ。少女が対戦するべき相手の姿はない。

「独りチェスかい？」

「我が敵手は、すでに去りぬ。是非もなし」

青年の問いかけに、少女が告げた。彼女の細い指先が歩兵を動かし、女王へと変える。

「そうか。タルタロス・ラプス――始めるつもりか」

青年が静かに背後を見た。そこに浮かぶのは巨大な人工の都市。〝魔族特区〟絃神島だ。

「然様。彼の者はいまだ運命に抗い続けたるが故に――」

歌うような口調で少女は答える。無感情なようでいて、ひどく哀しげな声だった。

「きみは行かなくてよかったのかい？」

「――我らの身が十二に裂かれた理由、汝は知りたりや？」

冷ややかな、そして哀しげな声で少女が訊いた。再び駒を動かす。王手――

ああ、と暁の空を見上げて、吸血鬼の青年が息を吐く。

「残念だヨ」

獰猛（どうもう）な笑みを浮かべて、彼は笑う。そして青年は誰（だれ）だ、と。

「あの少年のことは、本当に気に入っていたからね――」

口の中だけでもう一度呟（つぶや）いた。残念

第一章

特区封鎖

The Blockade

1

三個目の目覚まし時計が鳴り始めたところで、暁古城は目を覚ました。

カーテン越しの陽光が、ジリジリと背中を炙っている。早朝だというのに、汗ばむほどに気温が高い。真夏を思わせる密度の濃い大気。それは慣れ親しんだ絃神島の空気だった。

「朝か……なんか、休んだ気がしねえなー……クソ……」

まだ少しぼやけた視界の中、古城は手探りで目覚まし時計のアラームを止めていく。

全身が、フルマラソンを走った翌日のようにずっしりと重い。積み重なった疲労のせいだろう。なにしろ新年早々、本上まで往復して、絃神島に帰還した直後なのだ。

その間、なぜか南宮那月や獅子王機関の三聖、そして聖殲派なるテロリストに襲われ、何度も死にそうな目に遭った。どうにか無事に生き延びたものの、精神力の消耗はいかんともしがたく、冬休みが終わった直後だというのに疲労はピークに達している。もう一度ベッドに潜りこみたい欲望に必死で逆らい、古城はTシャツを脱ぎ捨てながら部屋を出た。

リビングには、淹れ立てのコーヒーの匂いが漂っていた。

つけっぱなしのテレビでは、朝のニュースが流れている。それをどこか不思議そうな表情で眺めていたのは、凪沙だった。

ちょうど着替えの途中だったのか、彼女は下着姿のまま、膝の上に畳んだ制服を撫でている。

「凪沙……？」

いつになく物静かな妹に違和感を覚えて、古城は思わず呼びかけた。

普段は短く結い上げている髪を、今の彼女は解いたままだ。どこか雰囲気が違って見えるのはそのせいか。

逆光に透ける長い髪が、淡い金色に輝いている。
「ああ、占城君。おはよう――」
ようやく占城の気配に気づいた凪沙が、振り返って穏やかな笑みを浮かべた。
おう、と曖昧にうなずきながら、古城は困惑を深くする。古城の知っている妹はむようなタイプではなかったからだ。天真爛漫というか、世話好きというか、ひたすら人懐こくて騒々しい性格なのである。普段の彼女なら目覚ましのアラームが鳴り出す前に、毛布を剝ぎ取って古城を叩き起こしていたはずだ。
「その制服、どうかしたのか？」
戸惑いの表情を隠したまま、古城は慎重に問いかけた。
なにか失敗をやらかして、落ちこんでいるのではないかと疑ったのだ。
「ううん……なんでもないよ」
しかし凪沙は、そう言って静かに目を細める。
古城は既視感に襲われて息を止めた。中等部の制服を大事そうに抱いている妹の姿に、別人の面影を重ねてしまったのだ。今はもういないはずの誰かの面影を――
「ただ、なんとなく幸せだな、と思って。今日からまた学校のみんなと会えるなって」
「ふーん……」
占城は、平静を装って殊更に素っ気なく呟いた。
そこで凪沙は、ふと我に返ったように目を瞬いた。
表情で睨む。
「ていうか、占城君、服着てよ。年頃の乙女の前を裸でうろうろするのは犯罪だよ、犯罪！」
「半パンはちゃんと穿いてるだろ。制服のシャツが見当たらなかったんだよ」

「シャツなら食卓の椅子の上。凪沙がアイロンかけておいたんだからね」
「そうか。悪いな」
「本当に世話が焼けるんだから。ほら、早く着替えて着替えて！」
「おまえもな」
ようやく普段の調子を取り戻した凪沙に、古城はホッとしながら反論した。
し、きょとんとした顔で視線を落とす。
手に持った制服の上下を除けば、凪沙が身に着けているのは、シンプルな白の下着だけ。ようやくそれに気づいた凪沙は、声にならない悲鳴を上げつつ身体を丸めて、
「み、見た!?」

「あれ……牛乳ってもうないのか？」

「無反応!?」

制服のシャツを回収するついでに、古城は冷蔵庫を開けて中身を確認する。実の妹のどうでもいい下着姿などよりも、空腹と喉の渇きを癒すほうが、どう考えても優先度が高いのだ。

「むー……牛乳なら、さっきスクランブルエッグに使っちゃいました！」

「そうか。帰りに買っとかないとな」

むくれつつも律儀に答えてくる妹に、古城は落胆しながら言った。学校帰りの生鮮食品の買い出しは、主に古城の担当なのだ。

「今日は人荷してるといいんだけど」

制服の袖に腕を通しながら、凪沙が心配そうな声を出す。

「ああ……そういや、貨物船の事故があったんだっけか」

「そうそう。最近、多いんだよ。こういうときに人工島はやっぱり不便だよね。生鮮食品はすぐに品薄になっちゃうし、本土より物価もお高いし」

「まあ、台風シーズンってわけでもないし、次の船がすぐに来てくれるだろ」

古城は無関心に返事をする。太平洋のド真ん中に浮かぶ絃神島では、定期船の欠航や遅延は日常茶飯事だ。

荒天が続けば、一週間近く物流が止まることもめずらしくない。

「そうだけど……」

「帰りに姫柊と店を回ってみるから、ほかに要るものがあったら、あいつに伝えといてくれ」

冷蔵庫の中に残っていたのは、古城の苦手な濃緑色の野菜ジュースだけだった。苦悩の末に紙パックを取り出し、しかめっ面でジュースを喉に流しこむ古城を、凪沙は黙って見つめている。

「今日も雪菜ちゃんと……一緒なの？」

そして凪沙は、独り言のようにぽつりと呟いた。

「え？」と古城が口元を拭いながら振り返る。野菜ジュースの味に気を取られて、単純によく聞き取れなかっ

たのだ。

しかし凪沙は、自分でも驚いたように大げさに首を振って、

「あ、ううん。そう、そうだよね」

そうだな、と占城は話がよくわからないままうなずいた。

最初の目覚ましで起きられなかったせいで、あまり時間に余裕がない。面倒な会話は後回しにして、妹が作ってくれた朝食を、ありがたくいただくことにする。

「なんだろ……」

一方、凪沙は、身支度もそこそこにパンに齧りつき始めた古城を見つめて、不安げに溜息をついていた。

「あたし……どうしたの、今……？」

もやもやとした感情の正体を確かめるように、胸元を押さえている妹の呟きに、占城はまだ気づかない。

2

久々に訪れた教室は、やけに閑散とした印象があった。もうすぐ始業時刻だというのに、三割ほどの生徒がまだ登校していない。休みボケで寝坊しているのかもしれない。こんなことなら俺ももう少しゆっくり寝ておくんだった、などと羨ましく思いつつ、古城は自分の席に着く。

「おはよ、古城。久しぶり……でもないか」

物憂げに声をかけてきたのは、近くの席にいた藍羽浅葱だった。

校則違反すれすれまで着崩した制服と、華やかな髪型はいつもと同じ。だが、今の彼女は古城同様、どこかくたびれた雰囲気を漂わせている。やはり彼女も本土の魔獣騒ぎに巻きこまれて、紘神島に戻って来た直後なのだ。

「うーっす。なんかおまえが制服着てるのって久しぶりに見るな」
「余計なこと思い出させないでよ。忘れて！」
浅葱が歯を剝いて占城を睨んでくる。その頬はかすかに赤らんでいた。ゼッケン付きスクール水着風パイロットスーツを無理やり着せられたことが若干のトラウマになっているらしい。
「おはよう、浅葱。暁くんも」
そんな浅葱の背後から、長身で大人びた女子生徒が声をかけてくる。クラス委員の築島倫だ。休み明けでだらけた表情の生徒たちが多い中、さすがに彼女だけは普段と変わらない凛々しい印象を保っている。
「ああ、お倫……おはよ」
「築島かー……」
「あなたたち、なんだか疲れてない？」
どんよりした声で答える古城たちを見て、倫は訝しむように眉を上げた。
浅葱が力無く微笑んで首を振る。
「そう見える？」
「本土から帰ってきたばかりだからな……そのせいかもな」
「え？　暁くんも本土に行ってたの？」
倫が驚きに目を瞬いた。瞳に好奇の光を浮かべて、感心したように占城を見つめてくる。
「浅葱も一昨日まで本土にいたのよね？　それってもしかして二人で……あらあら……」
「あらあらじゃないわよ。たまたまよ、たまたま！」
浅葱が猛烈な勢いで反論した。古城も溜息混じりに肩をすくめて、
「俺は祖母さん家に妹を迎えに行っただけだよ」
「あたしは都内で買い物。一緒に行ったのは〝戦車乗り〟よ。知ってるでしょ、リディアーヌ・ディディ

エ。古城は全然関係ないから」

「ふーん、そうなんだ。まあ、そういうことにしておいてあげる」

倫がニヤニヤと口元をほころばせて言った。娘の言い訳を聞き流す、物分かりのいい母親のような表情だ。浅葱は拗ねたように頬杖を突いて、

「しておくもなにも、事実だからね」

「でも、向こうでも浅葱に会ったんでしょ？」

「いや、会ったっていうか、あれは――」

唐突に倫に視線を向けられて、占城は反射的に返事をしてしまう。

「馬鹿……！」

なぜおまえはそんな余計なことを言うのか、と浅葱が目元を覆って天を仰いだ。くすくす、と倫が声を出して笑い出す。

その直後、首にヘッドフォンを引っかけた男子生徒が、寝不足気味の目をこすりながら教室に入ってきた。矢瀬基樹だ。

「ういーっす……朝からなに揉めてんだ、おまえら」

「なんでもないわよ」

これ以上、ひやかされてはたまらないと思ったのか、あっちいけ、と言わんばかりに矢瀬を追い払おうとする浅葱。矢瀬は、そんな幼なじみの仕打ちを気にも留めずに、

「ふーん……まあいいや。ほら、東京土産。喰ってくれ」

そう言って、空港の売店で買ったとおぼしき菓子の紙袋を占城たちの前に置いた。

「あんたも本土に行ってたの？」

さっそく浅葱が袋を破いて、中のチョコ菓子をひとつ取り出す。

矢瀬とは初詣のあとで別れたきり、連絡を取っていなかった。彼が島外に出かけていたというのは、占城たちも初めて聞く情報だ。

「まあ、なんかいろいろと事情があってな……とにかく疲れたぜ……」

ぐったりと机に突っ伏しながら、弱々しい声で矢瀬が呟く。

「なにはともあれ、無事に帰ってこられてよかったわね」

倫は占城たちを見回して、励ますような口調でそう言った。

奇妙に意味深な彼女の言葉に、どういう意味だ、と古城は眉を寄せる。

「そういや、遅刻してるやつが妙に多いな？」

「暁くん、今朝のニュース、見なかった？」

倫が少し意外そうな表情を浮かべて訊いてきた。見てない、と古城は素直に首を振る。屈沙がめずらしくテレビをつけていたので少し気になってはいたのだが、寝坊気味だった今朝の古城にはニュースをチェックする余裕はなかったのだ。

「紘神島に到着予定だった船が昨日から一隻も着いてねーんだよ。理由は色々みたいだけどな。故障だったり座礁だったり、船内で食中毒が発生したり」

「マジか……」

大雑把な矢瀬の説明に、占城は唖然として訊き返す。船舶事故の話は屈沙もしていたが、そこまで大事になっているとは、さすがに思っていなかった。それだけの事故が立て続けにすべて起きたのだとしたら、偶然にしてもすごい確率だ。

「そういえばあたしが通販で買った荷物が届いてなかったんだけど、もしかしてそのせい？」

「多分、そうじゃない？　飛行機も軒並み欠航みたいだし。なに買ったの？」

不安げな表情を浮かべた浅葱に、倫が訊いた。

浅葱は、この世の終わりかというような大げさな態度で頭を抱えて、
「プリン専門店の新作スイーツとパソコン用の増設量子ナノメモリ……うー、賞味期限がー……」
「なにそのよくわからない組み合わせ……まあ、浅葱らしいけど」
心配して損した、と言いたげに倫が息を吐く。
「航空便の欠航は、昨日からの乱気流の影響らしいな」
矢瀬が、他人事のような雑な口調で補足した。ああ、と古城は納得して、
「それで紘神島に戻ってこられなかった連中がいるのか」
「紘神島行きの飛行機なんて、一日に三、四便だしね。こういうときに人工島は不便よね」
微妙に落ちこんだ表情のまま、浅葱が言う。船と飛行機がまとめて欠航になった結果が、この閑散とした教室というわけだ。
「もうちょい早く欠航してくれてりゃ、俺も少しは楽だったのにな……」
その矢瀬が、突然、電気に撃たれたように勢いよく顔を上げた。
なぜか遠くを見るような目をして、矢瀬がぼそぼそと呟いた。なにがあったのかは不明だが、本土でよほど苦労したらしい。MARが……密輸が……などと口の中で延々と愚痴っている。
まるで大きな物音に驚いた大型犬のような姿だった。
「矢瀬？　どうした？」
「ああ、いや。なんでもない」
不審な顔の古城を見上げて、矢瀬がいつものようにヘラヘラと笑った。だが、その頬は硬く強張ったままだ。

「なんでもない……よな……？」

自分自身に言い聞かせるような口調で、矢瀬が頼りなく独りごちる。

始業のチャイムが鳴り始めたのは、それからすぐのことだった。

3

人工島である絃神島には、地盤強度の関係上、いわゆる超高層ビルというものが存在しない。代わりに市街の中心部には、同じような高さの中層ビルが密集する形になっている。

そのビル群の中でも、特に目立たない地味な建物の屋上に、二人の少女が、寝そべるような姿で伏せていた。

身長百五十センチに満たない小柄な少女だ。年齢は十代の半ばほど。身に着けた白いシャツと吊りスカートのせいで、名門校に通う小学生のように見えなくもない。

顔立ちも幼く、気弱げだ。やや吊り目がちの大きな瞳が可愛らしいが、取り立てて目立つような容姿ではない。ただ一箇所――頭部に生えた大きな獣の耳を除けば、だが。

「聞こえますか、ディセンバー？」

少女が、床に置いたスマートフォンに向かって呼びかけた。

『こちら、ディセンバー。聞こえてるよ、カーリ』

スマートフォンからはすぐに返事があった。緊張感の乏しい、おっとりとした口調。その声に少女は、どこか安堵したような表情を浮かべる。

「カーリ、配置につきました。視射界、問題ありません」

『了解。対象を乗せた車両は、人工島西地区十四番大街路をキーストーンゲート方面に移動中。三百秒以内に

予定地点に到着するよ』

「こちらも目視で確認しました。狙撃準備に入ります」

カーリと名乗った獣耳の少女は身体を起こし、手元に置いてあったケースを開けた。

ースだ。しかしケースの中身は楽器ではなく、軍用の大型ライフルだった。ブルパップ式の対物狙撃銃だ。

『はいはい。データ送るね』

「確認しました」

スマートフォンの画面に表示されたのは、ディセンバーが計測した様々な情報だ。風向き、風速、湿度、気温、大気密度とターゲットの服装。

『あとは任せるよ。カーリの判断でやっちゃって』

「了解。感謝します、ディセンバー」

『どういたしまして』

ディセンバーの明るい声を聞きながら、カーリは伏射姿勢を取った。照準器の中に見えるのは、乱立するビルとビルの間のわずかな隙間だ。しかしカーリにはそれだけで十分だった。

照準器の中に切り取られた景色は、高級ホテルのエントランスだ。

人間離れしたカーリの鋭敏な聴覚が、九百メートル先を移動する乗用車の気配を正確にとらえる。ブレーキの擦過音。ホテルのドアが開き、助手席に乗っていた二人目の護衛も。そして彼らに挟まれて、小柄な老人が車から出てくる。狙撃のチャンスは、そこから建物に入るまでのわずか数メートル。

身体に染みついた感覚を頼りに、風や大気状態によるわずかなブレを補正。カーリは静かに引き金を引いた。マズルブレーキからガスが噴き出し、五十口径弾特有の鈍い反動がカーリを襲った。それでもカーリは冷静に、撃ち放たれた銃弾の行方を追っている。

獣人種特有の動体視力は、狙撃対象の頭部がザクロのように弾け飛ぶ瞬間を、最後までしっかりと見届けていた。

すべては一瞬の出来事だ。九百メートルの彼方より飛来したフルメタルジャケットの殺意。自分の身になにが起きたのか、狙撃対象は最後まで理解できなかっただろう。

「着弾を確認。撤収します」

役目を終えたライフルをチェロケースに収納しながら、カーリが告げた。

『さすがね、カーリ』

スマートフォンの向こう側から、ディセンバーの優しい声が聞こえてくる。その言葉に誇らしさを覚えながら、カーリは小さく首を振った。

「いえ。感謝します、ディセンバー」

4

学生食堂の片隅――陽当たりのいいテラス席で、クラスメイトの進藤美波と甲島桜、そして暁凪沙も一緒だ。

彩海学園の学食は生徒の間でも評価が高く、特に昼休みはいつも混み合っている。高等部の先輩たちに気を遣って、中等部の生徒は普段あまり学食を使わない。しかし今日に限っては人気のテラス席にも空席が目立ち、雪菜たちも気兼ねなく利用することができた。船舶事故や飛行機の欠航の影響で、欠席者が続出したせいだろう。

雪菜たちのクラスでも六人の生徒が休んでいたし、教師の不在で授業の半分は自習になった。だが、雪菜たちを朝から困惑させていたのは、それとは別の問題だった。

暁凪沙のことである。
「ねえ、雪菜。あんたたち、冬休みになにかあったの？」
皿の上でパスタをフォークに巻きつけながら、通称シンディこと進藤美波が訊いてきた。
暮れているような口振りだ。
「なにか……って？」
雪菜は食事の手を休めて訊き返した。もっともシンディの言いたいことは、説明されるまでもなく薄々わかっている。
「ほら、あれ」
「凪沙ちゃん？」
予想どおりシンディが目配せで指し示したのは、窓際に座る凪沙の横顔だった。
ツケにも手をつけずに、凪沙はぼんやりと中庭を見つめている。
「なんか、らしくないでしょ。体調が悪いってわけでもなさそうなんだけど……」
「そうだね」
雪菜も重々しく同意した。普段の凪沙はとにかく饒舌で、常人の三倍くらいはよく喋る。その賑やかさが凪沙の魅力でもあるのだが、それだけに沈黙を続ける彼女の違和感は半端ではなかった。なにかよくないことが起きる前兆ではないのか、とさえ疑ってしまう。
「冬休み、本土に行ってたんだっけ？」
雪菜を見つめて、桜が淡々と訊いてきた。
「うん。凪沙ちゃんはお祖母さまのところに」
「凪沙は……？　そう……じゃあ、雪菜と暁先輩は？」
「わたしたちは――」

まるで面接官のような桜の質問につられて、雪菜は思わず口を滑らせる。ほほう、と興味深そうに身を乗り出してくるシンディ。

「あなたたちはなにをしてたのかな？」

「あの、本土で凪沙ちゃんのお父さまとお祖母さまが怪我をして、それで、わたしも先輩と一緒に凪沙ちゃんを迎えに行くことになって――」

要らぬ誤解を招かないように、雪菜は慎重に言い訳する。時系列に多少の違いはあるものの、おおむねそれらは事実だった。

「ああ、そうなんだ。そっか。そりゃ新年早々大変だったね」

シンディが心配そうな口調で言った。意外に気を遣うタイプなのだ。

「もしかして凪沙はそれで落ちこんでる？」

「ううん。それはないと思うけど」

雪菜は小さく首を振った。暁緋沙乃はすでに退院しているはずだし、暁牙城は重症患者とは思えないほど元気で、昨夜も看護師にセクハラするなと病院からクレームが来たらしい。凪沙が落ちこむほど心配する必要があるとは思えない。

「噂をすれば」

桜が唐突に指摘した。彼女が見つめていたのは、学食の自動販売機コーナー。暁古城と藍羽浅葱が二人並んで買い物をしているところだった。

「ああ、暁先輩。藍羽先輩も一緒かあ……仲いいねえ、相変わらず。まあ、お似合いだけど」

シンディが少しだけうらやましそうな口調で言う。

炭酸飲料のグレープとオレンジ、どちらが美味いかで言い争っている古城たちの姿は、お世辞にも色気のある距離感とは言えないが、遠目には仲睦まじく見えなくもなかった。

その光景にかすかな胸のざわつきを覚えて、雪菜は唇を固く引き結ぶ。

そんな雪菜のすぐ傍で、バキ、と不穏な音が鳴った。

「……バキ？」

なにかがへし折れたような破壊音に、シンディが振り返って雪菜を見た。

違う違う、と雪菜は慌てて首を振る。なんとなく面白くなかったのは事実だが、雪菜が割り箸を無表情に手の中で折ったのは、もっと意外な人物だ。

それまでぼんやりと外を見ていたはずの凪沙が、古城たちを見つめて唇を噛んでいた。大きく見開かれた彼女の目から、ポロポロと涙がこぼれ出す。

「凪沙ちゃん……!?」

「な、凪沙？　どうしたの？」

動揺したのは雪菜たちだった。いくら今朝から様子がおかしいとはいえ、こんなことで凪沙が泣き出すとはさすがに思っていなかったのだ。

原因がわからないことが、余計に雪菜たちを戸惑わせる。

凪沙と古城は比較的仲のいい兄妹だ。が、だからといって凪沙が浅葱に嫉妬するとも思えない。彼女は浅葱によく懐いていて、実の姉のように慕っているのだ。

「え？　あれ……どうしたんだろ、あたし……」

自分でも驚いたようにそう言って、凪沙はこぼれ落ちた涙を見つめた。凪沙自身、泣いている理由が理解できずにいるらしい。

「大丈夫？」

桜がハンカチを差し出して訊く。

それを借りて濡れた頬を拭きながら、凪沙は、へへ、と弱々しく笑った。

「うん、もちろん。でも、ごめん。あたし、先に戻るね」
ほとんど手つかずの食事のトレイを持って、凪沙が学食の出口へと歩き出す。
シンディは、慌てて彼女を追いかけようとしたが、途中で思い直したように腰を下ろした。今はそっとしておいたほうがいい、と判断したのだろう。
「本当に大丈夫かな……？」
それでも不安そうにシンディが呟く。桜はさっきまで占城たちがいた自販機置き場を眺めて、
「やきもち？」
「まさか」
今さらでしょ、とシンディが両腕を広げた。そうね、と桜も首肯する。古城と浅葱が一緒にいるのは今に始まったことではない。見慣れすぎて、もはや冷やかす気にもなれないほどだ。
なのにどうして凪沙がショックを受けているのか——首を傾げる二人の傍で、雪菜だけが、険しい表情を浮かべていた。
「今のは……まさか……」
思わずそう呟いて立ち上がる。その雪菜の背中が強く引かれた。ふと振り向けば、シンディと桜がそれぞれ雪菜の制服の裾をつかんでいる。
「こらこら。あんたは追いかけちゃ駄目だってば」
そう言ってシンディが雪菜にウインクをする。雪菜はきょとんとした表情になって、
「え？」
「もし本当にやきもちだったときに、話がややこしくなる」と桜。
「ち……違うの。そうじゃなくて……」
凪沙に起きた異変の原因に心当たりがあるのだ、と言いかけて雪菜は言葉を呑みこんだ。彼女の肉体に隠さ

れた秘密は、迂闊に口外できる代物ではない。
「ちゃんとフォローしとくからさ。ここはあたしたちに任せて」
「とりあえずこれ、返却をお願い」
空になった食器を雪菜に預けて、シンディと桜が学食を出て行く。
二人の背中を見送って、雪菜は深い溜息をついた。
暁 凪沙の中には〝十二番目のアヴローラ〟――かつての第四真祖の魂が眠っている。それが数日前の神縄湖の事件で証明されたことだった。
凪沙自身は、おそらくまだそれを自覚していない。だが、もしもアヴローラの魂が、それはアヴローラの凪沙の不安定な精神状態にも説明がつく。
たよりもずっと危険な状態なのではないか、と雪菜は恐れている。
どうすればいいのだろう、と悩んでも、もちろん答えは出なかった。
古城に相談するわけにはいかない。彼はアヴローラとの記憶の大部分を失っているはずだし、凪沙の危機をヴローラを利用しようとして凪沙が侵蝕される原因を作ったといって獅子王機関に報告することもためらわれた。アに、前触れもなく突然現れた影が立ちはだかる。
半ば放心状態のまま雪菜はふらふらと立ち上がり、片付けを済ませて学食を出ようとした。その雪菜の前
西洋人形のような豪奢なドレスを着た、小柄な女性だ。
「ここにいたか、転校生」
「南宮先生……？」
「悪いが、貴様に相談がある。少しつき合ってもらえるか」

那月は、なんの前置きもなく、一方的に用件を切り出してきた。いつも余裕を漂わせている彼女にしては、めずらしいことだ。そのことに雪菜は戸惑った。

「相談……ですか？　でも……」

雪菜が警戒の表情を浮かべて言葉を濁す。そもそも警察庁所属の国家攻魔官たちは、商売敵である獅子王機関とは基本的に仲が悪い。その国家攻魔官である那月が、雪菜に助言を求めているという状況が異常なのだ。ひどく嫌な予感がした。

だが、那月は雪菜の逃げ腰な反応を予想していたのか、ニヤリと意地悪く微笑むと、

「素直に従わないというのなら、泣くぞ？」

「は、はい？」

目を白黒させる雪菜の前で、那月は両手で目元を覆った。うえーん、と抑揚のない声を出しながら、わざとらしく肩を震わせる。どこからどう見ても演技だが、傍目には嘘泣きとはわからない。まるで雪菜が那月をいじめているような光景だ。

周囲の視線が集まってくるのを、物理的な圧力として雪菜は感じた。それでなくても那月の存在は目立つのだ。中等部の転校生が、幼女のような見た目の女教師を泣かせている——そんな状況が注目されないはずがない。

「あ、あの……わかりましたから……！　わかりましたから！」

雪菜はたまりかねてそう叫んだ。これ以上、学校内で変な噂が立ったら、最悪、第四真祖の監視任務にも支障が出かねない。

「では行こうか」

あっさりと嘘泣きをやめた那月は、立ち尽くす雪菜を見上げて無表情に言った。

雪菜は泣き出したい気分で嘆息しながら、とぼとぼと彼女のあとに続いたのだった。

ディセンバーの乗った白いスクーターが、ビル街の狭い路地を走っている。

電気モーター駆動の車両が主流になっている絃神島では、ガソリンエンジンで走る旧式スクーターは、ほとんど骨董品同然だ。パラパラと間の抜けたエンジン音と排気ガスの白煙が、悪い意味でひどく目立っている。

そのエンジンの振動に合わせて、ディセンバーは占い童謡をハミングしていた。

幼い顔立ちの異国人の少女だ。分厚いラバーソールの靴を履いてはいるが、それでも身長は百六十センチに満たないだろう。服装は、着古したスタジャンにデニムのミニスカート。半キャップ型のヘルメットを被って、水中眼鏡のようなゴーグルを嵌めている。

やがてディセンバーはスクーターを減速させて、占い雑居ビルの駐輪場に止めた。

老朽化して解体を待つ廃ビルだ。人居者たちはすでに引っ越しを終えて、無人のまま放置されている。しかしディセンバーは敷地の裏手に回ると、非常階段から建物の中へと入っていった。誰もいないはずのビル内に、かすかな人の気配がある。

「ただいま、ロギ」

狭い階段を上りきったところで、ディセンバーは呼びかけた。

その声に反応したのは、ソファの上に寝そべっていた人影だ。細身の身体に無数の留め金のついたコートを着た、中性的な美貌の少年だった。完全に左右対称の人工的な顔立ちと、自然界には存在しないはずの藍色の髪。それらの外見的特徴が、彼の正体を表している。

錬金術と科学によって生み出された人工の生命体――ホムンクルスだ。

「買い喰いかい？　ディセンバー……？」

読みかけの雑誌を放り出して、ロギと呼ばれた少年がぶら下げている買い物袋だ。

「帰りが遅いから心配してれば……またそんな無駄使いして、先生に怒られてもしらないよ」

「だって季節限定のお正月ネコマたんが、どうしても欲しかったのよ」

ディセンバーはそう言って、キーホルダーに取りつけたマスコット人形を掲げてみせる。お目当ての人形を手に入れるため、コンビニにあったお菓子を買い占めてきたらしい。

「そうだ、ロギ。ダブっちゃった子は、あなたにあげる」

「要らない」

大量のマスコットを差し出してくるディセンバーに、ロギは冷たく言った。

「そんなことよりも、カーリは？」

「第二目標まで抹消済み。次のセーフハウスで合流するわ」

「ふーん……狙撃、成功したんだ」

「さすがはあたしのカーリね。予定どおりよ」

安堵の呟きを洩らすロギを見て、ディセンバーは誇らしげに微笑んだ。

脳天気な彼女の口振りに、ロギはやれやれと首を振る。

「そろそろ警戒が厳しくなってくるころだね。情報封鎖もそろそろ限界だろうし」

「そうだね」

ディセンバーはうなずいた。

最初の狙撃から半日近くが経過した今も、事件のことは報道されていない。おそらく人工島管理公社が手を回して、情報の拡散を阻止しているのだろう。だが、紘神市の要人が白昼堂々、二人も暗殺されたのだ。いつまでも秘密にしておけるものではない。

「次が本命よ。大丈夫？」
「誰に向かって言ってるのさ？」
心配そうに尋ねるディセンバーを睨んで、ロギは不満げに唇を曲げた。無造作に広げた彼の掌の中に、ゆらりと青い陽炎が揺れる。
ディセンバーは明るく微笑んで、そんなロギの髪をくしゃくしゃと撫でた。
「もちろん信用してるわ、ロギ。大好きよ」
「はいはい」
ロギは鬱陶しげに身をよじるが、無理にディセンバーの手を払いのけようとはしなかった。
ディセンバーたちの騒ぎ声を聞きつけたのか、奥の部屋の扉が開いて、新たな人影が現れる。
顔立ちはそこそこに整っているが、無表情で目つきの悪い少女だった。首には長いマフラーを巻いて、だぶだぶの分厚いコートを着ている。
「おかえり、ディセンバー」
カップ入りのアイスを食べながら、起伏の乏しい声で少女が言った。ディセンバーはそんな彼女を驚いたように見つめて、
「ラーン！　それ、あたしのアイス！」
「溶けるといけないと思って食べた」
ラーンと呼ばれた少女が、悪びれることもなく答えてくる。ディセンバーは、ひどい衝撃を受けたようにぐったりと床に膝を突き、
「うう……るる家の貴重な季節限定フレーバーが……」
「美味しい。でも、キャラメル味のほうが好き」
そう言ってラーンは、空になったアイスのカップを、ゴミ箱代わりの段ボールに放った。

ディセンバーは子どものように頬を膨らませて、恨みがましい視線をラーンに向ける。しかしラーンは表情を変えない。ディセンバーは根負けしたように溜息をついて、

「……薔薇の準備は？」

「終わった。あとは時が満ちるのを待つだけ」

「そう。お疲れさま」

ディセンバーが素っ気なく言った。

するとラーンは、わずかに不満そうな口調になって、

「褒めてくれないの？」

「アイスの恨みは海より深いのよ」

「……」

意地悪な口調で答えるディセンバーを、ラーンは無表情に見返した。表情はほとんど変化していないのに、その姿には、どことなく捨てられた犬のような寂しげな雰囲気がある。

ディセンバーは、そんなラーンの様子に耐えきれなくなったのか、

「嘘よ、ラーン。大好き」

そう叫んで勢いよく彼女に抱きついた。

「苦しい」

力任せに抱きしめられたラーンが無感動にうめく。しかしディセンバーはしばらく無視していたが、

「時間だよ、ディセンバー」

不意に彼はそう言うと、音もなく一瞬で立ち上がった。ディセンバーは、手首に巻いた男物の腕時計を確認して、ちぇ、と名残惜しそうにラーンを解放する。

「仕方ない。じゃあ、ロギは行動を開始して。ラーンは、移動して先にカーリと合流」
「ディセンバーは？」
ラーンが短く訊いてくる。ディセンバーは微笑んで人工生命体の少年を指差し、
「あたしはロギのバックアップ」
「要らない」
ロギが間髪いれずに即答した。まるでお節介な姉に反抗する、生意気な弟のような態度だ。
しかしディセンバーはそれでもめげずに、
「手は出さないわ。見てるだけ」
「なおさら要らない」
「どうしてよ!?」
「邪魔だから」
「ロギの意地悪！」
幼い子どものように地団駄を踏んで拗ねるディセンバー。ロギはやれやれと首を振った。
「好きにすれば」

6

生徒指導室のソファに座って、暁　占城は南宮那月と向き合っていた。
隣には、連れてこられたばかりの雪菜の姿もある。
テーブルの上には高価そうなティーカップが配置され、那月の助手である人工生命体の少女――アスタルテが淹れた紅茶が、上品な匂いを漂わせていた。

那月は悠然と脚を組み、レースの扇子を広げている。

「――で、この鎖はいったいなんなんですかねえ……？」

そんな那月をジト目で睨み、占城は低い声で質問した。

古城の両手脚は、金色の鎖で拘束されて、ほとんど身動きが取れない状態だ。那月はそれ以上の反論を諦める。ほんの数日前に占城を襲撃してきた犯人と、同一人物とは思えない余裕の態度だ。逆に言えば、正月に占城たちと戦ったときの那月は、まるで本気ではなかった、ということなのだろう。

「そんなことよりも、本題だ。アスタルテ、資料を出せ」

るなり、占城の全身を縛り上げ、無理やりこの部屋に連行したのだった。

「私が優しく声をかけてやったのに、いきなり逃げだそうとするからだ」

おまえが悪い、と言わんばかりの口調で、那月が占城に言い放つ。

那月の暴虐に荷担する形になった雪菜は、何ともいえない微妙な表情を浮かべて、古城から目を逸らしている。

占城は不満げに唇を歪めて、溜息混じりに那月たちを見返し、

「那月ちゃんと姫柊が一緒に俺を追いかけてきたら、わけがわからなくても普通は逃げるだろ。どうせろくな用件じゃないだろうし。正月にあんなことがあったばかりなんだし」

「わ、わたしも南宮先生と同じ扱いなんですか……!?」

占城の正直な発言に、雪菜が傷ついた表情を浮かべた。

一方の那月は、すっとぼけた表情で紅茶をすすり、

「正月？　さて、なんのことだ？」

「いや、あんたがそれでいいんならいいけどな」

あまりにも堂々とした那月の開き直りっぷりに、占城はそれ以上の反論を諦める。ほんの数日前に占城を襲

「命令受諾（アクセプト）――」

メイド服姿の人工生命体（ホムンクルス）が、テーブルにコピー用紙の束を広げた。

座礁（ざしょう）や衝突（しょうとつ）事故を起こした船の写真と、被害状況の報告書。それらの内容をまとめた一覧表。すべて絃神島（いとがみじま）周辺で発生した船舶事故の資料である。アスタルテが作成したものらしい。

「これって、昨日の海難事故か？　絃神島行きの船が欠航になったってやつ」

鎖で手脚を縛（しば）られたまま、占城が訊（き）いた。倫（りん）から話は聞いていたが、実際に資料で見せつけられると、事故の重大さがよくわかる。

しかし神妙（しんみょう）な顔つきの占城を見返して、アスタルテは首を振った。

「否定（ネガティヴ）。これらはすべて本日正午までに発生した事故の報告書です」

「本日正午まで……って、今日だけで、この件数なのか!?」

積み重ねられたコピー紙の厚みを眺めて、占城は今度こそ絶句した。雪菜も唖然（あぜん）としたように息を呑（の）んでいる。

「事故の総数は、届け出があったものだけで二十一件。機関または電装系の不調による漂流が七件。衝突および座礁が四件、船員の傷病が二件、その他八件――」

アスタルテが事務的な口調で補足する。が、具体的な内容を聞くまでもなく、それが異常な数字であることは明らかだった。単なる偶然で片付けられる数ではない。

「これが事故の発生地点だ。どう思う？」

那月がテーブルの上に地図を広げた。赤インクで書かれたバツ印が、それぞれ事故現場を示しているのだろう。事故は絃神島を中心に、広範囲にわたってランダムに起きている。

「どう思うって言われても……事故現場は、けっこうバラけてるんだな」

「そうだな。被害に遭（あ）った船に共通点は特にない。沿岸警備隊（コースト・ガード）の巡視船から、漁船まで、見事にバラバラだ。

報告の数字には含まれていないが、海外船籍の密輸船も何隻か、漂流中のところを拿捕されたらしい」

那月がつまらなそうな口調で言った。

「強いて共通点を挙げるなら、事故に遭った船は、すべて絃神島に向かっていたな、ということくらいだな。そして辿り着けないまま、本土に引き返している」

「絃神島から出て行く船は無事なのか？」

占城は疑問の表情で訊き返した。これだけの事故が起きていながら、絃神島から離れていく船にはまったく被害が出ていない——そんなことがあり得るのか、と不思議に思う。

「被害はない。それは航空機も同じだ。おかげで島内の港と空港はガラガラだよ。島から出ていく一方だからな」

「そんなことになってたのか……」

事態の深刻さを理解して、古城は声を震わせた。

絃神島に近づく船や航空機だけを狙って事故を起こしているのだとしたら、それは明らかに人為的な攻撃、だ。おそらく犯人の目的は、輸送経路を遮断して絃神島を孤立させることだろう。

人工島である絃神島では、生活物資の大半を本土からの輸送に頼っている。

その補給路が断たれるということは、〝魔族特区〟存続の危機なのだ。

「南宮先生が、暁先輩を拘束していた理由がようやくわかりました」

占城を縛る鎖を見つめて、雪菜が言った。

ほう、と那月が面白そうに片眉を上げる。

「この異変が、暁先輩の仕業ではないかと疑っていたんですね？」

「まあ、そういうことだ」

「……は？　俺のせい？　なんでそうなる？」

古城が間の抜けた顔で那月を見た。この金鎖が、単なる嫌がらせではなかったとしても、だからといって自分が縛られている理由に納得できたわけではない。

「紘神島に近づく船を片っ端から追っ払って、俺になんのメリットがあるんだよ？」

「それを確かめるために貴様を縛らせてもらったのだがな」

「違法捜査じゃねーか！　横暴だろ！」

「ですが、この事件は、魔術的な結界によって引き起こされている可能性が高いです」

雪菜が真面目な口調で告げてくる。

「それはそうなんだろうけど」と古城も認めた。

被害に遭った船が、隻や二隻なら、事故を装った破壊工作の可能性もある。だが今回は被害の件数が多すぎているると考えたほうが船や航空機だけに発動する呪い、あるいは侵人者を攻撃する結界のようなものが展開されその場合、問題になるのは結界の効果範囲である。

船舶事故が起きた海域は、紘神島を中心とした半径百キロ以上の範囲に及んでいる。面積だけなら、首都圏をすっぽりと覆い尽くすほどの規模だ。

「これだけ広範囲に結界を展開できるほどの魔力源といえば、吸血鬼の真祖くらいだからな。貴様を捕まえれば、それで片付くと思っていたのだが。やれやれ、期待外れだったな」

「面倒なことになりましたね」

那月と雪菜が、横目で占城を眺めながら、落胆したように息を吐く。

占城は、居心地の悪そうな表情を浮かべて二人を睨み、

「なんで俺が無実だったのが悪いみたいな話の流れになってんだ……!?　ていうか、この鎖はもう要らねー

だろ。そろそろ外せよ！」
「では仮に、暁占城が原因ではないとして――」
「だから俺じゃねーっての」
苛立たしげにうめく古城を無視して、那月が雪菜に視線を向けた。
「魔導テロ対策の専門家である獅子王機関としての意見を聞かせてもらおうか。この規模の結界を展開する呪術に、心当たりは？」
「わかりません……が、可能性があるとすれば、風水術でしょうか」
少し考えて、雪菜がぼそりと答える。那月がハッとしたように動きを止めた。
「風水だと？　そうか、奇門遁甲か……！」
「はい」
「奇門……？」
動揺している那月の姿を、古城は怪訝な表情で眺めた。
「風水って要は占いだろ？　置物を置いたり、財布の色を変えて金運を上げたりするやつ……今回の事故と関係あるのか？」
呪術には疎い占城だが、風水の名前くらいは知っている。空港の売店には〝魔族特区〟名物の開運グッズが置かれているし、スマホアプリも出回っているはずだ。
「いえ……風水術の源流である式占は、占いであると同時に大規模な呪術でもあるんです」
沈黙を続ける那月に代わって、答えてきたのは雪菜だった。
「中でも特に兵法として発達したのが法奇門――天候と兵の生死を司る大規模軍事術式です」
「軍事術式……？」
「はい。気象条件や戦場の地形、兵士たちの上気や体調は重要な戦術要素ですから。それらを自在に操る風水

術は、現在でも世界中の軍事組織で大規模な研究が行われているんです」

「マジか……」

古城は、雪菜の説明に混乱した。風水術にそれほどの力があるのなら、たしかに今回の船舶事故を引き起こすことも可能だろう。軍事組織で研究されている、という理屈もわかる。

だが、それほどの術式が絃神島に対して使われているということは、つまり絃神島が軍事攻撃を受けているということではないのか――

「なるほどな。この付近の海域を流れている龍脈を利用すれば、絃神島を八卦陣で覆い尽くすことも不可能ではない、か」

那月が、空になったティーカップをテーブルに置いた。雪菜は曖昧にうなずいて、

「はい。ですが、これほどの規模の陣を、誰にも気づかれずに制御できる術者が実在するかどうかまでは――」

「タルタロス・ラプス」

那月が、雪菜の言葉を遮って言う。

「え？」

「一件だけ、似たような事例を知っている。欧州〝イロワーズ魔族特区〟崩壊事件――その首謀者の一人に、天才と謳われた風水術士がいたはずだ」

「イロワーズ……？」

どこだ、と古城が訊き返す。初めて耳にする地名だった。

雪菜は、記憶を辿るようにこめかみに指を当て、

「六年前に事故を起こして放棄された大西洋の〝魔族特区〟ですね？　あれは都市内の発電プラントの老朽化と、大嵐による洪水が原因だったはずでは？」

「表向きは、そういうことになってるな」
雪菜の質問に、那月はゆっくりと首を振った。
「だが、事実は違う。あれは人為的な破壊工作だ。あの都市は、滅ぼされたんだよ。名前も知られていないちっぽけな犯罪組織に、都市ひとつ破壊されたんだ。そんな情報が流れたら、世界中がパニックになる。特にイロワーズと同じ〝魔族特区〟ではな」
「だから嘘の情報を流したのか……？　そんなことができるのか？」
「揉み消した？」
「ろくに名前も知られていないちっぽけな犯罪組織に、都市ひとつ破壊されたんだ。そんな情報が流れたら、世界中がパニックになる。特にイロワーズと同じ〝魔族特区〟ではな」
「だから嘘の情報を流したのか……？　そんなことができるのか？」
「当然だ。日本政府を含めたあらゆる国際機関が、必死で揉み消したんだからな」
疑問の答えを、那月はあっさりと口にした。
「そんな出来事あったっけか？　全然覚えてないんだが……？」
当時は相当な騒ぎになったはずである。なのに占城は、その事件を知らない。
〝魔族特区〟と呼ばれる都市の数は多くない。その中のひとつが破壊されたのだ。
占城が首を傾げながら呟いた。
世界全体を見渡しても、
「だけど六年前って、つい最近のことだよな――」
逆に言えば、獅子王機関ですら、今の絃神島の状況は予想していなかった、ということにある。
組織の末端に過ぎない雪菜には、タルタロス・ラプスという組織の情報は伝えられていなかったのだろう。
那月に指摘されて、雪菜は沈黙した。
「壊し屋だ。金で雇われて魔導テロを行う破壊集団

古城は目つきを険しくする。ひとつの都市が壊されてしまったという事実そのものを消去する――そんなことが可能なら、もはや公表されている情報など、なにも信じられなくなってしまう気がした。

人々が真実を知る機会もないまま、都市は滅び、事件はなかったことにされた。そして破壊を引き起こした犯人たちは、今ものうのうと逃げ延びている。

しかし那月は、あれは例外だ、と言いたげに古城を見返し、

「都合のいいことに真実を知る人間は少なかったからな。生き残ったイロワーズの住人たちも、自分たちの身になにが起きたのか、ほとんど理解できていなかったはずだ」

「誰かが、その壊し屋たちに依頼して、今度は紘神島を潰そうとしてるのか……」

「その可能性があるというだけの話だ。タルタロス・ラプスの連中が、イロワーズを滅ぼした手口も解明されてはいないしな」

那月が冷静な口調で言った。

「ただ、イロワーズ崩壊の直前に、周囲の海域で不自然な事故が多発した記録が残っている。言われてみれば、現在の紘神島の状況によく似ているな」

「南宮先生は、タルタロス・ラプスの風水術上の素性を、ご存じなんですか？」

那月の口振りからなにかを感じとったのか、雪菜が前置きなしに質問する。

ふん、と那月が不機嫌そうに息を吐く気配があった。

「千賀毅人――年齢は、今なら四十歳前後といったところか。世界屈指の法奇門使いだ。欧州ネウストリアに軍事顧問として雇われていたこともある」

「そいつを捜し出して捕まえれば、八卦陣ってのは破れるんだな？」

古城が期待をこめた表情で確認した。千賀という男の過去を知っているような那月の態度が気になったが、あえて気づかなかったふりをする。

「理屈の上ではそうなるな。もし本当にこれがタルタロス・ラプスの仕業ならな」

そう言って那月は、背後に控えていた人工生命体の少女に顔を向けた。

「アスタルテ、特区警備隊に連絡だ。島内の監視網を総動員して、千賀毅人を捜索させろ。命令受諾」

アスタルテが、専用の通信端末を取り出しながら無表情に答える。

那月はそれを見届けると、ソファにもたれたまま優雅に指を鳴らした。テーブルの上の空間が波紋のように揺らいで、豪華な菓子を満載した三段重ねのケーキスタンドが現れる。

「特別に茶菓子を振る舞ってやろう、姫柊雪菜。さすがの私も大陸系の呪術は専門外だからな。貴様の意見は参考になった」

「いえ。わたしはなにも」

思いがけない那月からのもてなしに、雪菜はむしろ怯えたように首を振った。

そして那月は、美しい宝石のような瞳を占城に向けると、

「いちおう言っておくが、余計な手出しはするなよ、暁 占城」

「頼まれても出さねーよ」

古城がふて腐れたような口調で言った。風水術上とはいっても、千賀毅人の肉体そのものは常人とたいして変わらないはずだ。そんな敵が相手では、古城の力は役に立たない。世界最強の吸血鬼である第四真祖の眷獣は、強力すぎて人間相手に使えるような代物ではないからだ。

「そんなことより、いい加減、この鎖をなんとかしてもらえませんかねえ」

金色の鎖で縛られたままの両手を上げて、占城が不満げに那月を睨む。

那月はうんざりしたように占城を見返し、

「やれやれ、まったく世話の焼ける」

「あんたのせいだろうが!?」

占城がキレ気味に声を荒らげた瞬間、通信端末を操作していたアスタルテが、静かな声で那月を呼んだ。

「教官」

「どうした、アスタルテ？」

那月が目つきを鋭くした。アスタルテは機械的な口調で淡々と告げてくる。

「特区警備隊本部より緊急連絡。人工島管理公社所属の全攻魔師に、第二種警戒態勢が発動されました」

「第二種だと……!?」

アスタルテが差し出した通信端末を受け取って、那月が短いうめきを洩らした。

ただならぬ彼女の反応に、占城と雪菜は顔を見合わせる。

「なんだ？　なんかヤバいのか、那月ちゃん？」

「先ほど、人工島管理公社の上級理事二名が狙撃された」

「……狙撃？」

現実感の乏しいその言葉を、占城は呆然と繰り返した。

紘神島で暗殺事件が起きた。撃たれたのは人工島管理公社の理事。現在進行形で紘神島を封鎖している風水術の結界とも無関係ではないはずだ。

最初に物流を停滞させ、その対策をとるべき公社の幹部たちを消す――

紘神島を破壊するための布石が、ひとつひとつ正確に配置されていく。

「目的は公社の指揮系統の攪乱か……どうやら確定したな。これは〝魔族特区〟を標的にしたテロ攻撃だ。誰かが紘神島を破壊しようとしている」

幼く舌足らずなはずの那月の声が、古城の胸に重々しく響いた。

「タルタロス・ラプス……！」

無意識の古城の呟きが、噛みしめた奥歯の隙間から洩れる。

7

人工島管理公社のオフィスは、異様な雰囲気に包まれていた。

絶え間なく増えていく船舶や航空機の事故報告。停滞する物流と、それらが引き起こす経済的損失。そして上級理事二名の死亡――過去に類を見ない危機的状況だ。邪神の出現や魔力消失が紘神市内で観測されたときですら、公社がこれほどまでに騒然としたことはない。

公社の各部門が次々に機能不全に陥る中、事件の対策に追われていたのは、理事会直轄の部署である都市管理室長の矢瀬幾磨だった。

「そうだ、狙撃ポイントと狙撃手の割り出しを急がせろ。ルが洩れている可能性を考慮して、警備態勢を再構築する」

続々と積み上げられていく報告書に目を通しながら、幾磨が部下たちに指示を出す。全上級理事に護衛チームを派遣。外部にスケジュ

幾磨と彼の部下たちは、昨晩から一睡もせずに事態の収拾に奔走していた。それでも状況は悪化する一方だ。原因不明のまま連鎖的に都市の被害が拡大していく様を、ただ呆然と眺めているしかない。

「室長。航空局からの情報です。十三時現在、新規に発生した航空機事故が六件。同じく船舶事故多数。正確な数字については現在集計中とのこと」

「そうか。ここまで来るとさすがに疑いの余地はない、な」

青髪の秘書の報告を聞き終えた幾磨は、ぐったりと椅子にもたれて目を閉じた。

そんな幾磨の前に新しいコーヒーのカップを置きながら、秘書が確認してくる。

「大規模魔導テロ、ですか？」

「攻魔局の見解は？」

彼女の質問には答えずに、幾磨が訊き返した。人工生命体である秘書は、気分を害した様子もなく即座に答えてくる。

「現在、国家攻魔官四名からなる偵察班を、事故海域に派遣して調査中とのことです」

「最初の事故発生から四十八時間以上が経過して、まだそんな段階か。後手後手だな」

「はい」

秘書は表情を変えないまうなずいた。

幾磨は不機嫌な顔で黙りこむ。暗殺された二人の上級理事は、それぞれ人工島内の治安維持と登録魔族の管理を掌握している人物だった。彼ら二人の不在によって、人工島管理公社が所有する最大の戦力――特区警備隊の指揮系統が乱れている。おそらくそれが、一人を狙った理由なのだろう。

だとすれば、要人暗殺や物流の封鎖は、狙撃犯たちの計画の一部でしかないはずだ。

彼らの行動には、なにかほかの目的がある。より凶悪で非道な目的が。それがわかっていても、幾磨にはどうすることもできない。完璧に主導権を奪われてしまっている。狙撃犯たちは人工島管理公社の――〝魔族特区〟の急所を的確に突いたのだ。

「騒々しいな、室長」

理事控室から出てきた和服の男が、狼狽する幾磨たちを眺めて侮蔑の相を浮かべた。

人工島管理公社名誉理事にして、多数の巨大企業を傘下に持つ名門矢瀬家の最高権力者――矢瀬顕重。幾磨の実の父親だ。

「矢瀬会長……」

畏敬の念をこめた口調で、幾磨がうめく。顕重は冷厳な眼差しで幾磨を一瞥する。

「組織を預かる立場の者が浮き足立てば、末端の士気が乱れよう。神色自若に務めることだ」

「申し訳ありません」
幾磨は慇懃に頭を下げた。顕重が引き連れている取り巻きたちの男たちが、そんな幾磨に、嘲るような視線を向けてくる。幾磨の母親は顕重の正式な妻ではない。当主の息子とはいえ、妾腹である幾磨は一族の者たちに蔑まれる立場だった。
幾磨が自らの実力だけで、顕重の後継者と呼ばれる地位に上り詰めたことが、余計に彼らの敵意を煽っているのかもしれない。だが幾磨は、それに気づかないふりをする。
「会長はどちらに？」
「橋村市議との会談後、魔導協会の記念式典に出席の予定だ」
「記念式典……!?」
幾磨は驚愕に目を見張った。多数の人々が出入りする式典会場は、狙撃犯たちにとって絶好の舞台だ。
「ですが、今は特区警備隊に第二種警戒態勢が――」
「暗殺者ごときに怯えて、御簾の奥にでも引き籠もっていろと言いたいのか？」
顕重が幾磨を叱責する。巨大組織を統帥する財閥の長として、犯罪者に対して弱みを見せることは許されないのだ。
い。顕重は命の危険を冒してでも、それを実践するつもりなのだ。
「……警備を増員します。くれぐれも開けた場所に出ないようご自重を」
「了解だ」
顕重は厳かにうなずいて幾磨に背を向けた。彼らが出て行く姿を見送って、幾磨は重苦しい溜息をついた。
その直後、青髪の秘書が幾磨に呼びかけてくる。
「室長、南宮攻魔官から気になる情報が」
「南宮攻魔官？　〝空隙の魔女〟か……なんだ？」

「こちらの資料を――」

秘書に渡された通信端末をのぞきこみ、幾磨は小さくうめき声を洩らした。そこに表示されていたのは、攻魔局が束になっても突き止められなかった魔導テロ容疑者の情報だったのだ。

〝魔族特区〟破壊集団――タルタロス・ラプス。

「なぜ攻魔局は、こいつらに気づかなかった？」

「タルタロス・ラプスの情報は重要機密指定です。資料はすべて凍結書庫に。一般の捜査官には閲覧権限がありません」

怒りを露わにする幾磨に、青髪の秘書が淡々と回答した。

幾磨がチッと舌打ちする。

「すぐに情報の開示手続きを。それから獅子王機関に連絡を頼む。紘神市内には連中の工作員がいるはずだ。無理にでも協力を依頼しろ」

「受諾しました」

青髪の秘書が彼女の席に戻る。幾磨は必死に頭の中で、犯人確保のために投入できる人員を計算していた。

組織的な魔導テロと判明した以上、本来は、すぐにでも日本政府に協力を頼むべき案件だ。しかし捜査員の増援を要請したところで、紘神島行きの航空機はすべて飛行不能になっている。

おそらくこれも犯人たちが仕組んだ状況なのだろう。結局は、島内に残されたわずかな戦力だけで、タルタロス・ラプスに対抗するしかない。

「くそ……基樹を――覗き屋を呼び戻すか。だが、問題は――」

幾磨が焦りに唇を噛んだその直後だった。

ズン――

と、人工島全体が鈍く振動した。巨大建造物であるキーストーンゲートが、ビリビリと小刻みに震えてい

る。隕石が落ちてきたような衝撃だ。

積み上げられていたファイルが床に散らばり、オフィスの照明が何度も点滅を繰り返す。

「今の振動は？　なにがあった!?」

青髪の秘書に向き直って、幾磨が怒鳴った。

こんな状況でも、人工生命体の女は冷静だった。

「第三地下駐車場で火災発生。爆発物が使用された可能性があります」

「爆発物……だと？」

幾磨は一瞬、意識が遠のくような感覚を味わった。

特区警備隊の警備班は、人員の大半を狙撃の警戒に振り向けている。その警備の裏をかくようにして、爆発物を地下に仕掛けたというのか――

「室長！」

内線電話を受けていたスタッフの一人が、引き攣った表情で幾磨を呼んだ。

「第三地下駐車場には、矢瀬顕重名誉理事のお車が――」

ほとんど悲鳴と化しているスタッフの報告に、幾磨は言葉を失った。

端末を操作する青髪の秘書が、感情の籠もらない声で静かに告げてくる。

「矢瀬会長の生体信号――途絶しました」

8

暁　凪沙は、自分自身の変化に気づいていた。

おそらくは神縄湖で見た奇妙な夢がきっかけだ。
長い眠りから目覚めた直後のように、目に映るものすべてが懐かしく思える。
澄みきった青い海。真夏の空。
見慣れていたはずの絃神島の景色に、息苦しいほどの郷愁を覚えてしまうのだ。
そして古城と言葉を交わすと、胸が締めつけられるように切なくなる。
雪菜や浅葱に笑いかける彼を目にしただけで、涙が溢れてしまうほどに。
「うー……どうしよう。このままじゃ古城君と顔を合わせられないよ……！」
海辺の公園に一人で佇みながら、凪沙は苦悩に頭を抱えた。
古城と目が合っただけで胸がときめいたり、彼の何気ない仕草に一喜一憂したり——これではまるで恋する乙女のようだ、と凪沙は思う。馬鹿馬鹿しいと思いつつも、感情を上手く制御できない。このままではクラスの友人たちに、気づかれてしまうのも時間の問題だろう。
そのもやもやとした感情を持て余し、凪沙はついに学校を飛び出してしまったのだった。
「こんなの誰にも相談できないし……ホントなんだろ、この感覚。絃神島に戻ったら、少しは落ち着くと思ったのに」
海岸沿いの手すりに体重を預けて、凪沙はぐったりと息を吐く。
凪沙がいるのは、人工島南地区北端の海浜公園だ。海を挟んだ対岸には、楔形のキーストーンゲートの建物が見える。ここに来た理由は特にない。学校を出てなんとなく歩いているうちに、引き寄せられるように辿り着いていたのだ。
ぼんやりと景色を眺めながらも、頭の片隅では古城のことが気になっている。
その原因を、凪沙はなんとなく理解していた。
凪沙の中には、自分ではない誰かの魂が宿っている。そして、眠ったままの彼女の記憶が、凪沙の感情に影

響（きょう）しているのだ。

彼女の正体はわからない。だが、凪沙には、彼女が邪悪（じゃあく）な存在ではないという確信がある。

今の彼女は幼く無垢（むく）で、古城を見守ることだけを望んでいる。

だからこそ凪沙は彼女を受け入れたはずだ。

とはいえ、まさかそのせいで、こんな問題が起きるとは夢にも思っていなかった。

「どうしよう……」

凪沙（なぎさ）は、もう一度、戸惑いを口にする。

こんなとき、いったい誰（だれ）に相談すればいいのかわからない。

母親の暁（あかつき）深森（みもり）は凪沙の主治医だが、彼女は医者で、霊（れい）能力者ではない。祖母の緋沙乃（ひさの）は優秀な霊能力者だが、残念ながら彼女がいるのは、絃神島（いとがみじま）から遠く離（はな）れた西関東の山奥だ。

もちろんクラスの友人に打ち明けられるわけもない。

ましてや古城（こじょう）本人に相談するなど論外だ。

「夏音（カノン）ちゃんなら話を聞いてくれそうだけど、反応が読めなくてちょっと怖い……」

うう、と凪沙は頼りなくうめく。博愛主義者の夏音のことだから、古城のことが好きで困っていると言っても、なにが問題なのか理解してもらえない気がした。むしろ、もっと仲良くしろと後押しされてしまいそうだ。

結局、なんの答えも出せないまま、凪沙は、ぼんやりと海を眺めている。と――

「はい」

凪沙の背中側の首筋に、突然、冷たいものが押し当てられた。

「ひゃあっ!?」

まったく予期していなかった強烈な刺激に、凪沙は声を上げて飛び跳ねる。

振り返った凪沙が目にしたのは、よく冷えたアイスクリームのカップだった。見知らぬ少女が、アイスを持って立っている。

「食べない？　るる家のアイス。美味しいよ」

風よけのゴーグルをかけたまま、少女はにこやかに微笑んだ。

雪のように肌の白い、外国人の少女だ。最初の印象よりも、ずっと小柄だったているが、それでもかろうじて凪沙が見上げる程度の身長しかない。

「え!?　あの……どうして？」

警戒したというよりも、単純に驚いて凪沙は訊き返した。

少女は、凪沙の手に強引にアイスを押しつけると、

「なんか悩んでるみたいだったからさ。気になっちゃって。落ちこんだときには、ひどく真面目くさった口調でそう告げてくる。

少女の独特の雰囲気に巻きこまれて、凪沙は思わずうなずいてしまった。たしかに甘いものの力は偉大だ。

彼女の言うことにも一理ある。

「あの、ありがとうございます。お金、払います」

「いいのいいの。つき合ってもらうお礼ってことで。ほら、美味しいものは一人で食べるより、誰かと一緒に食べたいでしょ」

少女はそう言って、自分用のアイスを袋から取り出した。紘神島名物のるる家のアイスだ。付属の小さなスプーンでアイスを一口すくって、美味ーい、と子どものような歓声を上げる。

「ディセンバー」

「え？」

「あたしの名前。気に入ってるの。そう呼んでもらえたら嬉しい」

振り返った凪沙が目にしたのは、よく冷えたアイスクリームのカップだった。
見知らぬ少女が、アイスを持って立っている。
「食べない？　るる家のアイス。美味しいよ」
風よけのゴーグルをかけたまま、少女はにこやかに微笑んだ。
雪のように肌の白い、外国人の少女だ。最初の印象よりも、ずっと小柄だったているが、それでもかろうじて凪沙が見上げる程度の身長しかない。
「え!?　あの……どうして？」
警戒したというよりも、単純に驚いて凪沙は訊き返した。
少女は、凪沙の手に強引にアイスを押しつけると、
「なんか悩んでるみたいだったからさ。気になっちゃって。落ちこんだときには、ひどく真面目くさった口調でそう告げてくる。
少女の独特の雰囲気に巻きこまれて、凪沙は思わずうなずいてしまった。たしかに甘いものの力は偉大だ。
彼女の言うことにも一理ある。
「あの、ありがとうございます。お金、払います」
「いいのいいの。つき合ってもらうお礼ってことで。ほら、美味しいものは一人で食べるより、誰かと一緒に食べたいでしょ」
少女はそう言って、自分用のアイスを袋から取り出した。紘神島名物のるる家のアイスだ。付属の小さなスプーンでアイスを一口すくって、美味ーい、と子どものような歓声を上げる。
「ディセンバー」
「え？」
「あたしの名前。気に入ってるの。そう呼んでもらえたら嬉しい」

ゴーグルをヘルメットの上にずらして、ディセンバーと名乗った少女は目を細めた。光り輝くような青い瞳だ。

「あ、はい」
わかりました、と凪沙はうなずく。うんうん、とディセンバーは満足そうに微笑んで、
「それで、あなたは？　なんて呼べばいい？」
「凪沙です。暁　凪沙。漢字で書くとこんな感じ」
「ふんふん。暁凪沙ちゃん……ね」
ディセンバーの大きな瞳が、凪沙の目の奥をのぞきこんでくる。
意識の底まで見透かされるような不思議な感覚だ。それでいてどこか懐かしくもある。彼女とは初めて会った気がしない。
「そっか、そういうことか……」
優しげに微笑んで、ディセンバーが呟いた。
凪沙は困惑して目を瞬く。しかしディセンバーは少し困ったように肩をすくめて、
「あの子がいるのはわかってたんだけど、まさかこんな形で会うことになるとはねー……まあ、そういう因縁もあるか。つらいよね、お互い」
「はあ」
凪沙は曖昧にうなずくしかない。ディセンバーは満足したのか、それ以上はなにも説明せず、美味そうにアイスを口に運ぶだけだ。
「あの……ディセンバーさんは、ここでなにを……？」
自分のぶんのアイスを半分ほど食べたところで、凪沙が訊いた。
「さんは要らないよ。ディセンバーさん、だと、なんだか日付みたいじゃない？　ディセンバー・スリー的な」
「日付……ああ……」

そうかなあ、と凪沙はディセンバーの妙なこだわりに首を捻る。だが、まあ言いたくないこともわからないでもない。

「あたしは、監視に来たんだよね」

「監視……ですか」

「そうなの。見守ってあげるって言ったのに、要らないって言われちゃったから。アイスでも食べながら高みの見物を決めこもうかなって。そろそろ時間のはずだけど」

「時間？」

なんの時間だろう、と凪沙は訝った。ビルがライトアップされる夜ならまだしも、平日の昼間にこんなにもない場所で、イベントが行われるとは思えない。

「キーストーンゲートの見物ですか？」

「ううん。少し違うかな」

空になったアイスのカップを近くのゴミ箱に投げ入れながら、ディセンバーは微笑んだ。どこか諦観したような、寂しそうな笑みだ。

「あたしは始まりを見に来たんだよ。〝魔族特区〟の終わりの始まりを――」

「え……？」

ディセンバーの言葉が終わる前に、視界の片隅で閃光が弾けた。

一瞬遅れて、轟音が凪沙の鼓膜を打った。絃神島の人工の大地が揺れ、その余波が、凪沙たちのいる人工島をも震わせる。

建物の外壁が崩れ落ち、粉塵がもうもうと空へと舞った。

地下で。大地を揺るがすほどの巨大な爆発が。

「キーストーンゲートが……！」

凪沙が驚いてディセンバーを見た。どうして彼女は爆発が起きることを知っていたのか。終わりの始まりとはどういう意味なのか――無数の疑問が頭の中で渦を巻く。

だが、その疑問を口に出す前に、凪沙の全身から力が抜けた。

意識が真っ白になって、抗えない眠りに落ちていく。

最後に凪沙が見たのは、ディセンバーの瞳。

焔のように輝く青い瞳だった。

第二章　ディセンバー December

娘は、透きとおった真紅の液体の中に沈んでいた。

醜い娘だった。

血の気をなくした肌は死体のように青白く、全身の至るところに、縫い目のような深い傷跡が刻まれている。まるで引き裂かれた肉体を、無理やりに継ぎ合わせたような無惨な姿だ。

だが、それでも娘は美しかった。

瞼を閉じた彼女の顔立ちは端整だ。すらりとした体つきは見事な均整を保ち、鮮血に似た真紅の液体の中を、艶やかな黒髪が漂っている。

最新鋭の医療機器で埋め尽くされた研究所の地下室――

ガラス容器に浮かぶ彼女を見上げていたのは、よれよれの白衣を着た童顔の女性だった。

「ふんふーん」

当たり付きのアイスの棒をくわえたまま、白衣の女は鼻歌を口ずさんでいる。

マグナ・アタラクシア・リサーチ社――ＭＡＲ紘神研究所の主任研究員、暁深森だ。白衣の襟元につけたピンマイクに向かって、深森は無邪気に呼びかける。

「おはよう、お姫様。私の声が聞こえるー？」

『ア……ガ……』

少し遅れて、傷だらけの娘が目を開けた。虚ろな眼球がぎょろりと動いて、水槽の前に立つ深森を睨む。なにかを訴えるように彼女の喉が震えた。だが、吐き出されたのは意味をなさない苦悶のうめきだけだった。

「焦らなくてもいいわよー……あなたはまだ、生き返ったばかりなんだから」

ふわふわとした口調でそう言って、深森は柔らかく微笑んだ。傷だらけの娘の感情を代弁するように、水槽の周囲に設置された測定機器のグラフが変動する。

深森はそれを確認しながら、水槽のパネルを操作した。

『……ガ……ッ!?』

娘の首筋に埋めこまれた二箇所の端子に、金属製のプラグが突き刺さる。その苦痛に悶えるように、娘の全身が痙攣した。

彼女の姿を冷ややかに眺めて、深森は「ふんふー」と愉しげな含み笑いを洩らす。

そんな深森のすぐ背後で、わずかに空気が動く気配があった。

「ご機嫌ですね、暁主任」

微笑みながら歩み寄ってきたのは、眼鏡をかけた繊細そうな面立ちの青年だ。

ゆったりとした黒い中華服を着ており、どことなく占代の仙人を連想させる雰囲気がある。

「あらあら……逃走中の脱獄囚が、こんなところにいていいのかしら？」

青年――紘神冥駕を見返して、深森は皮肉っぽく笑う。

「あなた方のご協力には感謝していますよ。おかげで快適な逃亡生活を満喫しています」

「でも、あなたにはアイスはあげないわよ」

あの魔女だけは苦手なもので――と冥駕は苦笑して、礼儀正しく頭を下げた。

「それは残念」

ふーん、と深森は無関心な声で呟き、肩からぶら下げているクーラーボックスを背中に隠す。

「表が騒がしいみたいね。これもあなたたちの仕業？」

深森が地下室の天井へと視線を向けた。ちょうどキーストーンゲートのある方角だ。地鳴りのような振動が伝わってきたのは、ほんの数分前のことである。

「さあ、それはどうでしょう。ご老体がなにやら企んでいたようですが」
「ご老体？　ああ……そういうこと……」
思わせぶりに首を振る冥駕を眺めて、深森は小さく眉を上げる。
冥駕は、深森の背後にある真紅の水槽を見た。水槽の中では傷だらけの娘が、いる。
「これが聖殲派が秘匿していた彼らの切り札――もう一人の〝カインの巫女〟ですか」
畏敬の念を滲ませた表情で、冥駕が訊いた。
あは、と深森は愉快そうに笑って首を振る。
「残念。それは少し違うわ。彼女は〝巫女〟よ。もう一人のね」
「もう一人の……？　まさか……そうか……」
冥駕が驚きを顔に出す。常に余裕めいた表情の、この青年らしからぬ反応だ。
深森は、興味をなくしたように彼に背中を向けると、右手に嵌めていた白い手袋を外した。
傷だらけの娘の首筋に接続された金属プラグ――そこから伸びるケーブルが、水槽の外まで伸びている。深森は微笑みをたたえたまま、そのケーブルに右手で触れた。
まるで右手越しに娘の頭の中を、直接探ろうとするかのように。
「さあ、視せて。あなたが体験した〝聖殲〟の記憶を――」

2

キーストーンゲートで起きた爆破事件の映像は、その数分後にはインターネットを経由して、全世界に配信されていた。雲ひとつない青空を、灰色に塗りつぶしていく巨大な爆煙。そのショッキングな映像を、古城た

ちはスマホの画面で呆然と眺めている。
「行方不明……ってどういうことだよ!?」
放課後の教室の片隅で、矢瀬基樹が携帯電話に向かって怒鳴っている。
通話相手は、人工島管理公社に勤務する彼の兄だろう。何度もリダイヤルを繰り返してながったのだ。
「爆破テロ？　あの男がそんなものに巻きこまれたってのか？　らしくねーだろ……！」
矢瀬が、混乱を隠しきれない口調で喚く。
普段、飄々としている彼が取り乱しているのには理由があった。地下駐車場の爆発に巻きこまれた犠牲者の一人は、人工島管理公社の矢瀬顕重名誉理事――矢瀬の父親だったのだ。
「なぜだ、兄貴!?　俺にも捜索を手伝わせろ！　俺の能力なら……兄貴……！」
一方的に通話を打ち切られた矢瀬が、携帯の画面を見て歯噛みする。捜索の手伝いを申し出た矢瀬を、邪魔だ、と彼の兄が拒絶したらしい。
「親父さん、ヤバいのか？」
占城は、壁にもたれてうつむく矢瀬に近づいた。こんなとき、どんな顔で話しかければいいのかわからない。
しかし矢瀬は、無理やりな笑顔を浮かべて顔を上げると、
「ああ。駐車場ごと吹っ飛ばされて、瓦礫の下に埋まってるらしい」
冗談めかした口調でそう言った。矢瀬の家庭環境は複雑で、特に父親との関係がよくないことは占城も知っている。だからこそ、強がる矢瀬の姿が余計に痛々しく思える。

「吹っ飛ばされた……って……」
「大丈夫だ。心配ねーよ。あの男がくたばって喜ぶ人間は、俺を含めて、一族の中には腐るほどいるしな。相続争いに巻きこまれるのが面倒くせーだけだ」
矢瀬が、言い訳する子どものような口調で続ける。
そんな彼の前に、浅葱がミネラルウォーターのボトルを差し出した。
「基樹、あんた、顔、真っ青よ」
「大丈夫だって」
自分の声がかすれていることに気づいたのか、矢瀬はすぐに水を飲もうとする。しかしペットボトルのフタが開かない。指先が震えて力が入らないのだ。
「お、このあとの授業は中止だってよ。ラッキーだったな」
「おい、矢瀬！」
ちょうど流れてきた校内放送のアナウンスを聞いて、矢瀬は逃げ出すように自分の席へと戻った。バッグを引っつかむ友人の背中を、古城は慌てて呼び止めようとするが、「お先」と一方的に言い残して、矢瀬はそのまま教室を出て行く。
古城と浅葱は、為すすべもなくそれを見送った。たとえ今から追いかけたところで、矢瀬に告げるべき言葉を思いつかなかったのだ。
「無理しちゃって」
浅葱が腕組みしながら言う。占城も顔をしかめて首を振った。
「自分でもどう反応すればいいのかわかってねーんだろ。こんなときに冷静になれとも言えないしな」
「さすがにショックよね……爆破テロなんて……」
沈鬱な表情で息を吐く浅葱。彼女と矢瀬は、小学生になる前からの知り合いだ。父親が絃神島の要人という

点も共通している。それだけに無関心ではいられないのだろう。
「タルタロス・ラプスか……さすがにこうなると他人事じゃ済まねーな」
「え？　タルタルソース……なに？」
占城の呟きを聞きつけた浅葱が、怪訝な表情で見つめてくる。タルタロス・ラプス……なに？」
状況で、なぜそんな間抜けな聞き間違いをするのか。
「あんた、なにか知ってるの、古城？」
「那月ちゃんに教えてもらったんだ。〝魔族特区〟破壊集団……？」
話」
「〝魔族特区〟破壊集団ってのが、紘神島を狙ってるって、どうして？」
なによそれ、と浅葱が面喰らったように低く呟いた。今にも噛みつきそうな勢いで
てくる。
「どういうこと？　紘神島を狙ってるって、どうして？」
「俺が知るか。たぶん誰かに雇われたんだろ」
浅葱の剣幕に圧倒されながら、占城は頼りなく言い返す。
「じゃあ……基樹のお父さんを狙ったのも、そのタルタルなんちゃらってこと？」
「だろうな。昨日あたりからの船の事故も、そいつらの仕業じゃないかってさ」
占城のいい加減な説明を信じたのか、浅葱は思い詰めたように唇を噛んだ。
「……那月ちゃんは、そいつらを捜してるの？」
「ああ。タルタロス・ラプスの構成員に、千賀って風水術上がいるらしい。今はそいつの行方を追ってる。ほかに手がかりがないからな」
「そういうことは、もっと早く言いなさいよね」

やつあたり気味に言い放つと、浅葱はバッグから薄型のノートPCを取り出した。

れた特区警備隊（アイランド・ガード）の情報ネットワークに侵入して、千賀を捜し出すつもりらしい。

「見つけられるのか？」

「見つけるわよ！」

迷わずそう断言して、浅葱は滑らかにキーボードを操作する。いかにも派手好きな女子高生、という感じの見た目とは裏腹に、浅葱は業界でも名の知れた凄腕のハッカーなのだ。

彼女のPCの画面を流れていく英数字の羅列は、まるで高度な呪文のようで、それか、古城の目にはさっぱりわからない。迂闊に口を挟むこともできずに、浅葱の真い気分でぼんやりと眺めている。と、

「――失礼します」

凛とした声が教室に響き、居残っていたほかの生徒たちが、一斉にざわめいた。

占城たちの教室の入り口に、中等部の制服を着た女子生徒が、黒いギターケースを背負って立っていた。小柄だが、見る者を惹きつけずにはおれない異質な美貌の少女である。

「姫柊？　なんで高等部の校舎に――」

唐突に押しかけてきた雪菜を見て、古城が戸惑いの声を出す。

古城と浅葱が二人きりで、クラスメイトたちが息を呑む気配があった。

そんな古城の反応に、なにやら深刻な会話をしていた直後に、噂の中等部の転校生が現れたのだ。凄惨な争いが始まるのではないかと、彼らが期待しているのがよくわかる。

教室内に満ちる異様な緊張感に、さすがの雪菜も気圧されたような表情を浮かべた。だが、すぐに意を決したように教室内に足を踏み入れ、占城の傍へと駆け寄ってくる。

「すみません、先輩。あの、凪沙ちゃんのことなんですけど――」
焦りを滲ませた口調で、雪菜が言う。占城は意表を衝かれて表情を硬くした。
「凪沙……？　あいつになにかあったのか……？」
「もしかして、また倒れたとか……？」
浅葱も、キーボードを叩く手を止めて雪菜を見る。
雪菜は頼りなく視線を彷徨わせ、
「いえ、それが……お昼休みに一人でどこかに行ったきり、教室に帰ってきてないんです」
「え……？」
占城は困惑に眉をひそめた。状況がよくわからない。
「荷物や靴もなくなってたから、無断早退したんじゃないかってクラスの子たちが――」
「無断早退って、凪沙ちゃんが？」
浅葱が驚いた顔で訊き返す。
凪沙は、兄に似ず真面目で几帳面な性格だ。理由もなく学校を抜け出すとは思えない。雪菜も同じ意見なのだろう。だから彼女は、焦って占城に報告に来たのだ。
「凪沙ちゃんの携帯にもメールを送ってみたんですけど、返事がなくて」
雪菜が強張った表情で告げた。古城の拳に汗が滲む。
「浅葱……！」
「はいはい。テロリストより先にそっちを調べましょうね」
まったく過保護なんだから、と軽口を叩いて、浅葱が再びPCに向かった。
意外にも協力的な古城たちの様子に、修羅場を期待していたクラスメイトたちは、落胆したような空気を漂わせていた。しかし古城には彼らに構っている余裕はない。凪沙の捜索のため、島内の監視カメラ網に接続す

る浅葱を、すがるような気分で眺めている。
「……え？」
浅葱が、小さく声を洩らした。ピッ、と短い警告音が、浅葱のＰＣから流れ出す。新しいウィンドウがポップアップし、エラーメッセージが赤く点滅した。
「嘘!?　こんなことって……！」
警告音が鳴り止むことなくスピーカーを震わせ、エラーメッセージは瞬く間に画面を埋め尽くした。キーボードが操作を受け付けない。それに気づいた浅葱の反応は速かった。暴走したノートＰＣを抱えて躊躇なく立ち上がり、
「占城、どいて！」
「あ？」
立ち尽くす古城を突き飛ばし、浅葱は、コンクリート剝き出しの教室のベランダにノートＰＣを叩きつけた。アルミ合金製の筐体が見事に湾曲し、部品を撒き散らして大破する。
「あ、浅葱……？」
「藍羽先輩……」
古城と雪菜が怖ずと呼びかけた。浅葱は、自分が破壊した愛用のノートＰＣを見下ろし、荒々しく息をついている。
「やられたわ……むっかつく！」
怒りのオーラを立ち上らせて、浅葱が髪を振り乱して言った。
「ど、どういうことだ……？」

「ハッキングよ。特区警備隊（アイランド・ガード）のネットワークがウイルス汚染されてたの。軍事用の強力なヤツ！」

「ウイルス……!?　生物兵器ですか!?」

雪菜がギョッとしたように訊き返す。ふざけているわけではなく、素で勘違いしていたようだった。

「いや、そういうお約束のボケはいいから」

張り詰めていた浅葱の神経を解きほぐす程度の効果はあった。

浅葱が脱力したような表情で雪菜を見る。雪菜は狐につままれたような表情で目をパチクリさせた。

「ボケ……？」

「あー、えっとね、違うの。ウイルスっていうのは、そういう名前のプログラムがあるのよ。悪意をもってデータを破壊したり、機械の誤作動を引き起こすやつ」

「あ……ああ……」

機械製品に弱い雪菜も、浅葱の説明には思い当たる節があったらしい。曖昧な表情でうなずいて、恥じらうように頬を赤らめる。

そんなことより、と古城は浅葱に向き直った。

「特区警備隊がハッキングされてるって、まずいんじゃないか」

「まずいわよ。ただでさえ爆破テロで指揮系統が混乱してるはずだし」

浅葱が真剣な口調で答えてくる。監視カメラにアクセスしただけで、ウイルス汚染されたということは、特区警備隊本部のサーバーは、ほぼ完全に機能を狂わされていると考えていいだろう。おそらく特区警備隊の隊員たちは、パニックに陥っているに違いない。

「あそこの防壁はザルだって前から気になってたのよ。あたしとモグワイに管理を任せとけば、こんなことにはならなかったのに……ああ、もう！」

浅葱がこめかみを引き攣らせながらイライラと叫ぶ。自分のＰＣがウイルスにやられたことで、プライドがいたく傷ついているらしい。

「結局、凪沙の居場所は調べられないってことか？」

「厳しいわね。島内の防犯用監視カメラは、特区警備隊の管轄だから。ハッキングを仕掛けて乗っ取り返すって方法もあるけど、肝心のパソコンがこれじゃ……」

ついさっきまでノートPCと呼ばれていたものの残骸を眺めて、浅葱が自嘲の笑みを浮かべた。ウイルスによる個人情報などの流出を防ぐためとはいえ、支払った代償は小さくない。

「ああ、くそ。こんなときに凪沙のやつ、どこに行きやがったんだよ……！」

占城は携帯電話を取りだすと、駄目元で凪沙の番号を呼び出した。

3

海沿いの公園のベンチに、スタジャンを着た少女が座っている。彼女の隣に駐まっているのは色褪せた白のスクーター。そして彼女に膝枕されて、制服姿の女子中学生が眠っている。

対岸に見える建物からはうつすらと白煙が立ち上り、周囲は騒然としているようだ。

少女は特に見るともなく、ぼんやりとそれを眺めている。と、

近づいてきた一人の男が、無造作に彼女に呼びかけた。

「こんなところにいたのか、ディセンバー」

「ん？」

半キャップ型のヘルメットを被ったまま、ディセンバーは顔を上げた。

彼女を見下ろしていたのは、よれた灰色のジャケットを着た中年男性だった。体つきは意外に筋肉質だが、無造作に伸ばした長髪のせいで、芸術家のような雰囲気がある。彫刻家。あるいは美術教師――どこか、そんな印象の男だ。

「あれ？　毅人？」

ディセンバーが男の名前を口にする。タルタロス・ラプスの千賀毅人。かつて東洋の至宝と呼ばれ、欧州の魔術界を震撼させた天才風水術士である。

そんな千賀にディセンバーは親しげに笑いかけ、

「出歩いてていいの？　先にセーフハウスに入って待ってると思ってた」

「おまえからの連絡が遅いので、捜しに来た。ラーンが心配していたぞ」

「そっか、心配してくれてたかー。さすがあたしのラーン。可愛いなあ」

千賀の言葉を聞いたディセンバーが、ニヤニヤと頬を緩めて言った。

やれやれ、と千賀は首を振る。

千賀の年齢は四十歳前後。対してディセンバーはせいぜい十四、五歳だ。見た目の年齢では二十歳以上も離れている。にもかかわらず、千賀はディセンバーを対等に扱っていた。むしろディセンバーのほうが千賀を、生意気な弟のように見ている印象すらある。

「無関係な一般人を巻きこんだのか？」

そのディセンバーを咎めるように睨んで、千賀が訊いた。

「ん？　ああ、凪沙ちゃん？」

膝枕に載せた少女の横顔を見下ろし、ディセンバーは愉しそうに笑う。暁凪沙の髪を撫でる彼女の手つきは優しかった。

「この子のことは心配しないで。爆発に驚いて倒れただけ。こんな可愛い子を、ほっとくわけにもいかないでしょ？　悪い人に攫われちゃうわ」

「まるで俺たちが悪人ではないみたいな言いぐさだ」

辛辣な口調で、千賀が皮肉る。あはは、とディセンバーは声を上げて笑った。

「それにこの子は、あたしと無関係というわけでもないしね」

「そういうことか」
「そういうことよ」
「わかった。ラーンたちには伝えておく」
千賀が呟き、ディセンバーもうなずいた。
そしてディセンバーは、千賀を気遣うように静かに訊く。
「毅人は、よかったの？」
「なにがだ？」
「あなたも、この島とは無関係ではないんでしょう？」
ディセンバーの何気ない言葉に、千賀は沈黙した。いまだ生々しい傷口に触れられたような、苦しげな表情で首を振る。
「無関係ではないから、許せないこともある」
「そっか。そうだね」
ゴーグルに隠れた目を細めて、ディセンバーが寂しげに微笑んだ。
千賀は無言で踵を返すと、そのまま歩き去って行く。それから数歩もいかないうちに、彼の気配は消え去ったのだ。
た。風水術で自らの姿を風景に溶けこませたのだ。
ディセンバーの膝に抱かれていた暁 凪沙が、眠りを妨げられたように身じろぎしたのはその直後だった。
「ん……」
弱々しい吐息を洩らしながら、凪沙がゆっくりと瞼を開ける。彼女の周囲に漂う、かすかな冷気に気づいて、ディセンバーは目を細めた。
「やあ。お目覚め？」
「あ……」

重力を無視したような不自然な動きで、凪沙がゆっくりと状態を起こした。虹彩の開ききった虚ろな瞳が、ディセンバーを呆然と見つめる。解けた長い髪が、ゆらりと流れ落ちていく。

「汝は……」

「大丈夫。大丈夫よ。心配は要らない。これはあたしの戦争だから」

ディセンバーは、驚愕する凪沙を優しく抱き寄せた。幼い子どもをあやすように、耳元にゆっくりと囁きかける。

凪沙の周囲を渦巻く冷気が勢いを増した。ディセンバーの全身に、薄く霜が降り積もる。

「……汝……何故……現今になって……」

「あなたは、微睡みの中へ戻っていて。それがあたしたちの願いでもあるのだから」

ディセンバーの言葉が終わる前に、凪沙の全身から力が抜けた。

同時に、二人を包みこんでいた強烈な凍気も消失する。ディセンバーは安堵したように溜息をつくと、冷気で曇ったゴーグルを拭いた。

スタジャンに張りついた氷を払い落としていると、凪沙が今度こそはっきりと目を覚ます。

「あ……あれ？　なんであたし、こんなところに……？　わ!?」

ディセンバーに抱き支えられていることに気づいた凪沙が、焦ったように身体を離した。慌ただしく周囲を見回して、ぎょっとしたように対岸に目を留める。

「キーストーンゲートが……！」

「うん。なにか事故があったみたい」

「事故……？」

倒れる前の記憶が曖昧なせいか、凪沙は心細げな表情で呟いた。爆発現場周辺を行き交う緊急車両のサイレンの音が、途切れ途切れに聞こえて不安を煽る。

「あの、もしかしてあたし、なにかご迷惑をおかけしちゃってましたか？」
凪沙が怖ず怖ずとディセンバーに訊いた。まさか、とディセンバーは首を振る。
「ううん。迷惑ってことはないかな。愉しかったよ」
「でも……」
「電話」
「え？」
「鳴ってるよ。電話」
ディセンバーが、凪沙のバッグを指さして言った。携帯電話のバイブレータ音が外に小さく洩れ聞こえている。凪沙は少し驚いて、足元のバッグに手を伸ばした。
「わ、本当だ。え、占城君？　なんで？」
学校を抜け出したのがバレてしまったのだろうか、と凪沙は困り顔で電話に出る。
ディセンバーはそんな凪沙の横顔を見つめて微笑っている。

4

「天気がよかったから知らないうちに昼寝しちゃってたみたい――じゃねえだろ！」
夕陽に照らされた校庭を、占城は憤慨しながら歩いていた。古城がしつこくかけ続けた電話に、凪沙が応答したのはついさっきのこと。凪沙のあっけらかんとした言い訳に、古城は安堵しつつも腹立ちを抑えきれないでいる。
「つたく、人騒がせにもほどがあるだろ」
「人騒がせもなにも、あんたたちが勝手に心配してただけでしょうが」

浅葱が軽く蔑むような視線を古城に向ける。今に始まったことではないとはいえ、古城のシスコンっぷりにさすがに呆れているのだ。

「でも、よかったです。凪沙ちゃんが無事で」

古城を焦らせてしまったことに多少の責任を感じているのか、雪菜がどうにか綺麗に話をまとめようとする。まあな、と古城は照れ隠しのように素っ気なく言って、

「浅葱はこのまま人工島管理公社に行くんだよな？」

「面倒だけど、仕方ないわね。特区警備隊のサーバーを、ハッキングされたままにしとくわけにもいかないしさ。新しいパソコンもくれるって話だし」

浅葱は、そう言ってぐったりしたように肩を落とした。

ら、彼女は何度も呼び出しを喰らっていたのだ。度重なる攻撃で追い詰められた人工島管理公社か

「公社が迎えの車を寄越すって言ってたけど、あんたたちも駅まで乗ってく？」

「いや、いいよ。凪沙のやつと待ち合わせしてるしな」

浅葱の誘いに、古城は少し考えて首を振る。

いちおう無事とはわかったものの、念のため、凪沙とはこのあとすぐに合流する約束をしていた。待ち合わせの場所は、通学路の途中にあるスーパーだ。

「それよりも早いとこ千賀って男の居場所を、那月ちゃんに教えてやってくれ」

「ん、任せて」

浅葱が気楽な口調で言う。

ちょうど人工島管理公社の送迎車らしき黒塗りのセダンが、校門前に到着したところだった。送迎車の運転手が車を降りて、浅葱のためにドアを開ける。なかなかのＶＩＰ待遇だ。

しかし運転手の顔を見た瞬間、浅葱は硬直して動きを止めた。

「お待たせ、浅葱さん」

黒のスーツに身を包んで立っていたのは、化粧っ気のない若々しい女性だった。

「す、菫さん!?　どうして菫さんが運転を……!?」

自分の継母を呆然と見つめて、浅葱が上擦った声を出す。

決して不仲なわけではないのだが、年齢の近い母子ということもあり、浅葱と菫の関係は微妙だった。というよりも、浅葱が一方的に菫を苦手にしているのだ。

そんな娘の気持ちを知ってか知らずか、菫は屈託のない表情で答える。

「仙斎さんに頼まれたのよー。ほら、今は爆破テロやなんかで物騒でしょ」

「う……」

「帰りのモノレールも点検のために止まっちゃってるし」

「う……う……」

「ほら、早く乗って乗って。古城くんたちも良かったら――」

「そ、その話はもう終わってますから。早く出してください」

つっけんどんな口調でそう言って、浅葱は送迎車の後部座席に乗りこんだ。友人に母親との会話を聞かれるのが恥ずかしかったのか、照れたように頬を赤らめている。

あらあらと菫は苦笑して、運転席に乗りこんだ。古城たちに愛想よく手を振って、送迎車を滑らかに発進させる。

「さて、と。じゃあ、俺たちも帰るか……」

どことなく気の抜けた気分で呼びかけた古城に、雪菜は無言でうなずいた。

もともと口数の多いほうではないが、今日の雪菜はいつも以上に寡黙だ。風水による結界や、爆破事件のことを気にしているのかもしれない。それでも飼い主に付き従う忠犬のように、雪菜はぴったりと同じ距離を保

って古城についてくる。

しばらく歩くと、目的地であるスーパーの看板が見えてきた。待ち合わせ場所の駐車場には、まだ凪沙の姿は見当たらない。

「そうだ、姫柊。悪いけど買い物につき合ってもらえるか？　凪沙に牛乳を頼まれてたんだ」

「もちろんそれは構いませんけど――」

雪菜が不意に足を止め、意を決したように古城を見上げて言った。

「でも、先輩はこれでいいんですか？」

「ん？　ああ、それは面倒だけど、買い物くらいはしないとな。最近はずっと食事当番を凪沙に任せちまってるし」

「いえ、そうではなくて。タルタロス・ラプスのことです」

「え？」

古城は意外に思って雪菜を見た。雪菜は構わず続けてくる。

「本当は先輩も、彼らのことが気になっているのではありませんか？」

「いやまあ、矢瀬の親父さんのこともあるし、気にならないってことはないけどな」

古城は首筋に手を当てて溜息をついた。

「だからって、俺たちにはどうにもできねーだろ。那月ちゃんにも、余計なことはするなって言われたばっかだし。千賀ってやつの居場所もわからないしな」

「そう……ですね……」

雪菜がわかりやすく落ちこんだ表情を浮かべる。タルタロス・ラプスの存在を知りながら、なにもできずにいる自分に、罪悪感を覚えていたらしい。さっきから妙に静かだったのも、それが原因だったのだろう。基本的に真面目な性格なのだ。

「せめてタルタロス・ラプスの手口がわかればな」
占城は思いついたことを何気なく口にした。
「え？」
「連中が次になにをするか予想できれば、先回りして待ち伏せもできるだろ？」
「タルタロス・ラプスの次の行動……要人暗殺や海上交通の封鎖は、本格的なテロの下準備に過ぎない、ということですか？」
「違うのか？　〝魔族特区〟破壊集団を名乗ってる連中が、駐車場を吹っ飛ばして終わりってことはないだろ、いくらなんでも」
「はい。たしかに……」
雪菜が真剣な表情になる。こういうときの彼女は、考えていることがわかりやすい。
「ていうか、めずらしいな。姫柊が、自分からこんなことを言い出すなんて」
苦笑いを浮かべて、古城は言った。
「そう……ですか？」
「俺がテロ事件に首を突っこもうとしたら、真っ先に姫柊が文句を言うと思ってたんだが」
「それは当然です。わたしは第四真祖の監視役なんですから。先輩が余計なことをしないように見張る義務があるんです」
自分に言い聞かせるような口調で言って、雪菜はぎゅっと拳を握り締めた。
「ですから、先輩の代わりにわたしがやらないと――」
「いや、その理屈はおかしいだろ。監視ってそういう意味じゃねーから」
なぜか無駄に気合いの入っている雪菜に、古城は思わずツッコミを入れた。
しかし雪菜は強情に首を横に振り、

「それはできません。大規模魔導テロを未然に防ぐために、獅子王機関はあるんでしょ？」

「だったら、ほかの誰かがとっくに動き出してるんじゃないのか？　こないだの柊なんかがやらなくてもさ」

「わたしなんか……ですか……そうですね」

雪菜が、う、と少し傷ついた表情を浮かべた。拗ねた子どものように唇を小さく尖らせる。

「どうせわたしは、彼女には手も足も出ませんでしたし……」

「いや。まあ、な……」

面倒くさい話になったなあ、と古城は空を仰いだ。

なにが起きたのかわからないうちに敗北していた、というのが実態に近い。実はそのことを雪菜は根に持っていたらしい。

紘神島脱出時に、雪菜は獅子王機関三聖筆頭〝静寂破り〟と交戦している。正確には戦ったというよりも、

「とにかく、今はあの人たちに任せとこうぜ」

「そんなことを言っておいて、私に黙って勝手にどこかに行かないでくださいね」

無造作に肩をすくめて歩き出そうとした古城の腕を、雪菜が咄嗟につかまえる。

でいるように見えなくもない光景だ。傍目には、仲良く手を繋いで

「大丈夫だって。頼まれてもそんな面倒なことはしねーよ」

「どうだか」

往来のど真ん中で手を繋いで言い争う古城たちを見て、たまたま近くを走っていた軽トラックの運転手が、ヒュウ、と冷やかして通り過ぎて行く。

雪菜は頬を赤らめたが、それでも古城の隣から離れようとはしなかった。

路上でこれ以上目立つのを避けるため、古城は逃げるようにスーパーの店内へと向かう。

そこそこに賑わった店内には、いつものポップなBGMの代わりに、ラジオのニュース番組が流れていた。

船舶事故や駐車場爆破事件のことを、やはり誰もが気にしているのだろう。

しかし買い物客たちの表情からは、特別な不安や悲愴感は読み取れない。

「意外にみんな落ち着いてますね」

雪菜が少し不思議そうに呟いた。そうだな、と古城も同意して、

「まあ、〝魔族特区〟の住人は、この手の騒ぎには慣れっこだからな。緊張感がなさ過ぎるのも問題なのかもしれねーけど」

もともと〝魔族特区〟はテロの標的になりやすい街であり、特に絃神島は台風や高潮などの被害も多い。そのぶん治安対策や防災への備えも充実している。食料や燃料の備蓄も十分だ。絃神島の住人は、そのことをよく知っている。

「いえ。下手にパニックになるよりは、そのほうが安心できます。一般的にテロリストの目的は、住民に恐怖を与えて社会不安を煽ることだといわれてますから」

「恐怖か……」

雪菜の説明に、なるほどな、と古城は呟いた。キーストーンゲートなどという目立つ場所が爆破テロの現場に選ばれたのも、人々の不安を煽るためだといわれれば納得できる。

このスーパー店内の様子を見る限り、今のところ絃神島の住人たちは、テロリストたちの攻撃にギリギリで持ちこたえている、というところなのだろう。

目的の買い物を終えた古城は、スーパーのポリ袋をぶら下げて店の前に出た。

「そういやモノレールが止まってるって話だったけど、凪沙のやつ、どうやって戻ってくるつもりなんだ？」

ふと根本的な疑問を覚えて、古城が訊いた。さあ、と雪菜も首を傾げる。

パラパラパラパラ、という間の抜けたエンジン音が聞こえてきたのは、その直後だ。最近ではすっかりめず

らしくなった内燃エンジンの旧式スクーターが、歩道の段差を乗り越えて駐車場に入ってくる。

「あー……いたいた、古城君！　雪菜ちゃん、こっちこっち！」

スクーターの後部座席で手を振っていたのは凪沙だった。凪沙の前でハンドルを握っているのは、ゴーグルを嵌めた見知らぬ女性だ。「誰だ？」と古城は眉を寄せる。

その間に白いスクーターは古城たちの前に停止して、凪沙がひょい、と飛び降りた。

を脱ぎながら、スクーターの運転手に向かって頭を下げる。被っていたヘルメット

「送ってくれてありがとう、ディセンバーさん」

「こらこら。さん、は要らないよ」

ディセンバーと呼ばれた女が、砕けた口調で凪沙に言った。そして彼女は古城に目を向け、

「あなたが凪沙ちゃんのお兄さん？」

「あ、ああ。そうだけど」

戸惑いながら答える古城に、ディセンバーは愛想よく笑ってみせた。大きなゴーグルをつけたままでも、彼女が相当な美人だとわかる。それに思ったよりもずいぶん若い。

そしてディセンバーは、興味深そうに雪菜を眺めて、

「で、そちらは……彼女さん？」

「いや、これは凪沙の同級生。うちの隣に住んでるんだ」

「なるほど、ご近所さんってことね」

ふんふん、と愉しそうに微笑むと、ディセンバーは古城の前に右手を差し出した。

「ディセンバーって呼んで。よろしく」

古城は、彼女のひんやりとした手を握り返す。

凪沙はディセンバーの隣に立って、なぜか得意げに胸を張り、
「いろいろ助けてもらったんだよ。キーストーンゲートで爆発があったのは知ってる？　ちょうどそのときに一緒にいてくれて。凪沙が倒れたのを介抱してくれたり、ここまで送ってもらったり、すごくお世話になっちゃって。ディセンバーがいなかったら帰ってこれなかったよ」
「そ、そうか」
早口でまくしたてくる妹に、古城は軽くたじろいだ。今朝の穏やかな凪沙とは別人のようだが、どちらかといえばこれが彼女の本来の姿だ。
すっかり調子を取り戻した凪沙に、古城は少し安心する。これもディセンバーと出会ったおかげなのかもしれない。
「妹が迷惑をかけたみたいで悪かったな。ありがとう」
「どういたしまして。可愛い女の子のお世話は大歓迎よ」
礼を言う古城を見返して、ディセンバーは悪戯っぽく唇の端を上げた。
そして彼女は、ガラス張りのスーパーの店内へと視線を向けた。
機能的にレイアウトされた清潔な店内に、所狭しと食材が陳列されている。生鮮食品の棚には空きが目立つが、それでも人々が暮らしに困るほどではない。
「平和ね」
「え？」
「あんな事件の直後なのに、店先には普通に食材が並んでて……こういうのって安心できると思わない？」
「ん、ああ……」
どこか他人事のようなディセンバーの呟きに、古城は違和感を覚えながら相槌を打った。
ディセンバーは、ふふん、と笑って、スクーターのキーを回す。ブルッと不安定なリズムでエンジンが始動

し、甲高い独特の排気音が洩れ出した。
「じゃあね、凪沙ちゃん。また会おうね。古城君とお隣さんも、バイバイ」
パラパラとやかましい音を立てながら、ディセンバーを乗せたスクーターが走り出す。
白く立ちこめた排煙を、古城たちはしばらくぼんやりと眺めた。
「お、古城君、ちゃんと牛乳買っておいてくれたんだね。さ、帰ろ。今夜はシチューだよ」
ディセンバーの姿が見えなくなるのを待って、凪沙はご機嫌な声を出す。
弾むような足取りで歩き出す妹を追いかけながら、古城はやれやれと嘆息した。
は別人のような彼女のテンションに、心の整理が追いつかない。
「なんか、いつもの凪沙だな」
「そうですね」
よかった、と雪菜は晴れやかに言った。凪沙の変化に振り回されていたのは、むしろ古城よりも同じ教室で過ごしていた雪菜のほうなのかもしれない。
「それよりも先輩、気づきましたか？　ディセンバーさん、彼女は――」
ああ、と古城が首肯する。ディセンバーと握手したときに感じた静電気のような独特の刺激。あれは強い魔力の反応だった。
「魔族……だな。俺の気のせいじゃなかったのか……」
「おそらくD種――吸血鬼だと思います。魔族登録証はありませんでしたけど」
「俺と同じ未登録魔族か……」
古城が複雑な表情を浮かべる。
〝魔族特区〟である絃神市において、魔族は、嫌悪や差別の対象ではない。人工島管理公社に魔族として登録されることによって、正規の市民権が与えられるだけでなく、住居や医療費の補助、就労支援などの様々な優

遇が受けられる。コンビニやスーパーで売っている商品も、手首の魔族登録証を見せるだけで、免税や割引になったりするのだ。

逆に、理由もなく未登録のまま特区内に入りこむことは、法律で禁じられている。

それでも魔族登録を拒む者がいるとすれば、それは政治的な理由によって、存在しないもの、として黙殺されている占城のような規格外品か――さもなくば、犯罪者だけである。

ディセンバーのことを慕っている凪沙に、その事実を伝えるわけにはいかなかった。

「姫柊」

「はい」

「テロリストの目的は、社会不安を引き起こすことだって言ったよな」

「あ、ええ。もちろん例外はありますけど、基本的には」

要領を得ない占城の質問に、雪菜が怪訝な表情で答えてくる。

「ディセンバーの言ったこと、覚えてるか。食材が店に並んでいると安心できるって」

「え……？」

雪菜が、なにかに気づいたように目を見開いた。

占城は、苦手な野菜を無理やり口に詰めこまれたように頬を歪めて、

立て続けに船舶事故が起きても人々が落ち着いていられるのは、自分たちの生活に直接的な影響が出ていないからだ。多少品薄になったとしても、スーパーの店頭には今も食材があふれている。紘神島には膨大な量の食料が備蓄されてるからだ。

では、もしもその備蓄された食料が失われたとしたら――

「まさか、タルタロス・ラプスの次の狙いは……」

「なんの証拠もないただの想像だけどな。ヤバい予感がする……！」

前を歩く凪沙に気づかれないように、古城は小声で低くうめく。

「連中の次の標的は、人工島東地区のグレートパイル――大規模食料備蓄倉庫だ」

5

浅葱を乗せた黒塗りの公用車は、絃神島外回りの環状道路を走っていた。

人工島である絃神市内の道路は、複雑な迷路のように湾曲し、何層にも重なり合っている。その構造上、カーナビもほとんど役に立たず、絃神市内を自在に運転するのは、戦闘機の操縦よりも難しいとまで言われていた。

そんなややこしく入り組んだ道路を、藍羽董はスムーズに走り抜けていく。浅葱の父親と結婚するまで、彼女は要人警護サービスの会社で働くプロの運転手だったのだ。

加速しているということすら感じさせない彼女の滑らかな運転は、あまりにも快適すぎて、それが逆に恐ろしい、と浅葱は思う。噂によれば、現役時代の董は、どんなに道が混んでいても、目的地への到着時刻をコンマ一秒以下の誤差で調整することができたらしい。彼女がもしも本気を出したら、いったいどんな運転をするのか、想像するだけでもゾッとする。

「今夜は遅くなりそうなの？」

後部座席で縮こまっている浅葱に向かって、その董がおっとりと話しかけてくる。

はい、と浅葱はぎこちなくうなずいた。

「たぶん、そうなると思います。特区警備隊のサーバーが、けっこうダメージを受けちゃってるみたいなので」

「そっか。お弁当用意しておいたから、よかったら食べてね。片手でつまめるようにサンドイッチにしておい

たから」
「あの、ありがとうございます」
浅葱は、座席に置かれていた重箱の包みに気づいて礼を言う。プログラミング作業は体力を使うし、菫の料理は控え目に言っても絶品だ。弁当は素直にありがたい。
「パ……父は、なにか言ってましたか。今日の事件について」
「ううん。なにも。そういうことを軽々しく口に出す人じゃないから」
菫が前を向いたまま、少し寂しげな口調で言った。
そうですね、と浅葱も同意する。
「でも、浅葱さんのことは心配してたわよ。こんなお仕事をしてたら、事件に巻きこまれるんじゃないかって」
「そんな……心配なんて……」
まさか、と浅葱が投げやりに呟いた。
ギュン、と後輪を鳴らしながら、車が強引に進路を変えたのはその直後だった。強烈な加速に襲われて、浅葱の背中がシートに押しつけられる。菫らしからぬ荒っぽい運転だ。
「す、菫さん……!?」
「喋らないで。舌を噛むといけないから——しっかりつかまってて！」
普段の穏やかな彼女とは別人のような鋭い口調で、菫が叫ぶ。
突き上げるような衝撃とともに、浅葱たちを乗せた公用車が宙を舞った。フロントガラスに映る景色が、あり得ない方向に流れていく。
菫が、前輪をわざと道路脇のブロックにぶつけて、車をジャンプさせたのだ。
半回転しながら中央分離帯を乗り越えて、浅葱たちは対向車線のど真ん中に着地する。

そして――

一瞬遅れて、轟音とともに世界が揺れた。浅葱たちの真横で、巨大な爆発が起きたのだ。

「なっ……!?」

殴りつけてくるような爆風を浴びて、車体がビリビリと震動する。

衝撃が道路そのものを激しく揺さぶり、突き上げるような不快感が浅葱の内臓を襲ってきた。

爆発の原因は路肩に駐まっていた故障車だ。浅葱たちが通過する瞬間を狙い澄ましたように、故障車が木っ端微塵に吹き飛んだのだ。

「な……なにが……!?」

「自動車爆弾よ。紛争地帯で民兵組織がよく使う手口ね。至近距離で喰らったら、防弾車両の装甲でも防ぎきれないわ」

董は勢いよくスリップする車を、絶妙のカウンターステアとアクセル操作で、何事もなかったかのように立て直した。そのまま車を無理やり加速させ、降りそそぐ金属片を回避する。

爆発の余韻で路面は陥没し、周囲のアスファルトは炎に包まれていた。撒き散らされた破片の直撃を受けて、道路標識やガードレールがズタズタに裂けている。

「自動車爆弾って……まさか、この車を狙って……?」

浅葱が青ざめた顔で訊く。もしも董の無茶な進路変更がなかったら、間違いなく即死していただろう。

その事実をようやく理解して、全身の肌が粟立った。

「可能性はあるわね。人工島管理公社の公用車だし――」

董は平然とそう言った。遠回りになっちゃうな、と不満そうに呟いて、環状道路の出口へと向かう。とても命を狙われた直後の人間とは思えない冷静さだ。

「菫さんは、どうしてわかったんです？　自動車爆弾が仕掛けられてるって」
「うーん、なんだろ。勘、かな」
菫は、本気で首を傾げながら答えてくる。自分でも上手く説明できないらしい。継母のその反応に唖然として、浅葱は恐怖が薄れるのを感じた。自分だけが恐怖に震えているのが、どこか馬鹿馬鹿しく思えてくる。
「もしかして、だから菫さんが迎えに来てくれたんですか？　あたしが爆弾テロに巻きこまれるかもしれないと思って――」
「お弁当は無事だった？」
浅葱の質問には答えずに、菫が逆に確認してくる。そこで浅葱は、自分が弁当を抱えたままだったことをようやく思い出した。
「あ、はい。大丈夫だと思います」
「そう。よかった」
ルームミラー越しに浅葱の顔を見て、菫がにっこりと笑いかけてくる。そして彼女は、グン、とアクセルを再び強く踏みこんだ。
「とりあえず、後始末は特区警備隊（アイランド・ガード）に任せましょ。飛ばすわよ」

6

千賀毅人（せんがたけひと）は、港近くの廃工場から絃神島（いとがみじま）の夕景を眺めていた。
絃神島――〝魔族特区（まぞくとっく）〟は最先端の建築技術の塊（かたまり）であると同時に、魔術的な建造物でもある。
島を構成する四基の超大型浮体式構造物（ギガフロート）は、それぞれが独立して可動することで暴風や津波の影響（えいきょう）を受け流し、水没による被害を最小限に留（とど）めるように設計されている。

そして四基を東西南北に配置することで、それぞれの超大型浮体式構造物には、あ
れていた。
東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武――すなわち風水にいう四神相応である。
体が巨大な風水呪術装置なのだ。
その絃神島の構造自体を利用して、法奇門の要と為す。それが千賀毅人の仕掛けた八卦陣の正体だ。絃神島
そのものが動力源となっているからこそ、半径百キロ以上という、途方もなく巨大な結界を展開することがで
きたのだった。
結界の持続時間は残り四日。だが、その時までには、この島は消滅しているはずだった。
〝タルタロスの薔薇〟によって――

『先生、聞こえる？』
左耳にかけたイヤフォンマイクから、変声期前の男子の声が流れてくる。声の主は人工生命体の少年――ロ
ギだ。
「聞こえてるよ、ロギ。爆発の煙も見えた」
環状道路で起きた爆発の光は、千賀の位置からでもはっきりと視認できた。ロギが仕掛けた自動車爆弾の閃
光だ。高性能爆薬を満載し、金属片を撒き散らす自動車爆弾は、軍用装甲車の性能でも容易には防げない。
三年前。ある事情からタルタロス・ラプスに合流したロギに、自動車爆弾の扱い方を教えたのは千賀だっ
た。それ以来、ロギは千賀のことを先生と呼ぶ。
『それなんだけど、ごめん――失敗した』
悪戯をしくじった子どものような、悔しさを滲ませた口調でロギが言う。
「失敗？」

『うん。勘のいい運転手でさ。起爆の寸前に逃げられたんだ』

「そうか。さすがは〝魔族特区〟――一筋縄ではいかないな」

千賀は、ロギを責めることもなく淡々と呟いた。

爆弾は、シンプルだけに確実性の高い暗殺手段だ。そしてロギが爆破のタイミングを外すことはあり得ない。にもかかわらずロギの攻撃を逃れたのだとすれば、それは相手がただ者ではなかったということだ。

『本当にごめん、先生』

「気にするな。計画に支障はない。無差別テロと思わせておけば、陽動にもなる」

『……うん』

ロギが落ちこんだ声を出す。責任感の強い性格なのだ。

千賀はそんな彼に優しく呼びかける。

「問題ないとは思うが、念のためにこちらを手伝ってもらえるか。カーリとラーンには、ディセンバーの指示があるまで待機するように伝えてくれ」

『わかった。すぐにそっちに向かうよ』

ロギはそう言って通信を切り上げた。

千賀はイヤフォンマイクを外して、それを無造作にポケットにねじこむ。そしてゆっくりと顔を上げた。錆びた屑鉄が山のように打ち捨てられた工場の跡地。夕闇に沈んでいく倉庫街を背景に、小柄な女が立っている。まるで西洋人形のような、いとけない容姿の女だった。

「待たせてしまったようだな」

「構わんよ。面白い話も聞けたしな」

千賀の問いかけに、女は長い髪を揺らして首を振る。口調は大人びているが、外見相応の舌足らずな声だった。懐かしさに目を細めて失笑する。

「南宮那月……十五年ぶりか。変わらないな、おまえは」

「貴様は老けたな、千賀毅人。だが、中身はたいして成長してないようだ」

那月が、蔑むような冷たい表情で言った。

欧州で最後に彼女を見たとき、千賀は二十代の半ばだった。

普通の人間だった。那月に悪魔との契約の方法を教え、魔女となるきっかけを与えたのは、千賀自身だ。

「変わらない、か……だが、それはおまえも同じだろう？　魔族殺しの〝空隙の魔女〟――」

「そうでもないさ」

ふん、と那月が退屈したように鼻を鳴らす。

「タルタロス・ラプス――〝魔族特区〟破壊集団とは、ご大層な名前だが、今も子どもたちを利用しているのか、毅人？」

「利用とは心外だな。俺は彼らに力の使い方を教えただけだ。かつてのおまえと同じようにな」

「〝魔族特区〟の破壊は、子どもたちの意思だと？」

那月の声にかすかな怒気が滲んだ。

千賀は重々しくうなずいて認める。

「その証拠に俺はタルタロス・ラプスの指導者ですらない。彼女たちの指揮官はほかにいる」

「だが、貴様を倒せば、八卦陣は破れる――話はそのあとで、ゆっくり聞かせてもらうぞ」

那月が差していた日傘をゆっくりと振った。それがきっかけになったかのように、千賀の周囲に武装した警備員の集団が現れる。特区警備隊の隊員たちだ。部隊の規模は二個小隊。四十人近くいるだろう。

「なるほど……たしかにおまえは少し変わったようだ」

千賀が感心したように薄く笑った。

昔の那月なら、問答無用で千賀を殺していただろう。千賀を生かしたまま捕らえようとすることなど――まして、他人を手を借りることなど決してなかったはずだ。

護るべきものを手に入れたことで、彼女は弱くなったのだと千賀は断定する。

「今のおまえでは〝タルタロスの薔薇〟は止められぬよ、南宮那月！」

勝ち誇ったように言い放つ千賀に、特区警備隊の隊員たちが銃を向けた。工場跡に地鳴りのような轟音が響いたのは、その直後だ。

「なに……!?」

突如として周囲を満たした爆発的な呪力の流れに、那月は表情を硬くした。

廃工場の敷地内に取り残された屑鉄の山が、意思を持つ生物のように流動して盛り上がる。やがてそれは巨大な人の形となって、夕暮れの空を背に咆哮した。

7

占城と雪菜が人工島東地区の倉庫街に辿り着いたのは、すっかり陽が暮れたあとのことだった。

よるモノレールの遅延や混雑で、予想以上に移動に時間がかかったのだ。

幸いなことに凪沙は入院中の父親の見舞いに行ったので、彼女に黙って家を抜け出すのは、そう難しいことではなかった。ついでに会社に泊まりこんでいる母親の様子も見てくるように頼んであるので、凪沙の目を気にせず自由に行動できるはずだ。

今夜のところは、凪沙の目を気にせず自由に行動できるはずだ。

「さすがに、陽が暮れるとだいぶ冷えてくるな」

容赦なく吹きつけてくる夜の海風に、占城は肩をすくめて言う。

亜熱帯気候に位置する絃神島とはいえ、真冬の夜はそれなりに気温も下がる。ひと気のない倉庫街の殺風景な雰囲気が、寒々しさを余計に強調しているようだった。

「はい。上着を持ってきたのは正解でした」

いつもの制服の上にコートを羽織った雪菜は、強い風に乱された髪を押さえている。占城が初めて目にする新品のコートだ。

「まー……たしかに綺麗だけどな。ちょっと新鮮だし。眺めてて飽きないっつうか」
「は、はい？」
唐突な古城の呟きに、雪菜が狼狽して身体を硬くする。
「先輩……いきなりなにを言い出すんですか……!?」
「姫柊は、そんな好きでもなかったか？」
「いえ、たしかに気に入ってますけど……凪沙ちゃんが選んでくれたデザインだし……」
自分のコートの襟元をつかんで、雪菜はぼそぼそと消え入りそうな声で言った。その頬が、夕陽の照り返しを受けたように赤い。
しかし古城は、それを聞いて怪訝そうに首を捻り、
「なんの話だ……？」
「え？　なんの話だったんですか……？」
「いや、このあたりって再開発されたばかりだろ。だから夜景が新鮮だな、と思って」
「は……？　夜景？」
紘神島の夜景を物珍しそうに眺める古城を、雪菜はどこか傷ついたような表情で睨みつけた。そしてすぐに気落ちしたように、はあ、と深く溜息をつく。
「そうですか。そうですよね」
「まさか、またここで姫柊と夜景を見ることになるとは思ってなかったけどな」
拗ねたような雪菜の表情には気づかず、古城は懐かしそうに目を細めた。古城は前にもここで連続魔族襲撃事件が起きていたころのことである。
うどこのあたりを訪れたことがあるのだ。
四カ月と少し前。紘神島で連続魔族襲撃事件が起きていたころのことである。
「先輩が眷獣を制御できなくて、このあたり一面を焼き払ったんですよね」

やけに真新しい倉庫の群れを見回しながら、雪菜は少し意地悪な表情で言った。この付近の建物が小綺麗なのは、つい最近になって建て直された直後だからだ。もとの古い倉庫街を消滅させてそこを更地に変えたのは、ほかならぬ古城自身だった。

「あのときは、ああでもしなきゃ姫柊を助けられなかっただろ」

「え？　わたしのせいですか？」

古城の反論を聞いた雪菜が、驚いたように目を見張る。

「待ってください。たしかに結果的には先輩に助けられた形になりましたけど、べつにわたしが先輩に頼んだわけではないですし――」

「だけど実際に殺されかけてたじゃねーかよ」

「それはそうですけど、そもそも先輩が眷獣の制御に失敗しなければ、あんな被害は出なかったんですから！」

「仕方ねーだろ。あれはまだ姫柊の血を吸う前だったんだし」

「そうでしたね……」

雪菜がなぜか急に無表情になって答えた。背負っていたされていた穂先が展開し、金属製の柄がスライドして伸びた黒いギグケースから、彼女は銀色の槍を抜く。格納

「今はわたしだけじゃなくて、ほかの子の血もたくさん吸ってるみたいですけど――」

「ちょっと待て……どうしてそこで槍が出てくる!?」

古城が恐怖したように後ずさる。しかし雪菜が見ていたのは古城ではなく、倉庫街から少し離れた巨大な工場の建物だった。閉鎖された錬金術プラントの跡らしい。

無人のはずのその敷地内から、強い魔力が放たれている。魔術に疎い占城ですら、はっきり感知できるほどの強烈な波動だ。

「姫柊！　あれは――」

「特区警備隊です！　まさか……発砲してる!?」

夕闇の中に、銃の発火炎とおぼしき光が瞬いていた。銃声らしき音も聞こえてくる。だ。特区警備隊の隊員たちが、何者かと交戦しているのだ。

「タルタロス・ラプスの狙いは、備蓄食料じゃなかったのかよ……!?」

背後の倉庫街を振り返って、占城は叫んだ。

食料備蓄倉庫が狙われるという仮説は、アスタルテ経由で那月にも連絡済みだ。に、特区警備隊が千賀たちを発見しても不思議ではない。

だが、戦場となっている工場跡地は、倉庫の建ち並ぶエリアから一キロ近く離れていた。想定外の事態に雪菜が困惑している。

「そんな……あの距離から呪術を発動できるなんて……!?」

古城たちが立つ倉庫街の地面に、光り輝く血管のようなれた膨大な呪力が、この地区一帯に流しこまれているのだ。

やがてその呪力を吸い上げて、人工の大地に埋めこまれていた石と金属の塊が動き出す。全高七、ルにも達する人型の怪物。巨大な巨石傀儡だ。

怪物たちの出現と同時に、倉庫街には濃霧が立ちこめ、がひび割れて、風に飛ばされた瓦礫が宙を舞った。

「嵐と波浪を操る傀儡……まさか、石兵……!?」

「石兵？」

呆然と巨石傀儡の群れを見上げる雪菜に、なんだそれは、と古城が訊き返す。

「法奇門の奥義です。かつて蜀漢皇帝の軍師、諸葛亮が設置して、呉の武将率いる五万の軍勢を壊走させたといわれています」

「五万の軍勢って……マジかよ……」

戦争の道具として使われたときの風水術の恐ろしさを、人で、数万の軍勢にも匹敵するのだ。龍脈から汲み上げた呪力を使って巨石を操り、天候をも自在に変動させる。大規模軍事術式と呼ばれるのも道理だった。

「姫柊の槍でどうにかできないのか？」

地表に浮かび上がる呪術の流れを睨んで、占城が確認した。雪菜が悔しそうに首を振る。

「石兵を動かしてるのは、大地の気脈そのものですから……いくら〝雪霞狼〟でも……」

「それを全部無効化するのはさすがに無理か……！　だったら力ずくでやるしかねーな！」

古城は獰猛に犬歯を剝いた。風水術の発動そのものを防げないというのなら、生み出された怪物を止めるしかない。視界の利かないこの状況で第四真祖の力を使うのは危険だが、迷っているような時間はなかった。

「疾く在れ、〝双角の深緋（アルナスル・ミニウム）〟！」

占城の全身の血液が沸騰したように膨大な魔力を放ち、と大気の振動を実体化させた、緋色の鬣を持つ双角獣。世界最強の吸血鬼――第四真祖の眷獣である。

吸血鬼は自らの血の中に、眷属たる獣を従える。

眷獣とは、純粋で濃密な魔力の塊だ。そこに存在するだけで物理法則をねじ曲げ、凄まじい勢いで宿主の生命を喰らう。眷獣を召喚し、使役できるのは、無限の負の生命力を持つ吸血鬼だけだといわれていた。だからこそ吸血鬼は最強の魔族なのだ。

占城が喚び出した双角獣の蹄が、巨石傀儡を薙ぎ払う。傀儡の堅牢な体軀が、砂細工のように粉々に吹き飛んだ。

勢い余って人工島の大地も派手に抉れるが、古城は見なかったことにする。第四真祖の眷獣は、制御が極端に難しいのだ。精密な操作など不可能に近い。多少の犠牲を払ってでも、今はとにかく傀儡の数を減らすのが優先だ。が――

「再生する……!?」

破壊された傀儡たちの代わりに、飛び散った瓦礫の塊が、人の形となって起き上がった。双角獣が破壊すればするほど、結果的に傀儡の数が増えていく。

「五万の軍勢を壊走させたってのは、そういうことかよ……！　キリがねえぞ！」

荒々しい呼吸を繰り返しながら、占城がうめいた。

な地形だ。戦いが長引けば長引くほど、被害が加速度的に増えていく。建物が密集する倉庫街は、

「わたしが術者を倒します！　先輩はここで時間稼ぎを――」

雪菜がそう叫んで駆け出した。無限に再生する石兵ではなく、廃工場にいる千賀毅人を先に倒すべきだと考えたのだろう。

だが、走り出して何歩もいかないうちに、雪菜は驚いて立ち止まる。

旧いスクーターによりかかった小柄な少女が、行く手を阻むように待ち構えていたからだ。

「悪いけど、それをやらせるわけにはいかないのよね」

頭に被ったヘルメットを撫でながら、スタジャン姿の少女が苦笑する。

雪菜は呆然と彼女を呼んだ。

「ディセンバー……さん……!?」

「覚えてくれたんだ。嬉しいな。だけど、さん付けはいらないよ」

最初に出会ったときと同じ、屈託のない口調でディセンバーは言った。

「やっぱりおまえもタルタロス・ラプスの仲間だったのか……？」
傀儡（ゴーレム）が再生するまでのわずかな隙（すき）をついて、古城が彼女を睨（にら）みつける。戦場に現れた彼女を見ても、まだ信じられない気分だった。
「仲間か。ふふ、いい響（ひび）きね」
ディセンバーが愉（たの）しげに笑ってみせる。
「〝第四真祖（だいよんしんそ）〟暁（あかつき）古城（こじょう）――よかったら、あなたも仲間にならない？　もちろんお隣（となり）さんも、ご一緒にどうぞ。歓迎するわよ」
「……つざけんな！」
占城は、ディセンバーの言葉を遮（さえぎ）って声を荒らげた。
「凪沙（なぎさ）に近づいたのも、あいつが俺（おれ）の妹だと知ってたからなのか!?」
「ううん。それは違うわ」
それは違う、とディセンバーが繰り返す。
「ただの偶然というわけでもないけれど……そうね、強いて言えば、彼女のほうがあなたより先だったのよ。どちらにしてもあなたが気にすることじゃない」
「どうして俺たちにヒントをくれたんだ？　食料備蓄倉庫（グレートパイル）を襲（おそ）うことを――」
「んー……どうしてかな……」
自分でもよくわからないのだ、というふうにディセンバーは首を振った。
そして彼女は、目元を覆（おお）っていたゴーグルを外す。炎のように青く輝（かがや）く瞳（ひとみ）が、
「たぶん、あなたに会いたかったからよ。もう一度ね」
ディセンバーはそう言って白い牙（きば）を剝（む）いた。吸血鬼特有の鋭く巨大な牙だった。
占城を見る。

「姫柊、ディセンバーの足止めは俺がやる」

占城が、傍にいる雪菜に囁くように告げた。

ディセンバーの小柄な身体から、凄まじい鬼気が放たれている。だがそれは古城には好都合だった。不老不死の吸血鬼が相手なら、手加減を考えずに済むからだ。

占城の意図を即座に理解して、雪菜がうなずく。

「わかりました。その間に千賀さんは私が――」

「だから、それはやらせないって」

のんびりと叫ぶディセンバーの背後で、巨大な影がゆらりと揺れた。分厚い鎧に覆われたような透きとおった獣の幻影だ。その凄まじい威圧感は、占城の眷獣と比べても遜色ない。

「眷獣!?」

ディセンバーの圧倒的な魔力を警戒して、走り出そうとした雪菜が動きを止めた。これまで占城たちが出会った吸血鬼の中でもディセンバーは明らかに異質で、それでいて掛け値なしに強大な力の持ち主だ。膨大な威圧感は、彼女の眷獣の性質が予想できない。

「くそ……！　〝双角の深緋〟！」

占城が双角獣に攻撃を命じた。だがそれよりも一瞬早く、ディセンバーの輝く双眸が古城を真正面からとらえている。

「退け、〝双角の深緋〟――！」

「な……に……!?」

強烈な目眩に襲われて、占城はたまらず膝を突いた。

緋色の双角獣が咆吼し、衝撃波の弾丸を撃ち放つ。だがその破壊的な咆吼は、ディけられたものではなかった。付近にあった食料備蓄倉庫の建物を、容赦なく粉々に粉砕したのだ。

「先輩!? いったい、なにを……!?」

雪菜が驚愕に声を震わせて叫んだ。しかし占城は答えない。全身をびっしりと脂汗で濡らして、苦悶の息を洩らしている。

「ぐ……お……!」

「先輩!?」

占城に起きた異変に気づいて、雪菜はハッとディセンバーを睨む。

しかし雪菜は、彼女に近づくことができなかった。上空から舞い降りてきた双角獣が、ディセンバーを庇うように雪菜の前に立ちはだかったからだ。

陽炎のように揺らめく巨大な蹄が、宿主であるはずの占城ごと、雪菜を踏みつぶそうとする。

「くっ! 〝雪霞狼〟――!」

雪菜はありったけの呪力をこめて、銀色の槍を突き出した。青白く輝く神格振動波の刃が、緋色の眷獣の攻撃を引き裂くようにして喰い止める。

「やるね、お隣さん」

ディセンバーが賞賛するように言った。霊槍の力を借りているとはいえ、ただの人間に過ぎない雪菜が、第四真祖の眷獣を防いだのだ。ディセンバーが驚くのも無理はない。

「でも、手加減するほどの余裕はないんだ。できれば怪我をする前に退いて欲しいな」

「そんなこと……っ!」

拒絶しようとした雪菜の背後で、新たに強大な魔力が出現する気配があった。魔力の源は、苦しげにうず

くまっていたはずの占城だ。ディセンバーが静かに見下ろす中、占城が新たな眷獣を召喚しようとしている。

実体化したのは、琥珀色の熔岩の肉体を持つ牛頭神。二番目の眷獣〝牛頭王の琥珀〟――

「な……」

雪菜が絶望のうめきを洩らす。第四真祖の眷獣二体を同時に防ぎきるのは、〝雪霞狼〟の能力をもってしても不可能だ。

全身に灼熱の熔岩をまとって、牛頭の眷獣が身の丈ほどもある戦斧を振り上げた。眷獣の攻撃目標は、倉庫街の中心部だった。

しかしその戦斧が振り下ろされる寸前、牛頭の眷獣の動きが静止する。

眷獣を止めたのは、真紅の荊。

虚空から忽然と現れた無数の荊が、眷獣に絡みついて動きを縛っていた。

「だから余計な手出しをするなと、忠告しておいたはずだがな……転校生」

雪菜のすぐ隣で声がした。幼い声に似合わぬ、傲然とした口調だ。淡い波紋のように虚空を揺らして、豪華なドレス姿の小柄な影が現れる。

「南宮先生……!?」

「ふん……だが、まさか、第四真祖を精神支配するとはな……何者だ？」

南宮那月の問いかけに、ディセンバーは無言で微笑んだ。吸血鬼の少女の背後では、彼女の眷獣の影だけがうっすらと揺れている。

「精神……支配……」

そんな馬鹿な、と雪菜は思わず声に出していた。

吸血鬼の肉体は、あらゆる魔術に対して、強い抵抗力を持っている。世界最強の夢魔である〝夜の魔女〟江

口結瞳の精神攻撃も、占城にだけは通用しなかった。
ましてや占城は吸血鬼の真祖だ。いくら吸血鬼同士とはいえ、ディセンバーが古城の精神を乗っ取るのは不可能なはずなのだ。
しかし実際に占城は彼女に支配され、眷獣の制御を奪われてしまっている。
「暁占城の眷獣には構うな、転校生。貴様の相手は、その女だ」
逡巡する雪菜に、那月が言った。雪菜は無言でうなずいて、ディセンバーが困ったように眉を上げた気がした。
がその前に雪菜の口からは、厳かな祝詞が洩れ出していた。
「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」
銀色の槍の表面が、幾重もの魔法陣に包まれた。
ありとあらゆる結界を斬り裂き、魔力を無効化する神格振動波の輝き。それを刃ではなく障壁へと変えて、ディセンバーとの間に張り巡らす。
「雪霞の神狼、千剣破の響きをもて楯と成し、兇変災禍を祓い給え！」
ディセンバーの瞳が輝きを増し、濃密な魔力の奔流が大気に溢れた。しかし雪菜の障壁が、光の楯となってそれをかき消していく。
「ぐ……っ……！」
占城が苦しげに息を吐いた。実体化していた二体の眷獣の姿が消える。
「先輩……！」
「どうやら精神支配は解けたようだな」
雪菜が占城の傍に駆け寄り、那月は無感動な口調で言った。

占城は額の汗を拭って、かすれた声で那月に訊く。
「千賀……毅人は……？」
「残念だが逃げられた。特区警備隊が追っているが、無意味だな。やつは囮だ」
「囮？」
「この倉庫街から、特区警備隊の目を逸らすためのな。それは貴様も同じだろう、吸血鬼？」
もう少し早く気づくべきだった、と那月が不機嫌そうにディセンバーを睨めつけた。
ディセンバーは、ちらりと可愛く舌を出して笑ってみせる。
「まだ、やる？　あたしたちの目的は果たしたし、これ以上の戦いは不毛だと思うけど」
「目的を……果たした？」
ディセンバーの奇妙な余裕に、占城はぞっとするような戦慄を覚えた。自分が、なにか取り返しのつかない思い違いをしていたのではないか、という不安にとらわれる。
その瞬間、地響きとともに人工島が揺れた。
立ち続けられないほどの衝撃が、占城たちを襲ってきた。
噴き上がる炎が、夜空を赤く照らした。無傷で残っていたはずの倉庫までもが、オレンジ色の閃光に包まれて吹き飛んでいく。
「備蓄倉庫が……」
次々に燃え上がっていく食料備蓄倉庫の姿を、占城は呆然と見上げていた。
爆薬はすでに仕掛けられていた。
千賀毅人が、食料備蓄倉庫から離れた廃工場に現れた理由。石兵などという大規模な術式、そしてディセンバーが占城たちの前で派手に能力を使ったのも、すべては囮。陽動だ。

「発火能力者（パイロキネシスト）……か」

那月が、無表情に背後を振り返って呟（つぶや）いた。

炎に包まれた倉庫街の中央に、女の子のような可愛らしい服を着た小柄な人影が立っている。藍色（あいいろ）の髪をした人工生命体（ホムンクルス）の少年だ。彼の両手から放たれた炎が、残っていた倉庫を次々に燃やしていく。

爆弾の取り扱いにおいて、もっとも困難なのは爆薬そのものではない。意図通りのタイミングで確実に爆弾を起爆させる装置の調達である。優秀な起爆装置さえ準備できれば、爆薬など、そこらにある肥料や小麦粉でも十分なのだ。

爆発物の捜索や解体においても、起爆装置の存在は重要な手がかりになる。当然、特区警備隊（アイランド・ガード）も、食料備蓄倉庫内に隠された起爆装置を探したはずだ。

しかし起爆装置は見つからなかった。

装置ではなく、発火能力を持つ過適応能力者（ハイパーアダプター）――それが、タルタロス・ラプスが用意した爆発物の正体なのだ。

「キーストーンゲート爆破テロの実行犯もやつか。道理で地下駐車場の危険物センサーの類（たぐい）が役に立たなかったわけだ。破壊集団の名も伊達（だて）ではないか。だが――」

那月（なつき）が感嘆するように息を吐く。そして彼女は、畳んだ日傘の先端を無造作にディセンバーに向けた。

「……もう逃がさん」

那月が、冷え冷えとした視線をディセンバーに向けた。ディセンバーは身体（からだ）をよじるが、から吐き出された金色の鎖が、ディセンバーの全身に絡（から）みつく。

けない。発火能力を持つ人工生命体（ホムンクルス）の少年も、同じように鎖に捕らわれている。

それを確認したディセンバーは、なぜか哀（かな）しげに微笑（ほほえ）んだ。

「やれやれ、仕方ないわね。できれば、毅人（たけひと）の友達を傷つけたくはなかったのだけど」

鎖に縛られたままのディセンバーが、ヘルメットの下のイヤフォンマイクに向かって呟いた。

「カーリ、お願い――」

彼女のその言葉が終わらないうちに、古城は、遥か遠くでチカッとなにかが輝くのを見た。千メートル以上も離れたビルの屋上から、誰かがこちらを見つめている。

「――っ!?」

雪菜が表情を凍りつかせて那月を見た。

那月の小柄な身体が、音もなく吹き飛ぶように宙を舞う。

狙撃されたのだ、と古城は気づいた。ディセンバーの仲間、タルタロス・ラプスの構成員が、雪菜の霊視ですら予測できないほどの超長距離から那月を撃ったのだ。

「呪式弾……だと……!?」

那月が愕然とした表情で呟いた。彼女の全身を護っていた分厚い魔力障壁が、透きとおった破片を撒き散らして消える。膨大な魔力を詰めこんだ弾丸が、那月の防御膜を貫通したのだ。

「那月ちゃん!?」

「南宮先生!」

地面に転がった那月の身体を、古城が震える手で抱き上げた。雪菜が二人を庇うように、槍を構えてディセンバーを睨む。

那月のドレスの肩がずたずたに裂けて、傷ついた那月の胸元が露わになっていた。

人形を思わせる無機質な肌に、深い亀裂が走っている。鮮血の代わりにこぼれ落ちたのは、尖った象牙質の破片だった。こちら側の世界にある那月の肉体は、生身ではない。魔力で動く依り代なのだ。

しかし、常人なら即死するほどの重傷を負って、那月の身体はぴくりとも動かない。

「着弾確認。第二射の用意を――」

仲間の狙撃手に向かって、ディセンバーが呼びかけた。

彼女を拘束していた金色の鎖は、すでに解けて地面に落ちていた。術者である那月が意識をなくしたことで、鎖の魔力も失われたのだ。

「もう一度だけ訊くわ、暁 古城。あたしたちの仲間になって」

ディセンバーが、古城を見下ろして訊いた。祈りに似た頼りない口調だった。

タルタロス・ラプラスの狙撃手は、この瞬間も銃を構えている。もしもディセンバーの誘いを断れば、その弾丸は再び古城たちを襲ってくるのだろう。

古城は、それでもきっぱりと首を振る。どうして、とディセンバーが寂しげに目を細めた。

「タルタロス・ラプラスの目的を知れば、きっとあなたも理解してくれる」

「どんな理由があるのか知らねーけど、人殺しに手を貸すつもりはねーよ」

だが、その前に古城は新たな眷獣を召喚していた。

浮かび上がる。

「そう。残念……」

ディセンバーが吐息混じりに肩をすくめた。狙撃の指示を出すために、彼女は唇を震わせる。

「疾く在れ、〝甲殻の銀霧(ナトラ・シネレウス)〟――！」

蜃気楼のように揺らめく眷獣の巨体が、古城の背後に

「カーリー……っ!?」

構わず狙撃を命じようとしたディセンバーが、小さく息を呑んだ。

古城が喚び出した眷獣は、幻影のような巨大な甲殻獣だ。その全身から吐き出されたのは、銀色の霧。魔力を含んだ濃密な霧が、古城たちの姿を瞬く間に覆い隠していく。

どれほど優秀な狙撃手でも、この状況での精密射撃は不可能だ。

「そう……霧を目眩ましにして……さすがはあの子が選んだ少年、ね……」

遠ざかる古城たちの気配を追うのを諦めて、ディセンバーが晴れやかに笑った。

霧の眷獣の力によって、倉庫街の火災も収束に向かっている。だが、備蓄されていた食料の大半は、すでに焼失したはずだ。タルタロス・ラプスの目的は果たされた。

「撤収しましょう、ロギ、カーリ。薔薇の準備は、整ったわ」

ディセンバーが仲間たちに向かって告げた。

そして彼女は一瞬だけ振り返り、紘神島の夜景を眺める。

人々がこの夜景を見ることは、もう二度とないだろう。その事実に少しだけ感傷を覚えた。

だが彼女たちの計画は止まらない。

薔薇の目覚め――紘神市の崩壊は、もう誰にも止められないのだった。

第二章　照準 In Her Sights

海面を照らす朝の太陽が、斜めに傾いた船体を照らしている。
煌坂紗矢華と斐川志緒は、甲板の隅に腰を下ろしていて、それぞれ無言で海の青を眺めていた。甲板にはほかにも船の乗客が、数十人ほど集まっている。
紗矢華たちを乗せた貨客船が、別の輸送船に衝突したのは、ちょうど昨日の今ごろのことだ。急激な濃霧とレーダーの不調、操舵手の不注意が重なった不幸な事故だった。
幸いなことに負傷者はなく、船体の損傷も致命的なものではなかったが、両船ともに航行能力を喪失。船内への浸水もひどかった。結果、乗客は傾いた甲板の上で、不安な一夜を過ごす羽目になったのだ。
「炊き出しのおにぎり、もらってきたよ」
羽波唯里が、四人分の食事を持って船内の食堂から戻ってくる。
よたよたした危なっかしい足取りで、彼女のあとについてきたのはグレンダだ。彼女が両手で運んでいるのは、湯気の立つヤカンと人数分の紙コップである。
「おちゃ、だー！」
「ああ。偉いな、グレンダ。唯里もありがとう」
志緒がヤカンを受け取って、グレンダの頭を優しく撫でた。どことなく無愛想なイメージの志緒だが、意外にも子どもや後輩の面倒見は悪くない。人知れずこっそりペットを可愛がったりするタイプなのだ。
「ほら、煌坂。唯里たちに感謝して食べるんだぞ」
「あ、ありがと……って、なんであなたが偉そうに仕切ってるのよ」
紗矢華は呆れ気味に志緒を睨んで、配給された食事を受け取った。

握り飯と漬け物、燻製タマゴだけの質素なメニューだが、状況が状況だけに文句も言えない。船内の非常食や飲み物のストックは、ぎりぎり足りるみたいだけど」

の備蓄も、そう潤沢ではないのだろう。

「救助が来るのは、早くて明日の午後だって。非常食や飲み物のストックは、ぎりぎり足りるみたいだけど」

紙コップにお茶を注ぎながら、唯里は、仕入れてきた情報を紗矢華たちに伝える。

志緒は少し驚いたように、食事の手を休めて唯里を見上げた。

「明日の夕方？　ずいぶん時間がかかるんだな……？」

「この近くだけで、ほかにも三十隻くらい航行不能になってて、救助が追いつかないみたい」

「三十隻か……」

むう、と志緒が、自分の唇に触れながらうめく。

流しているのが確認できた。

漂流の原因は、機関の故障や障害物との激突など様々だ。そのすべてが突発的な事故であり、人為的な破壊工作の痕跡は見られない。だが、ただの偶然で片付けるには、あまりにも事故の数が多すぎた。この状況では紘神島への海上交通は、ほぼ完全に麻痺したとみていいだろう。

「船の無線は借りられたんだよね？　獅子王機関はなにか言ってきた？」

「依然、原因の調査中だそうだ。ただ、紘神島でも要人の暗殺事件が起きているらしい。可能性が高そうだな」

唯里に訊かれて、志緒が答えた。情報が曖昧なのは、人工島管理公社や紘神市警察が混乱状態に陥っているせいだ。おかげで獅子王機関の本部としても、正確な情報を摑めずにいるらしい。

「魔導テロかあ」

唯里が不安そうな表情を浮かべて、紘神市の方角に目を向ける。

「この事故と無関係ってことはないよね。あたしたち、こんなところにいていいのかな」

「そうは言っても、船が動かないことにはどうしようもないだろ……」

志緒が弱々しく溜息をついた。

「煌坂はどう思う？」

「ん？　この燻製タマゴ、すごく美味しいんだけど……おかわり、ないの？」

真面目な口調で尋ねた志緒に、紗矢華はどこか上の空な態度でのんびり答えてくる。

たまま、グレンダが「だったっ！」と同意するようにうなずいた。同じくタマゴを頬張っ

「誰(だれ)が食べ物の話をしてるんだよ!?」

思わず殺気立って怒鳴る志緒(しお)。

「あー、はいはい。この事故が、何者かの呪術攻撃じゃないかって話でしょ」

そう言って紗矢華は渋々と顔を上げた。彼女が膝の上に広げていた手帳には、几帳面な筆跡で、細かな数式がびっしりと書かれている。計算中にちらちらと確認していたのは、ごつい軍用の腕時計と、正確な方位を知るための電子方位磁針だった。

「やっぱり八卦陣なのは間違いないと思うんだけど、局数の計算が合わないのよね。仮に太極を絃神島に置いたとして、絃神島への接近を妨害するには、こちらの海域に凶門を開くでしょ。でもこの時間帯の六儀の配置で、そんなことはあり得ないから――」

せめて術者の流派がわかれば楽だったのに、と紗矢華は無念そうに息を吐く。

そんな紗矢華の横顔を、志緒が唖然としたように見つめた。

「まさか、敵の呪術を内側から破る気か？　煌坂、これを一人で計算していたのか……？」

「そうだけど？　だって獅子王機関の舞威媛が、敵の呪法に引っかかって、そのままやられっぱなしってわけにはいかないでしょ」

紗矢華は事も無げに肩をすくめて言った。

獅子王機関の舞威媛は、呪術と暗殺の専門家だ。当然、彼女たちが身に着けた技能には、風水術に関するものも含まれている。にもかかわらず、敵の攻撃呪術に翻弄されて丸二日も海の上を彷徨っていた――なんてことになってしまったら、いい物笑いのタネだった。

「それに絃神島には、暁古城と雪菜がいるのよ。あの二人、ほっといたら、どうせ事件に首を突っこんで無茶するに決まってるんだから」

薄く焦りを滲ませた口調で、紗矢華が呟く。雪菜たちを助けに行きたくても、身動きが取れない今の状況がもどかしいのだろう。

「……古城くんと雪菜には、あたしも借りがあるんだよね」

黙ってそれを聞いていた唯里が、志緒をちらちらと見つめて言った。紗矢華に協力するようにと、それとなく志緒を促しているのだ。

「それに占城くんのお父さんって、まだ入院してるんだよね、志緒ちゃん」

「あ、暁牙城は関係ないだろ！」

「志緒ちゃんを庇って怪我したのに？」

「う……ぐ……！」

唯里に痛いところを指摘されて、志緒は握り飯を喉に詰まらせる。

先日の神縄湖の事件で志緒は、暁古城の父親に何度か命を救われていた。その際に暁牙城は負傷して、絃神島の病院に運びこまれたと聞いている。絃神島が大規模魔導テロの舞台になれば、当然、彼の身も危険になるわけだ。

「なあ、もしかして局数がズレるのは、置閏方式が乱数化されてるせいじゃないか？」

仕方ない、と姿勢を正しながら、志緒が紗矢華に助言した。

紗矢華がハッとしたように志緒を見る。

「月相の補正を暗号変換してるってこと？　そっか……だとしたら、三奇六儀を入れ替えて最初から計算をやり直さないと」

「たしかに煌坂の言うとおり、このままおめおめ引き下がっては、獅子王機関の舞威媛の名折れだからな。私も手伝う。計算式を教えろ」

言い訳がましく前置きしながら、志緒が紗矢華の隣に移動する。

ああでもない、こうでもないと喧嘩腰で口論しながらも、互いに協力して呪術攻撃の解析を始める二人。彼女たちの姿を眺めて、唯里はにこやかに微笑んでいる。

なにしろ同世代の舞威媛候補生の中では、紗矢華と志緒は、共にずば抜けた実力せてくれれば、これほど頼りになる状況はない。

「だけど、仮に八卦陣を解析できたとして、そのあとどうするんだ？」

複雑な計算を休みなく続けながら、志緒が訊いた。

八卦陣とは、風水術によって構築された、いわば呪術的な迷路である。大地の気強固だが、その術式さえ解析できれば、抜け道を見つけ出すのは難しくない。ただのド真ん中という現実だ。

「この術式から想像するに、紘神島を包囲している結界は、時刻に合わせて変化卦陣を解析して紘神島に辿り着ける経路を探し当てても、一定の時間が経てば陣がれてしまう。なんとかしてその前に通り抜けないと――」

「そこなのよね、問題は」

鉛筆を手の中で回しながら、紗矢華が唇を尖らせる。

「うーん……獅子王機関の権限で、この船の救助艇を徴用しようかとも思ったんだけど、度の速度じゃ陣形の変化に追いつかないのよね」

「そうだな。航続距離にも不安があるしな」

志緒はめずらしく紗矢華の意見に反論しなかった。

軍事用として開発された八卦陣の陣形変化はランダムで、しかも速い。貨客船にその変化速度に対応できない可能性が高かった。その事実に紗矢華たちは頭を抱え、

「あの……ちょっといいかな」

そう言って、手を挙げたのは唯里だった。

紗矢華たちは怪訝な表情で彼女を見る。唯里は、魔族との直接戦闘に特化した剣巫であり、風水術などの大

規模呪術は彼女の専門外なのだ。

それを自覚しているせいか、唯里は少し自信なさげに視線を彷徨わせ、

「ボートよりも速くて遠くまで行ける移動手段に、ひとつだけ心当たりがあるんだけど……」

そう言って、自分のすぐ隣に目を向けた。

そこにいたのは、鋼色の長い髪の少女だった。

「……だ？」

急に注目されたことに気づいたのか、口いっぱいにおにぎりを頬張ったまま、グレンダは、不思議そうに首を傾げてみせる。

2

壁一面に埋めこまれた大画面テレビには、燃えさかる倉庫街の様子が映し出されていた。昨夜、絃神島の食料備蓄倉庫で発生した爆破テロ現場の映像だ。

爆発によって引き起こされた火災は、折からの強風に煽られて燃え広がり、ひと晩経った今も収まる気配がない。

今回の魔導テロによって人工島管理公社が失った備蓄食料は、絃神市民一人あたりに換算して約六十日ぶんにもなるという。損失額は百億円とも、二百億円ともいわれていた。

「おうおう、派手に燃えておるな」

火災現場からの中継を眺めて、ニーナ・アデラードが無責任な感想を口にする。身長三十センチにも満たないオリエンタルな美貌の液体金属生命体――自称〝占の大錬金術師〟である。正確には、その成れの果て、といったところか。

「あんたは気楽に言ってくれるな。いくら他人事だからって」

占城がニーナを睨みつけながら、疲れ果てたような口調で言った。

南宮那月が所有するマンションの、だだっ広いリビングルームである。昨晩、古城たちはそのままこのマンションで朝を迎えたのだ。

れて負傷した――否、損傷した那月の肉体を運びこんで、古城も雪菜も、昨夜は一睡もしていない。那月の手当てや、特区警備隊への連絡などの雑務に追われて、休息する暇がなかったのだ。おかげで疲労はピークに達している。それでも燃え続ける倉庫街の様子が気になって、今さら眠る気にはなれなかった。

「焦がしてしまった食材を、今さら悔やんでも仕方あるまい」

そんな占城たちを皮肉るように、ニーナが素っ気なく言い放つ。

「しかしタルタロス・ラプスとやらも、火加減の調節をするべきではあったな。冷凍肉あたりをもう少し上手く調理してみせれば、余計な恨みを買わずに済んだものを」

「倉庫ごと肉を焼いたって、べつに感謝されたりはしねーよ」

バーベキューやってんじゃないんだから、と占城は顔をしかめた。そして気怠く息を吐く。

「あんたが変なことを言い出すから、腹が減ってきちまったじゃねーか」

「あ……」

ニーナの隣に座っていた叶瀬夏音が、少し慌てたように立ち上がった。

今の夏音は、淡いブルーのパジャマ姿だ。彼女の就寝直前に占城たちが押しかけてきたせいで、着替えるタイミングを逸してしまったのだろう。

「すみません、お兄さん。すぐに朝ご飯の用意にしました」

「ああ……違うんだ、叶瀬。そういうつもりで言ったんじゃないんだ」

大急ぎでキッチンに向かおうとする夏音を、古城は慌てて呼び止める。那月の家の居候とはいえ、事件とは無関係な夏音の安眠を邪魔した上に、朝食の準備までさせるのは、さすがに気が引けた。しかし夏音は、微笑んで首を振り、そのまま黙って行ってしまう。

「わたし、手伝ってきます」

「あ、待った。俺も行く」

雪菜と古城は、そう言って夏音を追いかけようとする。

「待て待て、いいから夏音の好きなようにやらせておけ。料理でもしておれば、不安も紛れるだろうしな。それに主らと一緒に食事が出来れば、夏音も喜ぶ。妾も那月も、人類の喰い物の味はわからぬのでな」

「そうか……そういや、あんたたちの身体は……」

自嘲するように笑うニーナを、古城は硬い表情で見返した。

それを止めたのはニーナだった。

い。それは那月も同じだろう。

ニーナは金属生命体だ。物質変換によって食物を体内に取りこむことは可能でも、料理の味まではわからな

那月の本来の肉体は、無機質な人形のものだったのだ。

る那月は、彼女が魔力によって動かしている分身だ。

"監獄結界"と名付けられた、彼女自身の夢の中で眠り続けている。現実の世界にい

理屈ではわかっていたことだが、実際にそれを目の当たりにすると、やはり驚きは大きかった。呪式弾の直撃によって破壊された那月の肉体は、無機質な人形のものだったのだ。

不安げに目を伏せたまま、雪菜が訊く。

「南宮先生は、ご無事なんでしょうか……」

古城と雪菜は、那月の治療には手を出していない。損傷した那月の身体を実際に調べたのは、ニーナとアスタルテだけである。古城たちには、魔術の依り代を修理することはできないし、傷ついた自分の姿を古城たちに見られることを、那月が嫌がるだろうと思ったのだ。

「まあ、彼奴本人は無傷であろうよ。自らの夢の牢獄に囚われた〝空隙の魔女〟本体を傷つけることなど、たやすく出来ることではないからな」

素っ気ない口調でニーナは言った。

「とはいえ、魔力の依り代となるべき人形が、あの状態ではな。現実の世界で動けるようになるまでには、まだ当分かかるだろうよ。依り代を破壊されたときの衝撃も、彼奴には伝わっておるだろうしな」

「なるほどな……」

占城は重苦しい気分でうなずいた。

那月にとって、あの依り代の人形は、音楽家にとっての愛用の楽器みたいなものなのだろう、と想像する。

演奏中に楽器が壊れれば、演奏者も相応の傷を負う。もちろん楽器が壊れたままでは、傷が癒えても正しい演奏はできない。ましてや代わりの道具がすぐに用意できるはずもない。

「あんたの力でどうにかならないのか？　古の大錬金術師なんだろ？」

「依り代の修繕だけなら、造作もないぞ」

ニーナはあっさりと答えてくる。元素レベルで物質を自在に操る彼女にしてみれば、壊れた人形を元に戻すくらい訳もないことなのだろう。

「だが、それでは意味がないのだ。人間の傷口を縫い合わせたからといって、すぐに元通りに動くようにはなるまい？　それと同じだ。切れた血管と神経をつなぎ合わせるように、時間をかけて那月が自らの魔力を巡らせねばな」

「世の中、そうそう便利には出来てないってことか」

占城が落胆したようにぐったりとソファにもたれた。

「魔術だ錬金術だと誇ってみても、世界の理には逆らえぬ。そのあたりは科学となんら変わらぬ。実に不便なものよ」

うむ、とニーナが首を横に振る。

「まあ、それはわかるけど」

正直ショックだな、と古城は思わず本音を口にする。

タルタロス・ラプスを舐めていたつもりはないのだが、ここかで根拠もなく思いこんでいた。なんだかんだで彼女に頼り切っていたのだ。そんな自分の甘えを突きつけられた気分だった。

「すみません……わたしが狙撃を防げなかったせいで……」

雪菜がうつむいたまま小声で呟いた。一瞬先の未来を視る――霊視の力を持ちながら、那月を救えなかったことに責任を感じているのだろう。

「獅子王機関の剣巫の未来視というやつか」

ニーナが興味を覚えたように眉を上げる。

「だが、たとえ一瞬先の未来が視えるといっても、肉眼でとらえきれぬものはどうしようもあるまい？　一キロ以上も離れた場所から、音速の二倍以上の速度で飛来する弾丸を撃ち落とすことなど、そもそも不可能であろうよ。たとえ主でなくともな」

「ですが……」

雪菜が、なにも言い返せずに唇を噛みしめた。

通常のライフル弾程度であれば、剣巫は簡単に避けることができる。弾丸そのものは見えなくても、着弾する瞬間の映像から、弾道を予測することが可能だからだ。

しかしタルタロス・ラプスが実行したのは、対物ライフルによる超長距離狙撃。しかも使われた弾丸は呪式弾だった。ニーナが指摘したとおり、那月が負傷したのは雪菜の責任ではない。雪菜にはどうすることもできなかったのだ。だがそれは雪菜にしてみれば、慰めというよりも、剣巫である自分の限界を突きつけられて

「まあ、実際、タルタロス・ラプスとやらが真っ先に那月を狙撃したのは当然だな。狙撃手の天敵のようなものだからの」

ふん、とニーナは感心したように鼻を鳴らす。

たとえ何キロも離れた場所に身を潜めていても、那月は一瞬でその距離を移動する。狙撃手にとって、これほど厄介な敵もいない。だからタルタロス・ラプスは那月を狙った。狙撃手の存在に占城たちが気づく前に、最大の障害を排除したのだ。

「そうか……やばいな……」

古城も事態の深刻さに気づく。那月が戦闘不能に陥ったことで、タルタロス・ラプスの狙撃を防ぐ方法はなくなった。不死身といわれる古城でも、半身を吹き飛ばされるような重傷を負えば、復活にはそれなりの時間がかかる。さらに雪菜の霊視でも回避不能となると、もはや古城たちには対抗するすべがない。

「そもそもテロリストを相手にするのなら、後手に回った時点で勝ちはないのだ。こちらから攻めこむか、最低でも先回りして待ち伏せを仕掛けなければな」

「口で言うだけなら簡単だけどな」

訳知り顔で助言するニーナを、占城がうんざりしたように見返した。

ちょうどそのときリビングのドアが開き、南宮邸のもう一人の居候が現れる。

藍色の髪の小柄な人工生命体――アスタルテだ。損傷した那月に付き添っていたせいか、身に着けているのは、いつものメイド衣装ではなく、淡いピンクのナース服である。

「なあ、アスタルテ。那月ちゃんは、どうなんだ？　大丈夫なのか？　なにか言ってなかったか。この際なんでもいいんだが……」

占城がかすかな期待をこめて訊いてみる。しかしアスタルテは、無表情なまま小首を傾げ、

「検索条件が不明瞭なため、回答不能です」

「お、おう……すまん」
融通の利かないアスタルテらしい返答に、古城はなんとなく謝ってしまう。
代わりに質問を続けたのは雪菜だった。
「南宮先生から、なにか指示はありませんでしたか？」
「該当する項目は一件です。薔薇についての調査を依頼されています」
「……薔薇？」
「肯定。〝タルタロスの薔薇〟について調査せよ、とのことでした」
古城と雪菜は困惑して、互いに顔を見合わせた。聞き覚えのない単語だった。だが、て、タルタロス・ラプスと無関係ではないだろう、と古城は思う。縋るような視線をニーナに向けても、彼女は素知らぬ顔で首を振るだけだ。
「お待たせでした」
謎の〝薔薇〟の正体について古城たちが頭を悩ませていると、エプロン姿の夏音が戻ってくる。朝食の準備が出来たらしい。食堂のほうから漂ってきたのは、パンの焼けるいい匂いだ。
「ああ。ありがとう、叶瀬」
「ごめんね、手伝わなくて。ご馳走になります」
食事の匂いに誘われるようにして、古城と雪菜が立ち上がる。
そんな古城たちを見上げて、ニーナは愉しげに笑い、
「遠慮なく喰うがいい。この島にいつまで食料が残っているか、知れたものではないからな」
「……」
嫌なことを言ってくれるな、と古城は本気で顔をしかめた。

薄靄の立ちこめる早朝の坂道を、制服姿の藍羽浅葱は、気怠い足取りで上っていた。

ふぁ、と大きなあくびを洩らして、目の端に浮いた涙を拭う。深夜遅くまで特区警備隊のサーバー復旧作業に追われていたせいで、昨夜はほとんど寝てないのだ。

「休校になるならなるで、もっと早く連絡を寄越しなさいよね。早起きして損したじゃない」

手に持ったままのスマートフォンに向かって、浅葱はイライラと愚痴をこぼす。

人工島東地区で起きた爆破テロの影響で、紘神市内の公立学校は、軒並み臨時休校になっていた。浅葱たちの通う彩海学園も例外ではない。

もっとも休校の情報が伝わってきたのは、浅葱がとっくに家を出て、最寄り駅に着いた直後のことだった。こんなことなら最初から授業をサボればよかったと、浅葱は軽く後悔する。

『ケケッ、教師連中もだいぶ混乱してるみてーだな』

スマホのスピーカーから流れ出したのは、妙に人間臭い合成音声の響きだった。紘神島全土を管理するスーパーコンピューターの現身――浅葱がモグワイと名付けた人工知能の声である。

「ホントよね。まあ、こんな状況じゃ無理もないけどさ」

あちこちの交差点に立っている強面の警察官を横目で眺めて、浅葱は小さく肩をすくめる。

モノレールの駅やバス停には、武装した特区警備隊の隊員までもが配置されていた。実際のところ、紘神島の島内には監視カメラやセンサーによる警備ネットワークが張り巡らされており、このような原始的な警備や巡視にはあまり意味がない。

それでもあえて人目につく場所に警官たちを立たせているのは、テロ対策というよりも、市民の暴動を防ぐためだろう。島外からの食料供給が途絶えている上に、食料備蓄倉庫までもが破壊されたのだ。市民が不安や

不信を抱くのは、むしろ当然のことだった。

『それなのに嬢ちゃんは出歩いてていいのかよ？』

モグワイの皮肉っぽい問いかけに、浅葱は平然と笑ってみせる。

「問題ないでしょ。特区警備隊は非番の隊員や魔族傭兵まで総動員して、犯人を捜し回ってるらしいわよ。島内監視ネットワークも取り返したし、タルタルなんちゃらって連中も、そうそう身動きは取れないって」

『殺されかけたばっかなのに、いい根性してるぜ』

呆れた声を出すモグワイに、浅葱が強気な表情で言い返す。

「べつにあたしが狙われたわけじゃないでしょ」

たしかに昨日の自動車爆弾には、テロ組織に狙われる心当たりはない。それよりも無差別爆破テロの現場に、たまたま遭遇したと考えたほうが自然だった。あんな不幸な偶然が何度も続くはずがない——と思えば、逆に気楽ですらある。

「まあ、基樹の顔を見たら、すぐ帰るわよ。占城も気にしてるだろうしさ」

そう言って浅葱は、殺風景な路地を曲がる。

キーストーンゲートの爆破テロに巻きこまれた矢瀬の父親は、いまだ行方不明のままだった。なんだかんだで小学すでに半日以上が経過して、すでに生存は絶望的ともいわれている。

救助作業の進展も気になるが、浅葱としてはそれ以上に矢瀬の精神状態が心配だった。

校入学以前からの長いつき合いなのである。感覚としては友人というよりも、頼りない兄か弟に近いし、それだけに矢瀬の性格もよくわかっている。

どうせ派手に落ちこんで、独りでいじけているはずだ。普段、軽薄に振る舞っているぶん、いったん沈むと暗いのだ。励ましてどうにかなる状況でもないが、せめて顔だけでも見ておこうと、浅葱は矢瀬の下宿先へと向かっているのだった。

そのとき浅葱の手の中で、スマホがブルッと小さく震えた。浅葱が画面を確認する前に、モグワイが勝手に内容を知らせてくる。

『メッセージだぜ、嬢ちゃん。占城の兄ちゃんからだ』

「占城から？　なんて言ってる……？」

浅葱が無意識に声を弾ませた。こんな早朝に、占城のほうから連絡してくるなんて、滅多にないことなのだ。

『〝タルタロスの薔薇〟って言葉を調べて欲しいとさ』

「――あの馬鹿は、あたしをなんだと思ってんのかしら。紘神島がこんな状況だから、少しはあたしのことを気に掛けてるのかと思えば……」

『ケケッ……期待して損したな、嬢ちゃん』

「うるさいわね！」

握り締めたスマホを軋ませながら、浅葱が怒鳴る。

「それより〝タルタロスの薔薇〟ってなに？　あんた、なにか知ってるの？」

浅葱に訊かれることを予想していたのか、モグワイの返事は速かった。

『さあな……ざっと検索してみたが、この島と関係してそうな情報はねえな』

「人工島管理公社の凍結書庫には？」

『該当なしだ。他国の情報機関に潜ってみてもいいが、さすがにそれは時間がかかるぜ』

「仕方ないわね。どうせ、例の〝魔族特区〟破壊集団と関係してるんでしょ。なんであいつはあたしに黙って危険なことばっかやってんのよ。むっかつく！」

浅葱は苛々と嘆息した。おそらく占城たちのことだから、昨夜の食料備蓄倉庫の事件にも巻きこまれていた

に違いない。

「調べてみるから少し待ってろ、って古城には言っておいて。あと、今から基樹ん家に見舞いに行くから、時間があったらあんたも来いって」

『へいへい』

笑いながら答えてくるモグワイを無視して、浅葱はスマホを制服のポケットに突っこんだ。

ちょうど見えてきたところだった。

紘神島ではめずらしい、木造二階建ての小さなアパートである。一階は大家の親子が暮らしをしているのだ。

は二階の一室を借りて独り暮らしをしているのだ。

そのアパートの階段の前に、彩海学園の制服を着た女子高生が立っている。

それに気づいて浅葱は足を止めた。

「あの人……たしか……」

んん、と浅葱は眉を寄せる。

眼鏡をかけた、地味な雰囲気の女子だった。直接話したことはないが、見覚えのある人物だ。矢瀬が数カ月に及ぶ熱烈なアタックの末、つき合うことになった三年生の先輩だったはず。

その先輩が無表情に矢瀬のアパートを見つめて、階段の前に立ち尽くしている。

彼女が胸の前に抱いているのは、果物を盛りつけたバスケットだった。病人のお見舞いなどに持参する豪華なフルーツのカゴ盛りだ。

「あの……基樹の部屋なら、二階の三号室ですよ」

眼鏡の彼女の背後から、浅葱はそう声をかけてみる。矢瀬の部屋がわからなくて困っているのだろう、と予想してみたのだ。

しかし彼女は浅葱を見ると、怯えたように瞳を揺らし、そのままダッシュで逃げ出そうとした。慌てたのは

浅葱のほうだった。

「あ、待って……待ってください！　え……と、基樹の先輩さん、ですよね？」

浅葱の呼びかけが通じたのか、走り去ろうとした彼女が立ち止まる。

そして彼女は、ひどく不安げな表情で浅葱を見た。まるで、彼氏の浮気現場に遭遇してしまった恋愛漫画の気弱なヒロインのような表情だ。

「あ、違うんですよ！　あたしは基樹とはただのクラスメイトで、単なる幼なじみのよしみで様子を見に来ただけで。お邪魔だったら今すぐ帰りますから！」

小動物のように怯える先輩の女子に向かって、浅葱は早口で説明した。こんなところで妙な誤解や面倒事に巻きこまれてはたまらない。

「あの、基樹とは本当になんでもないですから。あたしにはちゃんと彼氏――じゃないけど、まあ似たようなのがいるんで」

「……」

懸命の説得を続ける浅葱を、眼鏡の彼女は無言で見返した。そして胸元に抱いていた果物のカゴ盛りを、浅葱の前に差し出してくる。思わずそれを反射的に受け取ってしまう浅葱。

「あ……！」

浅葱が果物に気を取られた隙をついて、彼女は再び逃げ出していた。止める暇もない一瞬の出来事だ。見る間に小さくなる彼女の背中を、浅葱は呆然と見送るしかない。

『あーあ。あれは完璧に誤解したな』

モグワイが、くぐもった声でそう言ってケケッと笑う。

「ちょっと、やめてよ！　あたしのせい!?」

浅葱は、途方に暮れたように立ち尽くし、やがて深く溜息をついた。

4

置き忘れられていた占いバスケットボールが、緩やかな放物線を描いて、錆びたゴールリングに吸いこまれていく。

ひと気のない公園の片隅で、黙々とフリースローを繰り返していたのは占城だった。なにかに行き詰まるたびにフリースローに没頭するのが、バスケ少年だった小学生のころからの古城の習性だ。それは世界最強の吸血鬼と呼ばれるようになった今でもあまり変わらない。

夏音が作ってくれた朝食を平らげて、那月の自宅を出たのは一時間ほど前のこと。今の古城たちは、浅葱に送ったメッセージの返信待ちだった。〝タルタロスの薔薇〟について調べる手段を、浅葱に頼る以外に思いつかなかったのだ。

「なんか……嫌な雰囲気だな。パニックの前の静けさっていうか、殺気立ってるっつうか」

いい加減フリースローにも飽きた占城が、水飲み場で汗だくの顔を洗いながら呟いた。

気のせいなのかもしれないが、出歩いている人々の姿がやけに少ない。そのくせ、パトカーなどの警察車両や、特区警備隊の装甲車ばかりが目立つ。

一方で、スーパーやコンビニなどは通常の営業を続けていて、そのアンバランスさがどこか不気味だった。

人々が、無理に普段どおりの暮らしを続けているせいで、逆に社会が軋んでいるように感じられる。

「わたしの責任です……」

占城の前にタオルを差し出しながら、雪菜が弱々しく答えてくる。その唐突な彼女の言葉に、古城は少し困惑した。水音のせいで、聞き間違ったのかと思ってしまう。

「は？」

「わたしが食料備蓄倉庫を護れなかったせいで、こんなことに……」

「いやいやいや……なんでそういう話になるんだ。倉庫の護衛は姫柊の仕事じゃないだろ？」

「でも、わたしは獅子王機関の剣巫なのに……」

ひどく落ちこんだ表情で雪菜が言った。昨夜からなぜか口数が少ないと思っていたら、そんなことを悩んでいたのが理由だったらしい。

獅子王機関の主な任務は、大規模な魔導災害や魔導テロの阻止だといわれている。雪菜が古城の監視役として派遣されてきたのも、第四真祖の危険性が、国際的なテロ組織や、大規模災害と同格と見なされているせいだ。

そんな雪菜にしてみれば、食料備蓄倉庫の爆破を阻止できなかったことは、古城が考えるよりもずっとショッキングな出来事だったのだろう。が、

「見習いの剣巫、だろ？」

古城はそう訂正して、両手で雪菜の頬をつまんだ。そのまま左右に引き延ばし、無理やり笑顔の形にしてみせる。

「あの……先輩……？」

雪菜は戸惑いの表情を浮かべたまま、占城にされるがままになっている。

驚いたことにそんな状態でも、雪菜はやはり綺麗だった。少なくとも一人で思い悩んでいる彼女よりは、こちらのほうがいいと占城は思う。

「昔、俺がバスケの試合でやらかしちまった話をしたことがあったよな」

「はい……」

占城の唐突な呟きに、雪菜は神妙な顔でうなずいた。

自分一人で試合を決めようとやっきになって、チームの仲間と対戦相手を不幸にした。今の雪菜が抱えてい

る感情は、そのころの古城の鬱屈によく似ている。

「ディセンバーに眷獣を乗っ取られたときに、そんときのことを思い出したよ」

「え……？」

「世界最強の吸血鬼なんて呼ばれて、いい気になってて、一人でこの島を救えるような気にあのザマだ。那月ちゃんにも余計なことはするなって言われてたのにな」

「でも……それは……」

古城一人の責任ではない、と言いかけて、雪菜は言葉を呑みこんだ。

あのとき古城にはどうすることもできなかった。だが、それは雪菜も同じなのだ。前もってディセンバーの能力を知る方法も、狙撃や爆破を防ぐ手段もなかった。

たとえ第四真祖の力を手に入れたといっても、占城の身分は一介の高校生に過ぎない。そして雪菜は、そんな占城の監視役だ。特区警備隊ですら防げない破壊集団を出し抜くのは、最初から無理があったのだ。

そのことにようやく気づいたのだろう。雪菜の表情から硬さが消える。

「先輩……ですけど……」

「ああ、わかってる。〝魔族特区〟破壊集団だかなんだか知らねーけど、自分たちだけの勝手な理屈で力を利用してるのは、タルタロス・ラプスの連中も同じなんだろ」

古城は、そう言って雪菜の頬から手を離した。今も黒煙を噴き上げている倉庫街のほうへと視線を向けて、右拳を左の掌に打ちつける。

古城には、心のどこかに、第四真祖の力があればタルタロス・ラプスを止められるという驕りがあった。雪菜は黙って古城の横顔を見つめていた。

ディセンバーは、第四真祖の眷獣をも支配する力を持っていた。だが、それでは駄目なのだ。

そして彼らは、古城たちの目の前で那月を傷つけた。

ここから先は、もはや紘神島とタルタロス・ラプスの戦争ではない。ディセンバーや彼女の仲間と、占城たちの個人的な戦争になっている。だからこそ、タルタロス・ラプスを止めなければならない。今の占城たちには、心当たりがあります。ディセンバーの攻撃を防ぐ方法にも」

は、何度戦っても占城に勝ち目はない。しかし、

雪菜は、なぜか物憂げな表情を浮かべ、それでもきっぱりと言い切った。

占城は驚いて雪菜を見る。

「そうなのか？」

「はい。ただ、彼女の精神支配を〝雪霞狼〟で解除できることは証明済みです。それを知っているディセンバーさんが、次も真正面から素直に先輩と戦ってくれるかどうか……」

ちの個人的な戦争になっている。だからこそ、タルタロス・ラプスを止めなければならない。今の占城たちには、心当たりがある。

は、彼らを止める理由がある。

「やられたぶんは、きっちりやり返さないとな」

「はい！」

雪菜が、強い光のこもった眼差しでうなずいた。飼い主に忠実な子犬を思わせる表情だ。

そんなわかりやすく生真面目な雪菜の姿に、占城は小さく苦笑する。

「――とは言ったものの、問題はディセンバーの眷獣か。いったいなんなんだ、あの力は？」

昨夜のディセンバーが召喚した眷獣のシルエットを思い出し、古城は苦い顔をした。

タルタロス・ラプス最大の脅威は、千賀毅人の風水術だと思っていた。だが、違った。カーリと呼ばれていた狙撃手や、発火能力を操る人工生命体も十分に危険な相手だが、古城にとっての難敵は、やはりディセンバーの眷獣だ。

他者の眷獣を操る眷獣。ある意味では、最強の眷獣だったなにしろ第四真祖である占城の眷獣すら、彼女は支配することができるのだ。

「そうか……そうだな……」

ディセンバーの目的は絃神島の破壊だ。彼女には、無理に占城と戦う理由はない。

「だけどそれって、俺の眷獣を使わなくても、絃神島を壊せるってことでもあるよな？」

「え？　あ、ええ……そういうことになりますね……」

雪菜が、虚を衝かれたように考えこんだ。

第四真祖の眷獣は、それぞれが都市のひとつやふたつ、簡単に焼き払えるくらいの破壊力を持っている。他人の眷獣を支配するディセンバーが絃神島を破壊しようとするなら、占城の眷獣を操るのが、もっとも手っ取り早い方法のはずだ。なのに彼女はこれまでのところ、占城を積極的に利用しようとはしていない。

「なにか、ほかに絃神島を崩壊させる手段を用意してるってことか？」

「わかりません」と雪菜が首を振った。「獅子王機関が、〝イロワーズ魔族特区〟崩壊事件の再調査を行っているはずなんですけど、記録がほとんど残ってないらしくて――」

「今イチ頼りになるんだかならないんだかわかんねーな、姫柊のとこの組織……」

「そうかもしれません……」

うう、と責任を感じたようにうつむく雪菜。占城は、まいったな、と溜息を洩らし、

「あと残ってる手がかりは、〝タルタロスの薔薇〟って言葉だけか……」

そう呟いたのとほぼ同時に、占城の携帯が振動した。メッセージの着信があったのだ。

「藍羽先輩からですか？」

雪菜が、期待を滲ませた表情で訊いてくる。

しかし表示された短いメッセージを眺めて、占城は肩をすくめてみせた。

「ああ。薔薇については、いちおう調べてみるけど時間がかかるってさ。あと、矢瀬ん家に見舞いに行くから

つき合えって」
「矢瀬先輩のお父様は――」
「ニュースでは、まだなにも言ってなかったんだよな。とりあえず、行ってみるか」
「はい」
雪菜がうなずくのを確認して、古城は駅のほうへと視線を向ける。
その瞬間、視界の片隅に異質な人影をとらえて、古城はハッと身構えた。
中性的な体つきの小柄な少年が、突然、空中から溶け出すように姿を現したのだ。
アスタルテと同じ、自然界にはあり得ない藍色の髪。それは、彼が、錬金術と遺伝子操作によって生み出された人工生命体であることを示している。
「悪いけど、その前にボクたちにつき合ってもらえないかな、第四真祖」
変声期前の子どものような、澄んだボーイソプラノの声が聞こえた。
少年の周囲に、ゆらゆらと揺れているのは陽炎だった。温度差による大気の屈折を利用して、彼は自分の姿を消していたのだ。
「おまえ……昨日、倉庫街を爆破した……！」
「ロギでいいよ、暁古城。ボクたちの先生が……千賀毅人が、きみと話をしたがってる」
発火能力持ちの人工生命体が、抑揚の乏しい声で古城に告げてくる。
「なにを今さら――」
占城の表情が怒りに歪んだ。
話し合いに応じる理由などなかった。タルタロス・ラプスの情報なら、このロギと名乗った少年を捕らえて聞き出せば済むことだ。占城は、彼に詰め寄ろうと足を踏み出して、
「駄目です、先輩！」

その占城を止めたのは、雪菜だった。
ロギは、ふっ、と無感動に息を吐き、周囲を行き交う人々をゆっくりと見回していく。
普段よりも人通りが少ないとはいえ、駅のすぐ近くだ。通行人の姿は皆無ではない。
「わかってると思うけど、狙撃手がきみたちを狙ってるからね。流れ弾が、無関係な人たちに当たらないといいんだけど」
ロギが占城に宣告した。淡々とした声音だが、それは脅迫以外の何物でもない。
「おまえ……っ！」
「気持ちはわかるよ、第四真祖。でも、殺し合いなら、話を聞いてからでも遅くないよね？」
ロギが表情を動かさずに尋ねてくる。古城はギリ、と奥歯を鳴らした。
「どこに行けばいい？」
占城が圧し殺した声で訊く。
ロギは占城たちに背中を向けた。そのまま無防備に歩き出す。
「すぐにわかるよ。たいしたおもてなしはできないから、期待しないで」
期待してねえよ、と古城は口の中だけで悪態をついた。

5

その建物は、商業地区（アイランド・ウエスト）の裏通りに、ひっそりと建っていた。看板には、デフォルメされた肉球のマークが印刷されている。センガ・ペットクリニック――というのが建物の名前だ。
「……動物病院？」
ロギに案内されてきた占城たちは、その看板を見上げて、混乱したように足を止めた。

ごくありふれた動物病院の建物だった。こぢんまりとした建物はパステルカラーで統一され、窓には色画用紙で作った可愛らしい動物たちがいくつも貼りつけられている。

「まさか、ここに千賀毅人がいるのか……？」

「そう。ここがタルタロス・ラプスの隠れ家だよ」

半信半疑で質問する古城に、ロギが答えた。動物病院の入り口には、『休診』と書かれた札がかかっていた。

る。その人り口のドアを無遠慮に開けて、ロギは院内に入っていく。

古城と雪菜はためらいながらも、仕方なく彼のあとに続いた。

院内の待合室の雰囲気も、動物病院そのものだった。

「こんな街中に潜んでいたなんて……」

信じられない、というふうに雪菜が呟きを洩らす。

ロギは、ほんの少し得意げな気配を漂わせながら振り返り、

「病院なら、見慣れない人間が出入りしても怪しまれないし、危険な薬品だって仕入れられる。それなりに社会的な信用もある。便利だろ？」

「俺たちを、そんなところに連れてきていいのか？」

純粋に疑問を覚えて、古城が訊いた。ロギが投げやりに肩をすくめる気配があった。

「先生が決めたことだからね」

「先生、か」

なるほど、と古城は独りごちる。動物病院の医師ならば、先生と呼ばれても不思議はない。

ロギは、建物の奥にある診察室へと古城たちを手招きする。

手書きの可愛らしい標語やポスターが貼られた院内は牧歌的で、罠ではないかと警戒するのが馬鹿馬鹿しく思えるような雰囲気に満ちていた。

診察室で占城たちを待ち受けていたのは、簡素なオフィスチェアに座った中年男性だ。よれた灰色のジャケットを着て、神経質な芸術家のように髪を長く伸ばしている。部屋に入ってきた古城たちに気づくと、男は愉しげに目を細めた。知り合いの教え子を値踏みするような、好奇に満ちた表情だ。

「第四真祖、それに獅子王機関の剣巫か。よく来てくれた。礼を言う」

男が平坦な声を出す。敵意の感じられない彼の態度に、占城は少し戸惑った。

「あんたが、千賀毅人か？」

「そうだ」

「風水術を使って、紘神島を封鎖したのも……」

「まあ、俺の仕事というのもあるが、ということになるな」

占城の不躾な質問にも、千賀は苛立つこともなく超然と答えてくる。

そんな千賀のすぐ背後で、薄いピンクのカーテンが揺れた。そこから顔を出したのは、だぶだぶの分厚いコートを着た少女だった。可愛らしい顔立ちだが、無表情で目つきが悪い。首には長いマフラーを巻いている。

見た目の年齢はロギとほぼ同じ。十代半ばといったところか。

彼女がトレイに乗せて運んできたのは、カップ入りのアイスクリームだった。バニラ味とチョコレート味をそれぞれ占城と雪菜に渡し、余った最後のひとつを自分で取る。

「食べて」

「あ、ありがとうございます」

マフラーの少女に促されて、雪菜が反射的に礼を言う。

一方、手渡されたアイスを見下ろして、占城は微妙な表情を浮かべていた。アイスのフタにマジックで黒々と「ディセンバーの！」と注意書きが書かれていたからだ。

「いや、でも、これ……」
「大丈夫。誰も気にしてないから」
「そ、そうか」
勝手に食べていいのだろうかという不安と、出されたものに手を着けないのも失礼だろう、という常識の間で葛藤する占城。なんにしても、緊張感が削がれる展開だ。
マフラーの少女が部屋を出て行くのを待って、千賀が訊いてきた。
「タルタロス・ラプスの構成員が、子どもばかりなのが意外か？」
当然だろ、と占城は無言で千賀を睨む。吸血鬼であるディセンバーはともかく、ロギや、今のマフラーの少女は明らかに未成年だった。占城たちよりも年下かも知れない。
そんな彼らに、〝魔族特区〟を破壊する動機があるとは思えなかった。
だが、千賀は自嘲するように薄く笑ってみせる。
「言い訳に聞こえるかもしれないが、俺は彼らに、タルタロス・ラプスであることを強制してるわけじゃない。〝魔族特区〟の破壊は彼らが望んだことだ」
「あなたが、そう仕向けたのではありませんか……？」
思いがけず強い口調で千賀を非難したのは、雪菜だった。
「なにも知らない子どもたちに、テロリストとしての技能を植えつけて――」
「獅子王機関に育てられた攻魔師であるきみが、それを非難するとは思わなかったな」
「……っ！」
千賀の何気ない呟きに、雪菜が息を呑む。幼いころから、剣巫候補としての戦闘訓練を繰り返してきた雪菜と影の差こそあれ、鏡に映したようによく似ていた。
と、ロギたちの境遇は、光とたまたま雪菜を拾ったのが政府の特務機関で、ロギたちはタルタロス・ラプスに拾われた。ただそれだけの

違いなのだ。

「彼らはきみと同じだよ、剣巫。たとえばロギ――彼は、発火能力者として生み出された軍用人工生命体の実験体だ」

「実験体……」

雪菜が青ざめた顔でロギを見た。

人工生命体には聖域条約によって、準魔族としての権利が与えられている。軍事目的の生体改造は、国際的な非難をまぬがれない重大な条約違反のはずだった。

「もちろん違法な実験だ。それが暴露されて、廃棄処分になった彼を、ディセンバーが救った。かつて〝イロワーズ魔族特区〟と呼ばれていた都市でね。ほかの子たちも、まあ、似たり寄ったりの境遇だ」

「だから、紘神島を壊そうとしてるのか？　同じ〝魔族特区〟だから――」

「違う」

占城の疑問を、千賀がきっぱりと否定する。

「たしかに彼らは〝魔族特区〟に虐げられてきた存在だが、復讐のために〝魔族特区〟を破壊するつもりもない」

やない。それに、俺たちはすべての〝魔族特区〟を破壊するつもりもない」

「紘神島が破壊目標として選ばれたのには、特別な理由がある、ということか？」

「まあ、そういうことだ」

千賀が占城に笑顔を向けた。擦り切れたような疲れた笑顔だった。

「だから俺は、きみと話をする気になったんだ、第四真祖――俺たちが紘神島を破壊する理由を知れば、きみも俺たちに協力してくれるのではないか、と期待した」

「ディセンバーも同じ事を言ってたよ。俺に仲間になれってな」

溜息まじりに首を振り、占城は、攻撃的な目つきで千賀を見る。

「何度訊かれても答えは同じだ。人殺しに手を貸すつもりはねーよ」
「人殺しか。違いないな」
ふふ、と千賀が失笑を洩らした。
「だがそれは、紘神島を造り出した連中も同じだな。この島が引き起こす惨劇の犠牲者に殺した人間の数とは桁が違うぞ」
「この島が……惨劇を引き起こす……？」
「紘神島という人工島の正体は、咎神カインを復活させるための祭壇だ」
千賀が、感情の籠もらない静かな声で言う。
唐突に彼が口にした神の名に、古城は言葉を失った。古城たちはほんの数日前に、その神に殺されかけたのだ。
古城の反応に満足したのか、千賀は穏やかに目を伏せた。
「紘神島の設計者――紘神千羅は、カインの復活を望んでいた。この島が引き起こす惨劇の犠牲者たちが、紘神島の中枢には今も残っている」
「じゃあ、あなたたちが暗殺した人工島管理公社の幹部というのは――」
「ああ。彼らは紘神島設計者の同志たちだ」
雪菜の質問に、千賀が首肯した。
「聖殲派などというお粗末なテロリストとはわけが違う。何十年もの歳月をかけて咎神の復活の準備を整えてきた、本物の魔導の探求者たちだよ」
「証拠もなしに、そんな馬鹿げた話を信じろっていうのか？」
占城が荒々しく言い返す。しかし千賀は、むしろ不思議そうな表情で占城を見返した。

「紘神千羅という男は目的のためなら、どんな非道な手段でも実行する。おまえたちはそれを知っているはずだ」

「ロタリンギアの〝聖人〟の遺体のことか……」

千賀の指摘に、占城の表情が歪む。

紘神島の設計時、不足した要石の強度を確保するために紘神千羅が選んだ解決策は、禁忌とされた供犠建材の使用だった。ロタリンギアの聖堂より簒奪した〝聖人〟の遺体を上台にして、紘神島は建設されたのだ。

「そんな男が目的もなく、人工の〝魔族特区〟などというものを設計したと思うか？」

「だからって、今の紘神島の住民になんの関係がある……!?」

占城はかろうじて言い返す。

「あんたの言葉が真実だというのなら、それを公表すればいいだけだろ！　紘神島を破壊する必要がどこにあるんだよ!?」

「では訊くが、おまえたちは〝イロワーズ魔族特区〟が、あの都市を滅ぼしたという事実を知っていたか？　タルタロス・ラプス」

千賀の声に初めて怒気が混じった。占城と雪菜は、反論できずに沈黙する。

「おまえは正しいよ、第四真祖。証拠もなしに、俺たちの言葉を信じろというのは無理な要求だ。だからタルタロス・ラプスは自らの手で証明する。〝魔族特区〟を破壊したという実績が、俺たちの主張を裏付けてくれるだろう」

「それが、あんたたちが〝魔族特区〟を破壊しようとしている理由か……」

占城は、握り締めていたアイスのカップに視線を落とした。

そこに記された「ディセンバー」の文字が、やけにくっきりと目に焼きつく。

タルタロス・ラプスの目的を知れば、きっとあなたも理解してくれる——ディセンバーは、古城にそう言っ

た。そして彼女の言葉は真実だった。

少なくともタルタロス・ラプスの行動に、それなりの大義があることは認めざるを得ない。千賀が嘘をついている様子もない。

「六年前に〝イロワーズ魔族特区〟を沈めたときも同じだった。ディセンバーは、その前にも、いくつかの〝魔族特区〟を滅ぼしている。俺たちの前の世代のタルタロス・ラプスと共にな」

「そうか……ディセンバーは吸血鬼だったな」

占城が思い出したようにぼそりと呟いた。

タルタロス・ラプスの指導者が、千賀ではない理由が、ようやくわかった気がした。見た目は十代半ばのディセンバーだが、実際には彼女は、千賀よりも遥かに長く生きているのだろう。

「吸血鬼……？」

だが、占城の呟きを聞いた千賀は、怪訝そうに眉を寄せる。

「意外だな。まだ気づいていなかったのか、第四真祖？」

「なに？」

「まあいいさ。いずれわかることだ」

それよりも、と千賀が姿勢を正して占城たちを見据えた。

「俺の話はこれで終わりだが、返事を聞こうか、第四真祖」

「返事？」

「俺たちに協力する気はあるか？」

「協力、か」

古城は、自分が無意識に苦笑していることに気づいた。無言で隣に立っている雪菜が、ひどく不安げな表情で占城を見ていたからだ。

「やれやれ。結局、どいつもこいつも同じだな――」

占城が呆れたように息を吐く。「先輩？」と困惑して呟く雪菜の声がした。

「なんのことだ？」

千賀が顔をしかめて訊いてくる。古城の目元には、はっきりと落胆の表情が浮かんでいる。

「どうして自分たちだけで、なにもかも背負いこもうとするんだかな……って呆れてるんだよ。昔の自分を見せつけられてるみたいで、恥ずかしくなるぜ」

無感情だった千賀の声音に、かすかな苛立ちが滲み始めていた。

それを冷ややかに見返して、古城が唇の端を吊り上げる。

「あんたたちの言葉を信じてもらえなかったのは、本当に証拠がなかったせいか？　違うだろ？　信じてもらえなかったんじゃない。あんたたちが誰も信じなかったからじゃねーのかよ？」

「なに……？」

「カインが復活したら、大勢の犠牲が出るってあんたは言ったよな。だったら、まずは〝魔族特区〟を滅ぼすことじゃねえ。犠牲になる人々を救うことだろうが！」

占城の声が低く響く。その衝撃に打たれたように、千賀が頬を引き攣らせた。

「そんなこともわかんねーから、あんたたちは孤立するんだよ！　救いたかったはずの人々を、わざわざ敵に回してな！」

「公表か……やろうとしたさ。何度もな！」

千賀が初めて声を荒らげる。

「だが、その結果が今のこの状況だ。世界はなにも変わらなかった！　そして咎神復活の計画だけが着実に進んでいく――」

「だったら、どうして助けを求めなかった？　〝魔族特区〟をぶっ壊すような暇があるなら、あんたらの言葉を信じてくれる誰かを死ぬ気で探せよ！」

占城が、哀れむような視線を千賀に向けた。

「俺の知ってるハッカーが言ってたぜ。ハッカーってのは、誰かが隠し事をしてるのを見たら、なにがなんでも暴きたくなっちまう人種だ――ってな。そういう連中の力を借りれば、もっとほかのやり方だってあっただろうがよ！　今からだって――」

「勝手なことを……！」

怒りの感情を表に出したのは、意外なことに、千賀ではなくロギだった。彼の周囲に陽炎が噴き上がり、熱風が古城たちに吹きつけてくる。

「よせ、ロギ」

千賀が人工生命体の少年を制止した。

仲間が感情的になったことで、逆に冷静さを取り戻したのかもしれない。千賀の口調からは、すでに苛立ちが消えている。

そして千賀は静かに首を振り、冷徹な眼差しを古城に向けた。

「藍羽浅葱のことを言ってるのなら、残念だが、もう遅い」

「え……!?」

古城が呆然と目を見張る。ハッカーの話題を持ち出したのは占城だが、千賀の口から浅葱の名前が出てきたのは完全に予想外だった。

「なんで、あんたが浅葱のことを知ってるんだ……!?」

「まさか――」

雪菜の瞳が怯えたように揺れる。

「わたしたちをここに呼んだのは、藍羽先輩と合流させないために……!?」

「千賀つ――!」

占城は、全身の血が凍るような恐怖に襲われた。

ロギが公園で声をかけてきたのは、古城たちが浅葱に会いに行く直前のことだった。

を阻止するかのようなタイミングで、彼は占城たちの前に現れたのだ。

もっと早く疑問に思うべきだった。なぜこの重要な話し合いの場に、狙撃手カーリと、ディセンバーがいないのか。今ならその理由がわかる。彼女たちが浅葱を狙っていたからだ。

ディセンバーたちが浅葱の暗殺を終えるまで、古城たちをここに足止めする――それがタルタロス・ラプスの本当の目的だった。だから千賀は、隠れ家を失う危険を冒してまで、古城たちをここに連れこんだのだ。

「赦せ、とは言わんよ、第四真祖」

「待て!」

暴風に似た荒々しい魔力の奔流が、占城たちに向かって吹きつけてくる。ふと気づけば、診察室の床面に、複雑な魔法陣が浮かび上がっていた。

「風水術か――!」

「先輩、伏せてください!」

呪力に翻弄される占城を庇って、前に出たのは雪菜だった。ギターケースから引き抜いた銀色の槍を一閃し、その切っ先を床に突きつける。

槍の穂先から迸った閃光が、千賀の魔法陣を斬り裂いた。膨大な魔力が出し抜けに消失し、その反動で占城は片膝を突く。

先ほどまでの魔力の暴風が嘘のように消失し、診察室に静寂が戻って来た。

しかし千賀の姿はない。ロギとマフラーの少女も消えている。彼らは隠れ家を捨てたのだ。

「浅葱……！」

ゆらゆらと揺れるカーテンを見つめて、古城は力無く呟いた。

6

「だから、悪かったって言ってるでしょ」

家庭菜園に囲まれた小さな庭で、新鮮なマンゴーを頬張りながら浅葱が言う。

浅葱の前に座っているのは、ふて腐れたような表情の矢瀬だった。

矢瀬のアパートの庭先には木製のガーデンテーブルが置かれており、天気のいい日には外で食事が出来るのだ。アパートの住人なら誰でも自由に使っていいことになっている。

「まさか、緋稲さんだっけ……あんたの先輩と鉢合わせするとは思ってなかったのよ。いたんだけど。あ、すみません、アサコさん。ありがとうございます」

お茶を運んできてくれたエプロン姿の女性に、浅葱が愛想良く礼を言う。

「いいのよ、浅葱さん。久しぶりね、ごゆっくり」

微笑みながらそう言ったのは、矢瀬のアパートの家主だった。

年齢のよくわからない、不思議な雰囲気の女性である。

生くらいにしか見えない。アパート経営は副業で、ほかにも仕事を持っているらしいが、本人も、せいぜい女子大小学生の娘がいるのだが、浅葱も詳しいことまでは知らない。ただ矢瀬が年上好きなのは、少なからず彼女の影響があるのだろう、と浅葱は思っている。

そんな家主の姿が見えなくなるのを待って、矢瀬がわざとらしく大きな溜息をついた。

「つーか、なんで先輩が俺に持ってきたカゴ盛りフルーツを、おまえが喰ってんだよ？」

「あんたが手をつけないからでしょ。でもこういうのって、病人のお見舞いに持ってくるものじゃないの？

よく知らないけど」
「散々食い散らかしておいて言うことかよ」
気怠く頬杖を突いたまま、矢瀬は浅葱を恨みがましく睨む。
「まあ、おまえも心配して来てくれたんだろうから、いちおう礼は言っとくけどよ」
「そうそう、感謝しなさいよね」
恩着せがましい口調でそう言って、浅葱は二個目のマンゴーに手を伸ばした。
「それで、どうなの？　おじさまの救助活動は？」
「さっぱり音沙汰なしだな。救助が進んでないってことはねーんだろうけど、人工島管理公社も今は食料備蓄倉庫の復旧だけで手一杯だろうしな」
「心配ね……」
マンゴーをフルーツナイフで切り分けながらも、浅葱が神妙な表情を浮かべる。
矢瀬は、べつに、と強がるように笑って首を振り、
「あの男のことはどうでもいいんだが、あいつが死ねば、後継者争いで揉めるのは確実だからな。心配といえば、そっちのほうがよっぽど心配だぜ。下手すりゃ、もう何人か死人が出るかもな」
「ちょっと……やめてよね、そういうの。あんたン家の場合、シャレになんないんだから」
「あんたは大丈夫なんでしょうね？」
矢瀬の不謹慎な冗談に、浅葱が嫌そうに顔をしかめた。
「俺を殺して得するやつがどこにいるんだよ？」
「あんた自身に価値がなくても、本家の息子ってだけで、あんたを利用してやろうと思ってる連中はいっぱいいるんじゃないの？」
「何気にさらっと嫌なこと言うね、おまえ」

矢瀬が苦々しげな口調で言う。地位と財産を独占してきた彼の父親が命を落とせば、息子である矢瀬も相続争いと無縁ではいられない。生死不明の父親の捜索に彼が参加できないのも、そのような政治的駆け引きと無関係ではないのだろう。

「それにどうも納得いかねーんだよ。あの程度の爆破テロで死ぬくらいなら、あの男はとっくの昔に何十回もくたばってなきゃおかしいかねーんだよ。それを十分に理解しているからこそ、矢瀬は自分のアパートで腐っているのだ。

「わかんないけど、希望を捨てないのは大事よね」

浅葱が訳知り顔でうなずいた。実際、矢瀬顕重の死亡は、まだ確認されてはいないのだ。

「ほら。あんたの先輩だって果物もってきてくれる程度には、まだあんたのことを気に掛けてくれてるみたいだし」

「いやいや、おまえら、なんでいつも俺が先輩にふられることを前提に話してんの……!?」

矢瀬が声を裏返らせながら反論する。三年生の先輩とつき合っていると主張しているのは、主に矢瀬だけで、実際にそれらしい現場を目撃した者はいない。そのせいで、矢瀬はすでにふられているという説が有力なのだが、本人は頑強にそれを否定するのだった。

「――つたく、おまえといい、占城といい、俺に失礼すぎるだろ」

「そういえば、占城、遅いわね。見舞いに来いって言ったのに。メロンなくなるわよ」

「だからなんでおまえが全部喰ってんだよ!?」

いつの間にかメロンにまで手を出していた浅葱に気づいて、矢瀬が喚いた。

そんな矢瀬の表情が激変したのは、その直後のことだった。おぞましい物音を聞いたかのように浅葱の背後に視線を向け、恐怖に顔を歪めて立ち上がる。

「浅葱っ！」

「は……!?」

矢瀬に突然突き飛ばされて、浅葱は芝生の上に転がった。食べかけのメロンが地面に転がり、背中の痛みに顔をしかめる。

「な……なにすんのよ、馬鹿！　たかがメロンくらいでそんな怒らなくても――」

「頭を上げるな！」

「へ……!?」

矢瀬が浅葱を怒鳴りつけるのと、テーブルの上の果物が弾け飛ぶのはほぼ同時だった。果物を盛りつけていた籐カゴまでもが、破片を散らして砕け散っている。

どこか遠くで不吉な破裂音が轟いて、海鳥の群れが一斉に飛び立った。

「な、なに……？」

浅葱が呆然と視線を巡らせた。そんな浅葱を庇って地面に伏せたまま、矢瀬が苛立たしげに舌打ちする。

「狙撃だ。対物ライフルでこっちを狙ってやがる」

「そ、狙撃って……まさか、あたしが狙われてるの!?」

浅葱が声を震わせた。脳裏をよぎったのは、昨日の自動車爆弾のことだった。自分が誰かに命を狙われている――そんな馬鹿げた想像が、急に現実味を帯びて迫ってくる。

「ちっ……！」

矢瀬が、硬直する浅葱の腕を強く引き寄せた。

次の瞬間、浅葱は自分の耳元を、何かが通り過ぎて行く気配を感じた。銃声の到達とほぼ同時に、浅葱の背後でガーデンテーブルが爆散する。

頑丈な木製のテーブルが、炎を撒き散らして砕け散ったのだ。

「こんな街中で、焼夷炸裂弾だと……!?　正気か!?」

矢瀬の顔面からは完全に血の気が引いていた。

焼夷炸裂弾とは、軍用に開発された多目的弾頭の一種だ。大きな被害を与える。狙撃用ライフルによって射出することも可能だが、間に対しての使用は国際法で禁止されているはずだった。

だが、国際法による規制など、そもそも犯罪集団であるタルタロス・ラプスにはなんの意味もない。浅葱の命を狙っているのは、そんな凶悪な狙撃手なのだ。

「逃げるぞ、浅葱！　次が来る！」

矢瀬は、立ち竦む浅葱を引きずるようにして走り出す。

そんな二人を追い立てるように、新たに飛来した弾丸が、アパートの塀を粉砕した。

7

「駄目だ、つながらねえ……！」

携帯を耳元に押し当てたまま、占城は絶望の表情を浮かべていた。

何度電話をかけ直しても、浅葱が応答する気配はない。占城たちが公園でロギと出会って、すでに一時間近くが経過している。ディセンバーたちが浅葱の暗殺を実行するには、十分過ぎる時間のはずだった。

「落ち着いてください、先輩！　大丈夫です、まだ間に合います！」

激しく震える占城の手を握り締めながら、雪菜が必死で語りかけてくる。

「間に合う!?　だけど、ディセンバーたちはもう……」

「浅葱先輩は、矢瀬先輩のお見舞いに向かったんですよね」

「あ……」

冷静を装う雪菜の言葉に、占城は不意に我に返った。狭窄していた視野が広がり、ようやく少しだけ頭が回り出す。

「そうか、矢瀬の下宿は人工島西地区……この近くだ……」

占城は、雪菜とうなずき合って動物病院の外に出た。

浅葱の行動は気まぐれだ。学校が突然休校になっても自宅には戻らず、矢瀬の下宿先に押しかけた。その突発的な行動が、ディセンバーたちの暗殺計画に遅れを生じさせた可能性は低くない。いくらタルタロス・ラプスといえども、矢瀬が暮らしている安アパートの住所まで、事前に把握していたとは思えないからだ。

民家が密集した下町の住宅街では、狙撃地点を探すにも時間がかかる。まだ暗殺が成功したとは限らないのだ。こんなところでパニックになっている場合ではない。

「くそ……こんなときに那月ちゃんがいてくれたら……！」

狭い路地を駆け出しながら、占城は無意識に嘆きを口にした。

同じ地区の中とはいえ、矢瀬の下宿まではモノレールで二駅ばかり離れている。吸血鬼化した古城の脚力でも、五分や十分で辿り着ける距離ではない。

しかもタイミングの悪いことに、モノレールはちょうど最寄りの駅を出発した直後だった。古城たちの頭上の高架軌道を、銀色の車両が無情にも通り過ぎて行く。

この時間帯のモノレールの運行はおそらく十分間隔。次の車両を待っている時間はない。

「姫柊！」

「は、はい？」

雪菜が、いきなり振り返った古城に驚いて立ち止まる。そんな雪菜の小柄な身体を、古城は強引に抱き上げた。予期せぬ占城の行動に、雪菜は完全に硬直する。

「せ、先輩……!?」

「おおおお

「制御？」

驚く雪菜の問いかけに、占城は困惑したように首を傾げる。

「いや、よくわからん……けど、なんとなくいけそうな気がしたからな！」

「そ、そんないい加減な状態で……」

唖然とする雪菜の目の前に、ビルの屋上が近づいてくる。雪菜を抱き上げたまま占城が跳躍した距離は、三十メートルを超えていた。着地の衝撃を受けて、ビルの屋上が大きく陥没する。占城たちの肉体が、眷獣の魔力で護られているぶん、そのしわ寄せが周囲に及んだのだ。

だがそれを気にしている余裕はない。足元のコンクリートが砕け散るのも構わず、占城は再び跳躍した。落下地点は走行中のモノレールの屋根の上だ。

アルミ合金製の屋根を大きくへこませて、古城たちはモノレールに着地した。衝撃でモノレールの車体が激しく軋む。一歩間違えば大惨事になっていたところだ。

雪菜はそれを咎めようとして、膝を突く古城の顔を見上げた。そして絶句する。

「先輩……！」

「大丈夫……大丈夫だ……」

荒々しく息を弾ませる古城の瞳が、炎のように青く輝いていた。その全身を取り巻く漆黒の粒子が、いびつな翼のように広がっている。明らかに尋常な姿ではなかった。人間の姿のまま、眷獣の魔力を引き出した代償だ。肉体の吸血鬼化が進行しているのだ。

「浅葱を助け終わったら、こんな疲れる真似はもう二度とやらねーよ、頼まれてもな」

青ざめる雪菜を見返して、古城は頼りなく微笑んでみせた。

雪菜が、そんな占城にしがみついてくる。置き去りにされることを恐れる子どものように、彼女の細い肩は小刻みに震えていた。

「はい……約束ですよ……」
「ひ、姫柊、落ち着け……なんかいろいろ当たってるから……」
密着してくる雪菜の柔らかな感触に、占城が疲れを忘れて動揺する。
そんな古城の視界の片隅で、小さな光が瞬いた。一瞬遅れて、民家の庭先で炎が上がる。
音に混じって、かすかな銃声も聞こえた気がした。
「先輩、今のは――!?」
「矢瀬のアパートの方角だ！」
なにが起きたのかを理解して、雪菜を抱きかかえたまま占城は立ち上がった。対物ライフルによる長距離狙撃。タルタロス・ラプスの狙撃手が、浅葱を狙って発砲したのだ。
「行ってください、先輩！」
雪菜が占城の耳元で叫んだ。
「ああ！」
彼女の声に背中を押されて、占城がモノレールの屋根を蹴りつける。
モノレールへの被害を恐れて手加減したため、跳躍距離は十メートル足らず。近くのビルの屋上に着地して、占城は姿勢を立て直す。
「もう一度っ！」
「はい！」
漆黒の粒子の翼を広げて、占城が再び屋上を蹴りつけた。
その瞬間、占城の全身から力が抜けた。魔力の粒子が四散して、本来の重力が襲ってくる。
「――っ!?」
「先輩!?」

重力制御の魔力を失って、占城たちは大きくバランスを崩した。雪菜を庇って占城は背中から転倒。雪菜は受け身をとって無傷で立ち上がる。

そして雪菜は、背中から槍を引き抜いた。

銀色の槍を向けた先には、ゴーグルをはめた小柄な少女の姿があった。古城の眷獣を操って、重力制御の力を無効化したのは彼女の仕業だったのだ。

タルタロス・ラプスの指導者が、占城たちの行方を阻むように立っている。

「やっぱり来たのね、暁 占城。毅人に説得を任せたのは失敗だったかな」

最初に出会ったときと同じ、軽やかな口調でディセンバーが告げた。

占城が、額から流れる血を拭って立ち上がる。

「そこを退けよ、ディセンバー――！」

「残念だけど、それはできないの」

ディセンバーが、ゴーグルを外す。そこに現れたのは、炎のように輝く青い瞳だ。

「藍羽浅葱を生かしておくわけにはいかない。彼女はあまりにも危険な存在だから――」

「邪魔をするなっ！」

占城は、ディセンバーの言葉を最後まで聞こうとはしなかった。

タルタロス・ラプスの狙撃手が、再び銃撃したのが見えたからだ。矢瀬のアパートの庭先で、炎が爆ぜた。

浅葱の生死はわからない。だが、その一撃で、狙撃手の正確な位置はわかった。

占城たちのいるビルの屋上から、直線距離にして二キロ弱。第四真祖の眷獣をもってすれば、容易く焼き払える程度の距離である。

「疾く在れ、〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟！」

狙撃手がいる建設中のビルを目がけて、占城が眷獣を撃ち放つ。
喚び出したのは、雷光を撒き散らす巨大な獅子だ。
カーリと呼ばれていた狙撃手が何者だろうが、関係なかった。彼女が次の銃弾を放つ前に、無制限に解き放たれた占城の眷獣が、すべてを薙ぎ払って消滅させるからだ。
だが、それを防いだのは、やはりディセンバーだった。彼女が召喚した眷獣が、銀色の魔力の輝きを放って、雷光の獅子の行く手を阻む。
「退け、〝獅子の黄金〟！」
「てめえ……っ！」
自ら噛みちぎった占城の唇から、鮮血が溢れた。
見えない檻に囚われたかのように、雷光の獅子が動きを止める。ディセンバーの背後で揺らめいているのは、銀水晶のような輝きを放つ巨大な眷獣だ。
他者の眷獣を操る眷獣――
その透きとおった眷獣の魔力が、雷光の獅子を強引に押さえつけている。
しかし古城に躊躇 躇はなかった。
こうしている今も浅葱の命が危険に晒されているのだ。ディセンバーがそれを望むというのなら、力ずくでも彼女を排除する以外に、占城に残された選択肢はない。
「疾く在れ――！」
占城が両腕を頭上へと振り上げた。桁外れに膨大な魔力が解き放たれて、その衝撃が大気を歪めた。濃密な魔力が渦を巻き、新たな召喚獣の姿を形作る。
「疾く在れ、〝神羊の金剛〟！　〝双角の深緋〟！　〝龍蛇の水銀〟――！」

「退け、〝神羊の金剛〟！　〝双角の深緋〟！　〝龍蛇の水銀〟！」

ディセンバーが、古城の声をかき消すように叫んだ。

透きとおった眷獣の全身が輝きを増した。古城が新たに喚び出した三体の眷獣を、まとめて支配しようとしているのだ。

だがそれは、あまりにも無謀な行動だった。複数の眷獣を同時に従えようとすれば、全身の毛穴から鮮血が流れ出す。

古城の魔力が逆流して、ディセンバーの肉体が悲鳴を上げるのだ。

「駄目です、先輩！　これ以上は――！」

雪菜がたまらず悲鳴をあげた。魔力の負荷で傷ついているのは古城も同じだ。古城の全身の肌は裂け、吐く息には鮮血が混じっている。

それでも古城は、獰猛に笑っていた。ディセンバーの能力は完全ではない。代償もなく古城の眷獣を支配できるわけではないのだ。それがわかれば十分だった。

「――疾く在れ、〝夜摩の黒剣〟！」

古城が新たな眷獣を召喚した。出現したのは、刃渡り百メートルを超える巨大な剣だ。

ディセンバーの背後にある建設中のビルだった。

古城が重力をねじ曲げて巨剣を水平に射出する。ディセンバーの眷獣が、その攻撃を受け止めた。巨大な魔力の激突で大地が震え、周囲の建物が次々に倒壊していく。

「退け……我が同胞よ……お願い……！」

ディセンバーが絶叫した。魔力の逆流に耐えきれず、彼女はよろめいて膝を突く。

しかし古城もすでに限界を超えていた。ディセンバーの眷獣の精神支配は、眷獣だけでなく宿主である古城本人にも影響を及ぼす。精神的なダメージだけでいえば、圧倒的に古城のほうが消耗しているのだ。

「下がってください、先輩！　彼女はわたしが――」

雪菜が銀色の槍を構えて前に出た。ディセンバーの周囲を吹き荒れる爆発的な魔力の渦は、〝雪霞狼〟の力をもってしても容易には斬り裂けない。

それでも雪菜は怯むことなく、ディセンバーとの距離を詰めていく。

このまま古城たちの魔力の暴走が続けば、二人とも間違いなく無事では済まない。今ここでそれを防げるのは雪菜だけなのだ。

「――っ！」

だが、ディセンバーまであとわずか数歩に迫ったとき、雪菜は反射的に背後に跳び退っていた。その雪菜の眼前で、凄まじい炎が噴き上がる。

空間そのものを燃やす灼熱の陽炎。発火能力による奇襲攻撃だ。

「ロギさん……っ!?」

藍色の髪の人工生命体が、ディセンバーの傍に駆け寄っていく。タルタロス・ラプラスの仲間たちが、ディセンバーの援護に現れたのだ。

そして立ち竦む雪菜の背後で、ダン、と冷酷な銃声が鳴った。

腹部から鮮血を撒き散らし、両膝を突いたのは占城だった。

占城の背後に立っていたのは、拳銃を握った千賀毅人だ。

「千賀毅人――！」

雪菜が銀色の槍を構えて疾走した。一気に千賀との距離を詰め、彼の拳銃を打ち落とす。

だが千賀はその前に、残っていたすべての銃弾を占城に叩きこんでいた。
合計六発もの弾丸を喰らって、古城の全身は血塗れだ。それでも占城は、眷獣の召喚をやめようとはしなかった。
「……疾く在れ……〝水精の白鋼（サダルメリク・アルバス）〟！　牛頭王（コルタウ）……の……！」
「がっ……！」
占城が新たに喚び出した二体の眷獣が実体化する。
それを支配しようとして、ディセンバーが吐血した。
噴き出す魔力の勢いに耐えきれずに、ゴーグルが弾け飛び、彼女が被っていたヘルメットが落下する。その下に仕舞いこまれていた長い髪が、解けてふわりと広がった。
光の加減で虹のように刻々と色を変えていく、燃え上がるような金色の髪が――
「ディセンバー！」
ロギと千賀が、それぞれ彼女に駆け寄った。
占城と雪菜は、その光景を呆然と見つめていた。
初めて目にしたディセンバーの幼い素顔に驚いていたわけではない。その逆だ。古城たちは、彼女の素顔を知っていた。ほかならぬ占城の記憶の中で、幾度となく彼女を見ていたのだ。
「……な……どうして……」
占城がかすれた声で呟いた。雪菜は無言で唇を噛んでいる。
そんな彼らの姿を眺めて、ディセンバーが哀しげに笑った。孤独の滲んだ笑みだった。
「よくやった、ディセンバー――もう十分だ」
傷ついたディセンバーを抱えたまま、千賀が木製の呪符を周囲に巻いた。呪符に刻まれた刻印が輝き、簡易

的な魔法陣を形成する。空間転移術式だ。

「時間切れだ。ラーン――〝薔薇〟を起動しろ！」

耳元のイヤフォンマイクに向かって、千賀が命じた。

〝薔薇〟という言葉の響きに、雪菜が表情を凍らせる。

しかし言葉の意味を問い返す前に、千賀たちの姿は薄れていった。空間転移術式が発動したのだ。虚空に波紋のような揺らぎだけを残して、彼らは消滅する。

あとに残されたのは魔力の激突で破壊された街並みと、ボロボロに傷ついた占城だけだった。

「ディセンバー……おまえは、いったい……」

占城が、力尽きたようにその場に崩れ落ちた。

鮮血が止めどなく溢れ出して、周囲を濡らしている。常人なら即死していてもおかしくないほどの重傷なのだ。しかし占城は放心したまま、おそらく自らの苦痛にすら気づいていない。

「先輩！　しっかりしてください、先輩……！」

傷ついた占城を抱き上げて、雪菜が絶叫する。

魔力を含んだ禍々しい暴風が、その声を無情にかき消していく。

すべての眷獣たちが消え去ったあとの空は、異様なほど静かだった。

その日、迫り来る破滅の時を前にして、〝魔族特区〟絃神島は、恐ろしいほどの静けさに包まれていたのだった。

第四章　タルタロスの薔薇

Tartaros Roses

紘神島北地区（アイランド・ノース）は、企業や大学の施設が建ち並ぶ研究所街だ。何層にも及ぶ造り物の大地に、飾り気のない無機質なビルが密集している。ある意味、島内でもっとも人工島らしさを感じさせる、未来的な街である。

その最上層にある広場の片隅に、一人の少女が立っていた。

彩海学園（さいかい）の制服を着て眼鏡（めがね）をかけた、地味な印象の女子生徒だ。

そんな彼女の周囲には、海鳥の群れが集まっている。

艶（つや）やかな光沢（こうたく）を持つ純白の海鳥たち――呪符（じゅふ）によって生み出された式神（しきがみ）の群れ。

その数は二百羽、あるいは三百羽を超えているだろう。

それら膨大な数の式神を、少女は、たった一人で操っていたのだった。

目的は監視と、そして魔導（まどう）犯罪者の捜索だ。

やがてすべての鳥たちを綴（と）じこみ終えると、彼女は本を静かに閉じた。

そのままゆっくりと戻っていく。

紘神島（いとがみじま）全上に散らばっていた式神たちは、操り手である少女の元に帰還（きかん）すると、それぞれが一枚の呪符へと姿を変えた。そして、少女が広げていた一冊の本へと戻っていく。

彼女が見つめた先に立っていたのは、繊細（せんさい）そうな顔立ちの青年だった。

黒い中国服をまとう青年の姿は、どことなく占代の仙人や道上を連想させる。彼が無造作に握っていたのは、両側に穂先（ほさき）のついた黒い槍（やり）だ。

それが、その異形の槍、零式突撃降魔双槍（ファングッツァーン）を持つ青年の名前だった。

監獄結界からの脱獄囚、紘神冥駕（いとがみめいが）――

「そろそろ動き出す頃合いだと思っていました、閑」

たった一羽だけ消え残っていた純白の海鳥を、自らの左手の指先に乗せて、紘神冥駕が囁くように言った。

少女が操っていた式神の支配権を、冥駕が奪い取ったのだ。

しかし、それを殊更に誇示することもなく、冥駕は穏やかに問いかける。

「タルタロス・ラプス。獅子王機関としてもさすがに彼らは見過ごせませんか」

「そう、ですね……ですが、彼らを始末する前に、あなたに会いたいと思っていました」

獅子王機関三聖筆頭――閑古詠が、気弱にすら思える丁寧な口調で言った。

「教えてください、紘神冥駕。あなたはなにを考えているのですか？　タルタロス・ラプスの目的が紘神島の破壊なら、あなたが真っ先に彼らを潰していたはずです。あなたはなにを考えているのに、あなたは静観しているというのに――」

ンの巫女が命を狙われているというのに――」

「その真意を私に質しに来た、と？」

冥駕が愉快そうに訊き返し、古詠は小さくうなずいた。

「監獄結界から脱走したあなたを匿っていたのはＭＡＲでしたね、紘神冥駕」

「マグナ・アタラクシア・リサーチ社、ですか」

「特区警備隊や攻魔局も、人工島管理公社の出資者である世界的大企業には、おいそれとは手が出せない――だからあなたは、逃走中の身でありながらも、様々な情報を手に入れ、島内を自由に動き回ることができた。違いますか？」

「なるほど……面白い想像です」

冥駕が素知らぬ表情で微笑んだ。そして肩をすくめてみせる。

「ただし公の場では迂闊に口にしないほうがいい。あなたや獅子王機関が名誉毀損で訴えられても、私には責

任が取れませんので」
「そうですね。営利企業であるMARが、見返りもなく脱獄囚を匿うとは思えませんし」
占詠が真面目な口調で続けた。
「だとすれば、あなたには、MARになんらかの対価を約束したことになります」
「対価？」
「はい。将来、彼らに莫大な利益をもたらすであろう対価です。たとえば――そう、あですか……買いかぶりですよ、閑占詠」
画の全貌、のような」
「咎神カインの復活、
ふっ、と冥駕が自嘲するように笑った。
「たかだか一人の魔導建築技師の妄想に、それほどの価値があるとは思えませんね。おの作品は、テロリストの手で今まさに破壊されようとしている」
たしかに、と占詠は首肯した。
「紘神千羅の盟友であった矢瀬顕重が爆殺され、そして紘神島そのものも破壊されようとしている――今の紘神島の状況が、あなたの望む姿とは思えません」
「ええ。まさにその通りです」
黒衣の青年が平然と答えてくる。しかし古詠は首を振って否定した。
「ですが、タルタロス・ラプスの行動までもが、紘神千羅の計画の一部だとしたら話は別です。タルタロス・ラプスはなにも知らないまま、あなた方に利用されているのかもしれない」
「〝魔族特区〟破壊集団を利用、ですか。なんのために、私がそんな危険な真似を……？」
「それを確かめに来たのです、紘神冥駕」
占詠がそっと眼鏡に触れ、強い視線を青年に向けた。

「獅子王機関が、あなたや矢瀬顕重の計画を黙認してきたのは、咎神カインの存在が夜の帝国に対する抑止力になると判断していたからです。ですが、無意味にそれを実行するというのなら、見逃すことはできません」

「ふむ」

「あなたはタルタロス・ラプスを使って、自分たちの計画を進めようとしているのではありませんか？　咎神の復活、すなわち〝聖殲〟の再開を――」

「いつになく饒舌ですね、閑……」

黒衣の青年が、不意に口調を変えた。彼が無造作に構えた槍が、ヒュン、と風を裂くような異音を放つ。

「私からも、ひとつ訊かせてください。あなたは、藤阪冬佳のことを覚えていますか？」

「藤阪……冬佳姉様……」

冥駕が口にした予期せぬ名前に、古詠がはっきりと動揺した。大きく見開いた瞳を揺らし、怯えた子どものように唇を震わせる。

「ええ。先代の閑古詠――あなたの母親が見殺しにした、獅子王機関の剣巫です」

ほとんど表情を変えない冥駕の瞳に、強い感情の色が浮かんでいた。長い時間をかけて純化した、煮えたぎるような憎悪の色だった。

「違う……冬佳姉様は、任務で……生贄の巫女を庇って……」

古詠が半歩だけ後ずさる。本来なら、占詠の代わりに獅子王機関三聖と呼ばれるはずだった少女――

七年前、彼女は異邦の女神を信奉する呪術集団の里に潜入し、命を落とした。女神への供物として殺されかけていた幼い少女を救うため、たった一人で戦って死んだのだ。

紘神冥駕が多数の攻魔師を虐殺し、魔導犯罪者として監獄結界に収監されたのは、それからすぐのことであ

る。

「巫女を庇って、ですか……」

占詠の言い訳を嘲るように、ハ、と冥駕が笑った。

「ああ。そういえば、カインの巫女を庇って逃げてますよ。あのとき私が彼を殺しておけば、もっと面白くなっていたかもしれないのですが……ふふ……残念です」

「紘神冥駕、あなたは――！」

追い詰められた表情で、占詠が叫んだ。

世界を突然の静寂が包み、轟音がそれを打ち破る。

こまれたような違和感。存在しないはずの時間からの絶対先制攻撃の権利――〝静寂破り〟と名付けられた閑古詠の能力だ。

ふと気づけば冥駕の全身には、無数の銃弾が叩きこまれていた。

着弾の衝撃で、冥駕の身体が後方に吹き飛ぶ。

閑古詠の手に握られているのは、軍用のオートマチック拳銃だ。彼女がいつそれを取り出したのか、冥駕には知覚することができなかった。

「さすがは……〝静寂破り〟……零式突撃降魔双槍で呪力を無効化しようとお構いなしですか……」

焼け焦げた中国服の胸元を押さえて、冥駕がよろよろと起き上がる。

紘神冥駕の黒槍――零式突撃降魔双槍は、ありとあらゆる霊力と魔力を無効化する獅子王機関の〝廃棄兵器〟だ。その黒槍を起動している限り、いかなる呪術攻撃も、冥駕を直接傷つけることはできない。

だが、その零式突撃降魔双槍の機能をもってしても、〝静寂破り〟は止められなかった。呪術による防御ができない冥駕には、存在しない時間から撃ちこまれた弾丸は防げない。

「以前、一度だけ警告しました。私の力では、あなたを殺さずに止めることはできない、と」

拳銃に新たな弾倉を挿入しながら、占詠が言った。

呪術によって拘束できない冥駕を確実に捕らえるには、命を奪う以外に方法がない。

殺すつもりで、彼の前に現れたのだ。

「それでこそ、吸血鬼の真祖たちですら、目置く獅子王機関二聖の筆頭だ――」

冥駕は、そんな古詠を賞賛するように笑ってみせた。

「ですが、第四真祖は重大なヒントを与えてくれました。あなたが攻撃の間合いにさえ入ってくれれば、相討ちに持ちこむことができるのだと――」

「……」

怪訝な表情を浮かべる古詠に向かって、絃神冥駕は右手を上げた。その手に握られていたのは、スイッチひとつだけの小さなリモコンだった。

殺傷力のある武器には見えないし、仮にそれが武器だとしても、占詠の攻撃のほうが絶対に早い。だが、それを理解しながらも、絃神冥駕は勝ち誇ったように微笑んだ。

「ならば、反撃の時間差を限りなくゼロに近づけることで、あなたの絶対先制攻撃の権利を破ることができるはず――」

「――っ!?」

冥駕の言葉が終わる前に、古詠の全身が光に包まれた。

音もなく、巨大な爆発だけが巻き起こる。

はるか天上より降りそそぐ、灼熱の死の閃光。それが地球周回軌道上から放たれた対地レーザー砲撃だと、はたして古詠は気づいたのか――

「人工島管理公社の切り札、地球周回軌道上からの対地レーザー攻撃衛星ですよ……」

レーザー砲撃の余波を浴びて、冥駕の身体が地面を転がった。熱風が彼の肌を焼き、人工島の大地には巨大な穴が穿たれる。

そして爆心地にいたはずの古詠の姿は、跡形もなく消えていた。

対地レーザーの砲撃速度は、光の速さとほぼ同等だ。古詠の絶対先制攻撃能力をもってしても、その攻撃だけは防げない。冥駕が握っていたリモコンは、攻撃衛星を起動する引き金だったのだ。

「さようなら、呪われた一族の娘。私から、唯一の温もりを奪った報い……思い知れ」

役目を終えたリモコンを投げ捨てて、冥駕はゆっくりと立ち上がる。

全身に十数発もの銃弾を浴びながら、彼が苦痛を感じている様子はない。無惨に爆ぜた傷口からは、ほとんど出血していなかった。

漆黒の双槍を引きずって、傷ついた冥駕が歩き出す。

真昼の眩い太陽が、そんな彼の足元に、死相に似た濃い影を落としている。

2

アパートの建物の陰に隠れて、矢瀬基樹は荒々しく息を吐いていた。

周囲には、撒き散らされた焼夷剤による焦げた臭気が漂っている。暗殺者による最初の銃撃から、すでに三分近くが経っていた。

その間に撃ちこまれた弾丸は全部で四発。一発必中を信条とする狙撃手にしてみれば、失態ともいえる異例の状況だ。

それでも狙撃手が立ち去る気配はない。針のように研ぎ澄まされた冷徹な殺意は、今も絶え間なく浅葱に向

けられたままだった。
その殺意の発生源が、移動していることを矢瀬は知覚する。
「あの狙撃手、こっちに回りこむつもりかよ……！」
狙撃手の移動経路を予測して、矢瀬は小さく舌打ちした。建設途中だったビルの上から、その隣に建つ別のビルの屋上へと跳躍。さらにその横のマンションへと――常人ではあり得ない凄まじい移動速度だ。
狙撃に失敗したことで、逃走を開始したのではない。新たな狙撃ポイントに移動して、今度こそ確実に浅葱を仕留めるつもりなのだ。
「くそ、速エ……獣人か……！」
矢瀬の呟きに焦りが滲んだ。
フル装備の対物ライフルの重量は十五キロ近く。それを抱えたまま、ビルからビルへと飛び移ることなど、普通の人間に出来ることではない。だが、獣人の筋力と敏捷さをもってすれば、そんなデタラメな芸当も容易だ。おまけに対物ライフルの欠点である巨大な反動を抑えこみ、正確な射撃が可能なはず――
「まずい。このままだと、ここも危険だ！　逃げるぞ！」
「も、基樹……？」
矢瀬に乱暴に急き立てられた浅葱が、不安そうな表情で振り返る。ここに隠れていたほうが安全なのではないかと訴えているのだ。
「相手が移動してるって……どうしてそんなことわかるのよ？」
「あー……まあな、ちょっとしたコツがあるんだよ。ガキのころにいろいろ仕込まれてな」
「そういうもの？」
浅葱が半信半疑という表情で矢瀬を見た。
もちろん矢瀬が語ったことは大嘘だ。狙撃手の移動を見分けるコツなど存在しない。

矢瀬は狙撃手の行動を、音を使って知覚しているのだまれつき持っていた超能力の産物である。

矢瀬はその能力を使って、一キロ以上も離れた狙撃手向き。銃の作動音。そして狙撃手の心音や呼吸まで。

問題は対物ライフルの弾丸が、空気中の音の伝播速度ミングだけは、矢瀬の能力でもつかめない。矢瀬に出するのは、狙撃手が銃を撃つ前に、その射線上から逃ることだけだ。

「とにかく、逃げよう。ここはまずい。アサコさんたちを巻きこんじまう」

「逃げるって表通りから？　狙撃手が相手なら、地下道を使ったほうがいいんじゃない？」

「駄目だ。うちの親父が、それでどんな目に遭ったか、忘れたわけじゃないだろ」

矢瀬の冷静な反論に、浅葱は沈黙した。

人工物である絃神島の地下には、整備用の地下通路が網の目のように張り巡らされている。たしかにそれを利用すれば、狙撃からは逃れられるだろう。

しかし絃神島を襲ったテロ集団には、爆弾魔がいる。もしも地下通路に爆弾が仕掛けられていたら、それを防ぐ方法はない。反響の激しい地下通路の中では、矢瀬の〝音響結界〟も役に立たないからだ。

「浅葱、特区警備隊に連絡をつけられるか？」

「それは大丈夫だと思うけど……うん、大丈夫。電波は遮断されてない」

浅葱が、スマホの画面を確認してそう言った。自分が命を狙われているというのに、浅葱は意外に落ちついている。もともと冷静で頭のいい少女なのである。それに、ここ最近の様々な事件で、この程度のトラブルには慣れっこになっているのかもしれない。

「だったら今すぐ呼んでくれ。狙撃っつっても、あんなな大砲ぶっ放しまくってれば、居場所は丸わかりだからな。特区警備隊が駆けつけてきた時点で、あっちの負けだ」

「聞いてた、モグワイ？」

『いちおうな』

浅葱の問いかけに、皮肉屋の人工知能が答えてくる。

『ただ、残念ながら特区警備隊の到着までには、相当かかるぜ。連中も、今はそれどころじゃねーからな』

「は!?　なんでだ……!?　未登録魔族が対物ライフル持って暴れまくってるんだぞ!?」

最優先処理対象だろうが、と矢瀬は声を荒らげた。

しかしモグワイの返答は素っ気ない。

『大通りに出れば、すぐにわかるぜ』

「なんだそりゃ……!?」

思わず訊き返した矢瀬の背後で、民家のコンクリート塀が砕け散った。対物ライフルによる攻撃である。遮蔽物が粉砕されたことで、矢瀬たちの居場所が丸見えになる。

「浅葱、走れ！」

矢瀬が浅葱を突き飛ばすようにして怒鳴った。狙撃手に逃走経路を誘導されているのでは、という疑問が脳裏をよぎるが、考えている余裕が今はない。

しかしそれから三十メートルもいかないうちに、浅葱がぎょっとしたように足を止めた。

路上で巨大な爆発が起きて、アスファルトの破片が宙を舞う。

「基樹！」

「吸血鬼の眷獣だと……!?」

爆発の原因に気づいた矢瀬が、くぐもった声で低くうめいた。道路を塞ぐように出現していたのは、魔力の

輝きに包まれた巨大な獣だった。

全長は二メートル近くあるだろう。凶暴なヒグマに似ているが、もちろん自然界の生物ではあり得ない。実体化した濃密な魔力の塊。吸血鬼の眷獣だ。

「こんな街中で制御に失敗したのか!? 冗談だろ――!?」

予想外の事態に、さすがの矢瀬も混乱する。

眷獣の宿主である吸血鬼の男は、歩道の上に倒れている。男の身体に外傷はないが、彼の左手首に嵌まった金属製の腕輪が異様な赤い光を放っていた。そして彼の眷獣は、宿主を護るわけでもなく、ただ苦しげに暴れ続けている。完全に制御を失っているのだ。

体調不良などが原因で、召喚した眷獣の制御に失敗する――絶対に起こりえない事故ではないが、あまりにもタイミングが悪すぎた。

この道は逃走には使えない。そう判断して、矢瀬は路地を曲がろうとするが、

「待って、基樹。そっちも駄目!」

慌ててそれを制止したのは浅葱だった。

その理由を矢瀬もすぐに理解する。道路上にびっしりと細かな地割れが走っていたからだ。その地割れの中心地にいたのは、身長三メートルを超える巨体の男だ。

自宅の庭に倒れたその巨漢を中心に、凄まじい魔力が渦巻いている。

「巨人種族の精霊魔法……!?」

矢瀬は呆然と呟いた。背後の吸血鬼や、巨人種族だけではない。目に映る範囲のあちこちで、魔族が異常な行動を始めていた。

路上で獣化して苦悶している獣人種族。霧化状態のまま意識をなくしている吸血鬼。無差別に精霊を召喚し続けている妖精族――絃神島に住むすべての登録魔族が、一斉に暴走を開始したとしか思えない。

「いったいどうなってるのよ、モグワイ!? なにがあったの!?」

浅葱がスマホに向かって早口で怒鳴る。

人工知能からの回答は、腹立たしいほどに冷静だった。

『見てのとおりだ。紘神市内のほぼ全域で、意識を乗っ取られた魔族が暴走状態になってるんだよ。特区警備隊が総出で事態の収拾にあたってるが、なにしろ多勢に無勢だからな』

「俺たちを助けに来られないってのは、そういうことかよ……！」

矢瀬が苛立ちに頭をかきむしる。

特区内にいる魔族の一斉暴走。これまで聞いたこともない状況だが、これが〝魔族特区〟破壊集団の仕掛けた人為的な現象であるのは明らかだった。

紘神島に住む魔族は全人口の四パーセントに過ぎないが、それでも二万人を超えている。彼らが同時に暴走を始めたら、特区警備隊だけでは手に負えない。一般市民に負傷者が出るだけでなく、最悪、人工島そのものが崩壊することも考えられた。

「暴走の原因はなに？」

『さあな。嬢ちゃんはどう思う？』

モグワイが、浅葱の質問に質問で返す。浅葱は、ほとんど迷うことなく即答した。

「遅効性のウイルスね」

『ケケッ、同感だな』

「……どういう意味だ？」

一人だけ状況が呑みこめていない矢瀬が、戸惑いの表情を浮かべて訊く。

「魔族登録証よ。あの腕輪には、簡易的な魔術を発動するための回路が埋めこまれてるの。魔族の体調のモニタリングや、位置情報の特定のためにね」

「まさか、その回路に誰かがウイルスを流しこんだのか？」

矢瀬はハッと振り返り、歩道の上に倒れたままの吸血鬼に目を向けた。

彼ら登録魔族の手首に嵌められた金属製の腕輪。その表面に彫りこまれた幾何学模様の隙間が、赤く発光を続けている。

『簡易的な回路とはいっても、ほとんどすべての魔族が、四六時中、直に身に着けてるモノだからな。呪術の触媒としちゃ、かなり強力だぜ。催眠状態に陥れる程度なら、わけねーな』

なぜか得意げな口調で、モグワイが言った。

矢瀬は信じられないというふうに首を振る。

「島内すべての魔族登録証を一斉にウイルス汚染させたってのか……どうやって!?」

『特区警備隊のネットワークを使ったのよ』

奇妙に落ち着いた声で答えてきたのは浅葱だ。矢瀬は驚いて彼女を見返す。

「おまえでもそれに気づかなかったのか……？」

『特区警備隊？　そういや、昨日、特区警備隊の本部でハッキング騒ぎがあったって言ってたな……』

「その犯人の本当の目的は、特区警備隊のサーバーを乗っ取ることじゃなくて、魔族登録証にウイルスを感染させることだったってわけ」

「仕方ないでしょ。あたしが特区警備隊の本部に着いたときには、敵の本命のプログラムは役目を終えて、跡形もなく消滅してたんだから。気づきようがないわよ」

浅葱が拗ねたように唇を尖らせて言い返す。

そんな浅葱を庇うように、モグワイはクックッと含み笑いを洩らして、

『それに魔族登録証周りの防壁はガチガチに固めてあるから、理屈はわかってても普通は実行できねーんだ

よ。犯人は相当な凄腕だぜ』

「ていうか、魔族登録証のハッキングなんてメリットがないから誰もやらないのよね、普通」

「まあ、たしかに、無差別テロくらいにしか使えそうにねえな……」

島内の惨状を見回して、矢瀬が短く溜息をついた。

魔族登録証に搭載されている装置のメモリ容量では、複雑な魔術は実行できないのだろう。

わせて、暴走させるのが精いっぱいなのだ。だがそれでも、魔導テロの道具としては恐るべき脅威だといえる。

「なあ、モグワイ。そのウイルスってやつ、どうにかできないのか？」

『無理だな。物理的なアクセス経路がねえ。今の魔族登録証は、特区警備隊のネットワークからも切り離されちまってるからな』

「通信が切断されてるから、駆除プログラムを送りこむこともできない、ってわけか」

『まあ、独立稼働モードの魔族登録証に、強制的に介入する手段がないわけじゃねーが……』

モグワイの意味ありげな呟きに、矢瀬は小さく息を詰まらせた。

「そうか……〝C〟か……」

「〝C〟って、あたしがこないだ連れてかれたコンピューター室のこと？」

浅葱が訝しげな表情で矢瀬を見る。ルーム〝C〟――それは、キーストーンゲート第零層に設置された特殊区画だった。

完全に気密処理された空間内に、絃神島を管理する五基の超電算機のコアユニットが詰めこまれ、神経のように張り巡らされた島内ネットワークのすべてが接続されている。頑丈な外殻は核弾頭の直撃や、水深二万メートル級の水圧にも耐えるともいわれていた。

そして〝C〟経由の命令は、人工島管理公社が所有する全端末に対して、最優先のアクセス権を持ってい

る。もちろん魔族登録証も例外ではない。

当然〝C〟への入室は厳しく制限されており、人工島管理公社の上級理事や紘神市長ですら、立ち入りを許可されていなかった。〝C〟が実在しない幻の部屋と噂されている所以である。

「そうか……だから浅葱が狙われたのか……」

「はい？」

矢瀬にまじまじと見つめられて、浅葱が居心地の悪そうな表情を浮かべた。

モグワイがケケッと愉快そうに笑い、矢瀬は苦悩するように目元を覆う。

「正規のユーザーとして〝C〟への入室を許可されているのは、おまえだけなんだ。おまえが死ねば、もう誰も魔族の暴走を止められない」

「は……!?」

浅葱がぽかんと目を大きく見開いた。

「なにそれ、初耳なんだけど!?　本人に黙って、なんでそんな属人的なシステム作ってんの、馬鹿じゃないの!?　あたし完全にとばっちりじゃないのよ……!?」

激昂した浅葱が、矢瀬の胸ぐらを締め上げる。

浅葱は優秀なハッカーではあるのだが、基本的には普通の女子高生だ。人工島管理公社でのプログラミング作業は、あくまでも小遣い稼ぎのアルバイトに過ぎない。紘神島の運命を左右するような重責を担うつもりなどさらさらないし、ましてやそのせいで命を狙われるなどまっぴらだった。

しかし現実には自分のあずかり知らないところで〝C〟とやらの正規ユーザーに登録され、狙撃手に命を狙われている。浅葱が怒るのも当然だった。が、

「くっ……！」

暴れる浅葱を抱きかかえて、矢瀬が地面に転がった。

二人の頭上を銃弾が通過し、背後の民家の壁を抉る。着弾の衝撃で撒き散らされた破片が、バラバラと雹のように矢瀬の背中に降りそそいだ。

「文句はあとでいくらでも聞いてやる。その前にこの状況をなんとかするぞ。なにがなんでも、おまえをキーストーンゲートまで連れて行く！」

浅葱を強引に引きずり起こして、矢瀬が怒鳴った。

「でなきゃ、マジで今日が絃神島最後の日になるぜ」

呟く矢瀬の頭上では、異様な気配が渦巻き始めていた。暴走した魔族から放出された魔力が、飽和して絃神島上空を覆い尽くそうとしているのだ。

それがどのような事態を招くのかはわからない。

だが、ろくでもない結末が待っていることだけは確実だった。

「勘弁してよね……」

浅葱が、親友の口癖を真似して呟く。

「まったくだぜ」

矢瀬も心底同意してうなずいた。

3

壊れかけたビルの屋上から、雪菜は呆然と地上を見下ろしていた。

市街地の至るところで、魔力の暴走が起きている。

中でも特に目立つ被害は、やはり吸血鬼の眷獣によるものだ。比較的若い吸血鬼の眷獣でも、無制限に解き放てば、家屋を丸ごと吹き飛ばす程度の威力がある。ましてや旧き世代の眷獣ともなれば、その戦闘力は、最

新鋭の戦車と同等かそれ以上だった。

しかし、眷獣たちが召喚された場所や破壊対象に規則性はない。魔族自身の意思ではなんらかの目的があるとも思えない。彼らの力の暴走に、なんらかの目的があるとも思えない。魔力を暴走させているのだるだけ。何者かが彼らを操って、魔力を暴走させているのだ。

「こんなこと……いったいどうやって……」

傷ついた占城の身体を抱き支えたまま、雪菜は途切れ途切れに呟いた。

二万を超える魔族の集団魔力暴走――過去に例のない大災害だ。それをどうやって止めればいいのか、いくら考えてもわからない。

特区警備隊は事態の沈静化に動き出していたが、戦力不足は火を見るよりも明らかだった。しかも彼らを指揮する人工島管理公社は、幹部の多くを失って、いまだに混乱状態だ。

獅子王機関の本部に助けを求めたとしても、増援を期待するのは無駄だろう。

八卦陣によって封鎖されたままなのだ。

すべてが、タルタロス・ラプスの思い描いたシナリオ通りに進んでいる。

その事実に雪菜は絶望する。

「わたしはいったい……どうしたら……」

底知れぬ虚無感に襲われて、雪菜は思わず目を伏せた。

ディセンバーや千賀の身柄を確保できれば事態は好転するのかもしれないが、彼らを見つけ出すのは不可能に近い。

こんなときに那月がいてくれれば、助言を与えてくれたのかもしれない。しかし彼女も今は動けない。浅葱は狙撃手に襲われて生死不明。そして占城は、瀕死の重傷を負って倒れている。

「先輩……」

雪菜は、占城の頭を胸に抱いて背中を丸めた。

今、無傷で動けるのは雪菜だけなのだ。なのに雪菜は、どうすることもできずにいく様を、ただ無様に見ているだけ。その無力さが雪菜を打ちのめした。

目の奥が熱くなり、小さく嗚咽がこみ上げてくる。と、

そのとき冷たく冷え切った誰かの手が、うつむく雪菜の頬をそっと包んだ。

「なんて顔してんだよ、姫柊」

意識をなくしていたはずの占城が目を開けて、小さくかすれた声で呼びかけてくる。

雪菜はそんな古城の姿を、呆気にとられた表情で眺めた。

「暁先輩……!? もう意識が戻ったんですか……？」

「なんとか、な……」

けふっ、と軽く咳きこみながら、占城がふらふらと上体を起こした。

十数発の弾丸を喰らって内臓のほとんどを破壊されながら、ほんのわずかな時間に回復速度が速かった。古城の吸血鬼としての力が増しているのだ。

ぼ終えている。以前に絶命したときと比べても、明らかに

それはそれで不安を誘う事実でもあったが、今は悩んでいる場合ではない。

「あくそ、千賀の野郎、容赦なく弾丸をぶちこみやがって。死ぬほど痛ェぞ」

ズタズタに裂けたパーカーを撫でて、占城が恨みがましく言った。

当たり前すぎてどこか間抜けな彼の言葉に、雪菜は小さく噴き出してしまう。古城はそれを不思議そうに見返して、

「で、姫柊はなんで泣いてんだ？」

「泣いてません」
雪菜がそっと顔を背けながら、平坦な口調で答えてくる。占城は、「ん？」と眉を寄せ、
「いやでも」
「泣いてませんから」
「いや、目ェ真っ赤だし」
「吸血鬼のヒトにそんなことを言われたくありません。そんなことよりも、先輩、街が！」
「うお!?」
眼下の街並みを見下ろした占城が、驚愕のあまり絶句する。
魔族たちの暴走によって道路や建物が破壊され、市街地のあちこちで火災が起きていた。
車両のサイレンの音が、街中から絶え間なく聞こえてくる。
「なんだこれ……!? 俺が寝てる間になにがあった!?」
「登録魔族が魔力の制御を失っているんです。方法はわかりませんが、間違いなくタルタロス・ラプスの仕業だと思います」
「無理やり魔力を暴走させたのか。そういやディセンバーが俺にやったことと少し似てるな」
「はい」
古城の呟きに、雪菜がうなずく。倉庫街で最初にディセンバーと戦ったとき、彼女は古城を精神支配して眷獣の制御を乗っ取った。
紘神島で起きている現象は、そのときの状況に酷似している。おそらく偶然ではないだろう。ディセンバーの眷獣の能力を解析して、それを再現する術式を構築したのかもしれない。
「浅葱は……？」
占城が硬い表情で訊いた。雪菜には、この混乱した状況で、浅葱の無事を確かめる

manga-zone.org

手段がなかったのだ。捜索のために放った式神も、魔力の暴走に巻きこまれてすでに失われてしまっている。

占城は黙って唇を歪めた。浅葱を狙っていた狙撃手にとって、占城が意識をなくしていた数分間は、任務を終えるのに十分な時間だったはずだ。タルタロス・ラプスの狙撃手を、占城は結局、止めることが出来なかった。その後悔と絶望が、ずっしりと占城の心にのしかかる。

そんな占城の耳元に、皮肉っぽい合成音声が聞こえてきたのは、その直後だ。

『大丈夫だ。浅葱嬢ちゃんはまだ生きてるぜ。どうにかな』

「おまえ……モグワイか!?」

液晶画面の割れた古城の携帯から、浅葱の相棒である人工知能の声がする。モグワイは、驚く古城にケケッと笑いかけ、

『詳しい話は端折るが、嬢ちゃんはキーストーンゲートに向かってる。市内で起きてる魔族の暴走は、魔族登録証のハッキングが原因だ』

「ハッキング？」

占城は我知らず首を傾げていた。

「魔族登録証が乗っ取られたってことか？　そんなことができるのか？」

『できるやつがいたんだぜ。でもって、それを解除できるのは、今んとこ嬢ちゃんだけでな』

「千賀たちが浅葱を狙ってたのは、それが理由か……！」

この異変の原因がタルタロス・ラプスによるハッキングならば、浅葱が狙撃されたことにも説明がつく。千賀たちは、浅葱の天才的なプログラミング能力を恐れたのだ。

無事にキーストーンゲートに辿り着ければ、浅葱は魔族たちの暴走を止められる。それがタルタロス・ラプスの計画にとっては、致命的な障害となるのだろう。

「浅葱の居場所を教えてくれ、モグワイ。俺たちがあいつを護衛する」

『気持ちはありがてーんだけどな、第四真祖の兄ちゃんたちには、ほかに頼みたいことがあるんだぜ』

「……頼み？」

古城が意外そうな表情で訊き返す。今まさに命を狙われている浅葱の保護よりも、優先すべき行動があるとは思えない。

しかしモグワイは、いつになく真面目くさった口調で続けてきた。

『とりあえず、嬢ちゃんが魔族登録証のほうをどうにかするまで、絃神島がぶっ壊れるのを防いでてくれねえか？』

「絃神島がぶっ壊れるって……どうしてだ？」

『――上空だぜ、兄ちゃん』

人工知能の声につられて、古城は頭上を振り仰ぐ。そして続けるべき言葉を失った。

絃神島の空を覆い尽くしていたからだ。

それは密集したオーロラのようでもあり、魔力の渦のようでもあった。あるいは美しい花弁にも見えた。魔力によって生み出された真紅の妖花だ。

「薔薇……か？」

「いえ、先輩……これは魔法陣です。信じられないくらい高密度の……」

彼女の言葉で、古城も薔薇の正体に気づく。その大規模な幻像は、幾重にも折り重なった複雑な紋様の集合体だった。絃神島をすっぽりと包みこむほどの巨大な魔法陣。その実体化を可能にしているのは、〝魔族特区〟から供給される膨大な魔力だ。

絃神島に住む二万人もの登録魔族の魔力を吸い上げて、真紅の魔法陣が形成されている。

彼らがことごとく意識を失って倒れているのは、おそらく魔力の暴走だけが原因ではない。魔力がこの魔法陣に奪われているせいだ。

「これが〝タルタロスの薔薇〟の正体か……」

占城の全身が怖気に震えた。

魔術の知識を持たない古城にも、この魔法陣がどれだけ危険なものかは理解できる。今や紘神島の上空には、かつての邪神ザザラマギウをも凌ぐ膨大な魔力が渦巻いているのだ。

「でも、これだけの魔力を集めて、いったいなにを……」

蒼白な顔で頭上を見上げていた雪菜が、なにかに気づいたように息を呑む。

魔法陣によって形成された薔薇から、数枚の花弁が舞い落ちていた。

自らの実体を持つほどに濃密な魔力の集合体。それはやがて意思を持つ獣の姿に変わる。

「まさか!?」

「眷獣か――!」

雪菜と占城が、同時に叫んだ。

〝タルタロスの薔薇〟から生み出された眷獣が、魔力を帯びた咆吼を放つ。その波動は灼熱の炎に変わって、紘神島の市街地へと落下した。

4

真紅の〝薔薇〟から生み出された眷獣の数は六体だった。全長は、それぞれ三メートルから五メートルほど。実体化はまだ不完全だが、ほぼ完全な獣の輪郭を保っている。〝旧き世代〟の眷獣には及ばないまでも、かなり強力な部類とみて間違いないだろう。

魔力を帯びたドス黒い炎が、人工島の大地を焼いていく。人口密度の高い区画ではないが、それでも危険な状況であることに変わりはない。

そして驚くべきことに、眷獣の召喚はまだ続いていた。

魔力によって咲いた真紅の花弁が散るたびに、一体、また一体と眷獣が数を増していく。それらは絃神島の大地へと舞い降りて、無制限の破壊を撒き散らそうとしているのだった。

「こいつら、誰が召喚してるんだ……？」

占城が、焦燥に顔を歪めて雪菜に訊く。ディセンバーは強力な〝旧き世代〟の吸血鬼のはずだが、これだけの数の眷獣を、たった一人で召喚できるとは思えなかった。ましてや、そのすべてを制御することなど不可能だ。

「宿主は、あの魔法陣そのもの、だと思います。都市中の魔族から吸い上げた魔力を使って、眷獣を無差別に召喚してるんです」

雪菜が強張った表情で答えてくる。嘘だろ、と古城は驚いて彼女を見返した。

「そんなんで、どうやって眷獣に言うことを聞かせるつもりだ？」

「いえ、制御する必要はないんです。少なくともタルタロス・ラプスにとっては――」

「まさか、あいつら、無差別攻撃をするつもりか……!?」

占城の全身の血液が、恐怖と怒りで冷たくなる。

ディセンバーたちの目的は、絃神島の破壊。それだけだ。〝タルタロスの薔薇〟で召喚した眷獣に、精密な操作など求めていない。ただ暴走させるだけで十分なのだ。

彼らが〝魔族特区〟破壊集団と呼ばれていた理由を、占城はようやく理解する。

登録魔族から吸い上げた魔力による、無制限の眷獣召喚。それこそが、〝魔族特区〟でしか実現し得ない究極の破壊工作。謎に包まれていた彼らの手口の正体だ。

「先輩！」

「わかってる！　疾く在れ、〝獅子の黄金（レグルス・アウルム）〟――！」

頭上を飛び交う眷獣たちに向けて、古城が雷光の獅子を撃ち放った。

眷獣は、実体化した高密度の魔力の塊だ。それ故に通常の武器ではダメージを与えることができない。より強力な魔力をぶつける以外に、眷獣を倒す方法はないといわれている。

眷獣に対抗できるのは、特区警備隊（アイランド・ガード）が保有する大型の魔術兵装や、一部の国家攻魔官が持つ強力な魔具、そして吸血鬼の眷獣だけ。

しかし特区警備隊（アイランド・ガード）の隊員は、暴走した魔族の鎮圧と救助に追われており、眷獣と戦う余裕はない。それは国家攻魔官たちも同じだろう。

そして登録魔族たちは、タルタロス・ラプスの公のハッキングによって、ほぼ全員が意識不明の状態に陥っている。今、〝薔薇〟の眷獣たちを止められるのは、魔族登録証を持たない未登録魔族の吸血鬼――すなわち占城だけなのだ。

幸運なことに〝薔薇〟の眷獣たちの力は、第四真祖の眷獣たちに遠く及ばない。雷光の獅子の一撃で、彼らはズタズタに引き裂かれて消えた。

これなら問題なく彼らを押し切れる。占城がそう判断した直後――

「……復活した!?」

雷光の獅子に裂かれたはずの〝薔薇〟の眷獣たちが、再び獣の形へと戻っていく。

占城は自らの眷獣に再攻撃を命じるが、やはり結果は同じだった。雷光の獅子が破壊の限りを尽くしても、〝薔薇〟の眷獣は増えていく一方だ。

「召喚魔術が続いてるんです」

真紅の魔法陣を見上げたまま、雪菜が悔しげに呟いた。古城の攻撃に対抗するためか、〝薔薇〟が花弁を散

らす速度を増していた。増殖を続ける眷獣たちはすでに数十体を超え、もはや正確な数はわからない。

「俺がぶっ壊すよりも、増えるほうが速いってのかよ!? だったら――」

古城が新たな眷獣を召喚した。水銀色に輝く双頭の龍だ。空間そのものを喰らい尽くす、〝次元喰い〟の眷獣である。

巨大な顎を開いた龍たちは、天空を覆い尽くす魔法陣へと容赦なく突入した。空間ごと削り取られた魔法陣が、虫に喰われた花のように醜く歪む。

だがそれも一瞬のことだった。地上から供給される膨大な魔力によって魔法陣は再生し、〝薔薇〟の眷獣はさらに数を増す。

「空間ごと削り取っても駄目なのか……!?」

古城の声に動揺が滲んだ。増殖を続ける〝薔薇〟の眷獣たちは、雷光の獅子だけではなくなっていた。眷獣の一部は地上へと降下し、別の一群が占城たちのほうへと殺到してくる。

「くそ！　疾く在れ、〝神羊の金剛〟！　〝水精の白鋼〟！　〝甲殻の銀霧〟！」

占城は舌打ちしながら、新たな眷獣たちを召喚した。

金剛石で造られた大角羊が宝石の結晶を撒き散らし、銀色の甲殻獣が建物を霧へと変えることで街を護る。

そして巨大な水妖が、破壊された街を歪な形で再生していく。

完全な形にはほど遠いが、今の古城にはそれが限界だった。強力すぎる第四真祖の眷獣は、基本的に破壊以外に使い途がない。防御にはまったく向いていないのだ。ほんの少しでも制御をしくじれば、街を護るどころか、敵の眷獣ごと絃神島を崩壊させかねない。

「やばい……な……さすがに怒らせたか……！」

近づいてくる〝薔薇〟の眷獣たちを睨んで、古城はギリギリと奥歯を噛んだ。今の古城は、新たに出現する

敵の迎撃と、市街地の防御だけで手一杯だ。古城自身の護衛のために、新たな眷獣を喚び出す余裕はない。

しかし〝薔薇〟の眷獣たちは、明らかに古城を狙っていた。彼らの仲間をさんざん破壊したことで、完全に敵として認識されてしまったのだ。

不安定な〝薔薇〟の眷獣たちの姿は様々だった。ある者は蝙蝠のようでもあり、ある者は獰猛な肉食魚のようでもある。完全な意思を持たないせいか、それらの動きは単調だった。全身に魔力の炎をまとい、獲物を目がけて真っ直ぐに突っこんでくるだけだ。

それらの中の一体――小型の恐竜を思わせる眷獣が、古城の背中へと、炎に包まれた鉤爪を振り下ろす。

それを直前で撃ち落としたのは、銀色の刃の一閃だ。

魔力を無効化する雪菜の槍が〝薔薇〟の眷獣を刺し貫く。獅子王機関の秘奥兵器とも呼ばれる〝雪霞狼〟は、吸血鬼の真祖すら斃し得る破魔の槍だ。銀色の刃がまとう神格振動波の輝きが、脆い砂糖菓子を打ち砕くように〝薔薇〟の眷獣を消滅させた。

「姫柊……！　悪い、助かった！」

「いえ。監視役として当然のことをしたまでです。先輩、それよりも――」

「わかってる。このままじゃ、浅葱がキーストーンゲートに着くまで、街が保たねーな」

額に浮かぶ汗を拭って、古城はうめいた。

占城が喚び出した第四真祖の眷獣たちは、〝薔薇〟の眷獣が生み出され、街の至るところに降下していくのだ。すべてを迎撃するのは、占城一人ではどうやっても不可能だった。

だが上空の魔法陣からは、とめどなく新たな眷獣たちを圧倒している。

第四真祖が保有する魔力の量は無限に近いが、それを制御する占城の精神力には限界がある。

強力すぎる眷獣たちの制御に神経が摩耗し、疲労度が加速度的に増していた。このままでは占城の眷獣たちまでもが、暴走を始めるのも時間の問題だ。

「どうすればいい、姫柊？」
「それは……〝タルタロスの薔薇〟への魔力供給が止められないのなら、あとは〝薔薇〟を制御している術者を倒すしか……」
「術者……？」
「はい。魔族登録証の制御を奪って、魔法陣を維持している術者がどこかにいるはずです」
「術者……そうか、千賀がラーンと呼んでたあいつか……」
千賀は〝薔薇〟を起動する直前、イヤフォンマイクを使って仲間に指示を飛ばしていた。動物病院で会ったタルタロス・ラプス最後のメンバー。おそらく彼女が、魔法陣を維持している中枢なのだ。
「だけど、どうやってあいつの居場所を見つける……？」
「すみません……先輩……探査呪術を使ってはみたんですけど、わたしには、紘神島全部を見通すほどの力はなくて……」
雪菜がそう言って悄然とうなだれた。泣き出しそうな顔で首を振る。雪菜は魔族との近接戦闘に特化した剣巫だ。複雑な呪術は、彼女の専門外なのである。
「べつに姫柊が謝ることじゃねーだろ。そんなこと俺にもできないぞ」
「いえ、でも……」
「結局、浅葱がハッキングをどうにかしてくれるのを待つしかない、か……モグワイが言ってたとおりになったな、くそっ！」
古城は投げやりに笑って両腕を広げた。あの皮肉屋の人工知能は、こうなることを最初から見越して、古城たちに島を護れと言ったのだろう。
しかし〝タルタロスの薔薇〟の正体が、ここまで厄介な召喚魔法陣だということまでは、世界最高水準のスーパーコンピューターといえども予想できなかったのではないか、と思う。

5

市街地の被害が明らかに増えていた。〝薔薇〟の眷獣の増殖速度は、占城の眷獣たちによる破壊を今や完全に凌駕している。もはや古城一人では紘神島を護りきれない。

駄目か、と占城が絶望を予感した直後だった。

凄まじい轟音とともに、巨大な閃光が紘神島の上空を駆け抜けた。

それは戦艦の艦砲射撃を思わせる、大規模な呪術砲撃だった。

真祖の眷獣にも匹敵する圧倒的な魔力量だ。数十体もの〝薔薇〟の眷獣たちが、その攻撃に呑みこまれて、悲鳴を上げる間もなく消滅する。

突然の呪術砲撃の正体に気づいて、雪菜がぽつりと呟いた。

「六式重装降魔弓……」

巨大な閃光を生み出していたのは、高速で飛翔する一条の矢だ。その先端に埋めこまれた鳴り鏑が、人間には再現不可能な高密度の呪文詠唱を行っていたのだ。

そして、続けざまに新たな鳴り鏑矢が、別種の異音を響かせながら飛来した。

獅子王機関の舞威媛に与えられた試作制圧兵器、六式重装降魔弓の呪矢である。

その異音が生み出したのは、無数の小型魔法陣だ。それらは数百本もの光の矢に変わって、市街地に降下していた〝薔薇〟の眷獣たちだけを正確に撃ち抜いた。

「魔弾の多重目標固定……この術式、まさか……」

すげえ、と目を剝く占城の隣で、雪菜が勢いよく顔を上げる。

二人の視界に映ったのは、鳥に似た小さな黒い影だ。

それは大気を切り裂くようにして、海面スレスレを滑空していた。ちっぽけだったその姿が、絃神島に近づくにつれて、かなりの巨体であることに気づく。絶滅した太古の恐竜に似た蛇身と、片翼十メートルを超える巨大な翼。鋼色の鬣を持つ龍族だ。

「占城くん！　雪菜！」

龍族の背中に跨がっていた少女の一人が、古城たちに向かって手を振っている。

彼女の名を占城は知っていた。ほんの数日前、本土で出会った剣巫の少女だ。

「唯里さん!?　紗矢華さんに……志緒先輩も……！」

雪菜が驚きに目を見張る。

龍族の背中には羽波唯里のほかにも、二人の少女が乗っていた。彼女たちはそれぞれ両手に銀色の弓を持っている。獅子王機関の舞威媛、煌坂紗矢華と斐川志緒。〝薔薇〟の眷獣たちを撃ち落とした呪矢は、彼女たちが放ったものだったのだ。

「おまえ！　グレンダか!?」

『だーっ！』

占城たちがいるビルの屋上に舞い降りると、鋼色の龍は変身を始めた。巨大な龍族の姿から、髪の長い小柄な少女へと。

変身を解除した直後の龍族の少女は、もちろん服を着ていない。素っ裸のままの彼女に抱きつかれて、占城は固まった。

「あああっ!?　ちょ……なにやってるのよ、暁古城!?」

「グレンダ、待って！　服、着て！　服！」

紗矢華と唯里が、慌てて古城たちのほうへと駆け寄ってくる。

そんな占城たちを冷ややかに一瞥して、志緒は雪菜に近づいた。
「姫柊雪菜、無事だったか。状況の説明を頼めるか？」
「はい、志緒先輩。でも、いったいどうやって絃神島に……？」
「もともと絃神島の近くまで来てたんだ。八卦陣に妨害されて近づけなかったんだけど、内側から読み解いたんですか……!?」
「八卦陣の術式を、内側から読み解いたんですか……!?」
「あ、いや、まあ……私一人でやったわけじゃないんだが……」
雪菜からキラキラとした尊敬の眼差しを向けられて、志緒が居心地悪そうな表情を浮かべた。紗矢華との共同作業だったと口にするのは、志緒的に抵抗があるらしい。と、
その紗矢華が、親しげに会話をする雪菜と志緒の間に、焦って無理やり割りこんでくる。
「あなたがなんで、私の雪菜に馴れ馴れしく話しかけてるのよ、斐川志緒!?」
「煌坂が男に気を取られて、もたもたしているからだろ！」
「はあ!?　べつにこんなのに気を取られてなんかないんですけど……!?」
「いいや、思いきり気にしていたな。ほかのことなど眼中にない感じだった」
「そんなわけないから！　それを言うなら羽波唯里のほうが――」
「唯里は関係ないだろ！」
額を突き合わせていがみ合う先輩二人を、雪菜はしばらく唖然として眺めた。だが、そんなことをしている場合ではないと、すぐに気を取り直す。
「あの……説明、いいですか……」
コホン、と咳払いする雪菜に気づいて、紗矢華たちが慌てて姿勢を正した。

「――状況は、このとおり絃神市全域を対象とした無差別攻撃です。首謀者はタルタロス・ラプスと名乗る〝魔族特区〟破壊集団。判明している構成員は、ディセンバーと名乗る吸血鬼、風水術士の千賀毅人、発火能力を持つ人工生命体の少年ロギ、それから狙撃手がいます」

「あとは魔族登録証のシステムを乗っ取ったハッカーもな」

グレンダを背中におぶったまま、占城が説明を補足する。

「魔族登録証……なるほど、そうか……」

「この眷獣たちを召喚している魔力は、そこから来てるのね……」

志緒と紗矢華が、即座に理解してうなずいた。協調性に多少の問題はあれど、やはり二人は優秀な攻魔師なのだ。

「浅葱がそいつをどうにかするためにキーストーンゲートに向かってるんだが――」

らなきゃなんねーんだが――」

「要は、この魔法陣を操作してる術者を捜し出せばいいんでしょ？」

紗矢華が、占城の言葉を遮って言った。驚くほどあっさりした口振りだ。

「出来るのか？」

「当然」

驚く占城を見返して、紗矢華は得意げに胸を張る。

その言葉を即座に引き継いだのは志緒だった。

「獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺の専門家なんだ。もちろん呪詛返しの技法も学んでいる。術者の特定は基本中の基本だ」

「ちょっ……それ、私が言おうと思ったのに……！」

「響よ――」

制服の胸元から呪符を取り出して、志緒は短く祝詞を唱え始めた。呪符は、たちまち無数の鳥に姿を変え、絃神島全域へと散っていく。

「ああ、もう……！」

志緒に対抗するように、紗矢華も呪符をばらまいた。二人の舞威媛が生み出した式神の数は、軽く百体を超えている。それらは見事な編隊を組んで、市街地上空の旋回を始めた。〝タルタロスの薔薇〟の魔力を遡って、術者の位置を探っているのだ。

「さて。術者の位置が特定できるまで、時間稼ぎが必要ね」

「唯里、すまないが援護を頼む。呪力の装塡に時間がかかりそうだ」

紗矢華と志緒はそう言って、それぞれ銀色の洋弓を構えた。

二人が破壊した〝薔薇〟の眷獣たちは、すでに再生を終えている。紗矢華たちは、もう一度、それらを撃ち落とすつもりなのだ。

「六式降魔剣・改――起動！」

唯里が、背中に背負っていた楽器ケースから剣を抜いた。刻印されたその剣は、眷獣にも通用する強力な武神具だ。志緒たちが呪矢の準備を終えるまでの間、接近する〝薔薇〟の眷獣たちを迎撃するつもりなのだろう。

「煌坂さんたちは私が護るから。占城くんは少し休んでて」

「いや、だけど……」

「疲れてるでしょ、すごい汗だよ」

唯里の指摘で占城はようやく、自分が予想以上に消耗していたことを自覚した。紘神島を護るために、第四真祖の眷獣を五体も使役し続けていたのだ。その前にはディセンバーとも戦っていたのだ。さすがに疲労の限界に達していた。

「雪菜、古城くんのこと、お願いね」
唯里が、そう言い残して駆け出していく。
古城は反射的に彼女を追いかけようとしたが、それを制止したのは雪菜だった。
「先輩、少しお話があります」
思い詰めたような表情でそう言って、雪菜が古城を手招きする。
そして雪菜は、古城を引きずるようにして、壊れかけたビルの階段へと向かった。

6

雪菜が古城を連れこんだのは、ビル最上階の廊下だった。貿易会社の倉庫らしいが、社員はすでに避難を終えたのか、周囲に人の気配は感じられない。
薄暗い廊下の壁はひび割れて、時折、その隙間から爆発音が聞こえてくる。紗矢華たちが、〝薔薇〟の眷獣との戦闘を続けているのだ。
「姫柊？　どうしたんだよ、こんなところに連れてきて？　煌坂たちをほっといていいのか？」
立ち止まった雪菜の背中に向かって、古城が訊く。
その言葉に、雪菜がビクッと肩を震わせた。彼女はうつむいて小さく溜息を洩らし、やがて意を決したように振り返って古城を見る。
「先輩」
「お、おう？」
妙にかしこまった雪菜に影響されて、古城はわけもなく緊張を覚える。そんな古城の前で、雪菜が静かに目を閉じた。両手を胸の前で祈るように握り合わせて、ほんの少し顎を上げてくる。

まるで古城にキスを求めているかのような姿だった。
「えーっと、姫柊……？」
「いいですよ」
戸惑う古城の目の前で、薄紅色の雪菜の唇が震えた。
る。
「は？」
「わたしの血を吸ってもいい、ってことです……い、言わせないでください……」
「血？　ああ、血な……なんだそういうことか……」
脅かさないでくれ、と古城は息を吐いた。安心したような残念なような複雑な気分だ。
「いや、待て。俺に血を吸えって、ここでか？」
「はい」
雪菜が目を瞑ったまま答えてくる。古城は彼女の睫毛の美しさに見蕩れつつ、
「いやでも、すぐそこに煌坂たちがいるんだが……」
「わかってます。だから、早く……してください」
仄かに頬を赤らめながら、雪菜が古城を急かすように言った。目を閉じた無防備な姿のまま、彼女は古城に近づいてくる。古城は、思わず雪菜の肩を押さえて、
「だけど、なんで……そんないきなり……？」
「覚えてますか、ディセンバーさんの能力のことを」
「眷獣を支配する能力か……いや……あれは、違うのか……？」
古城が曖昧に言葉を濁す。雪菜は、それを否定も肯定もしなかった。
ヘルメットとゴーグルで隠されていたディセンバーの素顔。それは、古城が幾度となく夢の中で見た少女と

同じだった。

アヴローラ・フロレスティーナ。古城に力を譲り渡して消滅した先代の第四真祖。

十二番目の〝焔光の夜伯〟――

ディセンバーは、彼女と同じ姿をしていたのだ。

「わたしの想像が正しければ、ディセンバーさんの眷獣を封じるのは簡単です」

雪菜が目を開けて、至近距離から古城を見た。

「先輩が、第四真祖の眷獣たちの支配権を、彼女に渡さなければいいんです。吸血鬼としての先輩の力が強まれば、おそらくディセンバーさんの能力は無効化できるはず――」

「ああ……だからいきなり俺に血を吸えとか言ってきたんだな」

「こ、今回だけは特別です。非常事態ですから」

頬を赤くしたまま雪菜は急に不安そうな表情を浮かべた。自分の胸元に視線を落として、それから上目遣いで古城を見上げてくる。

雪菜は綺麗な少女だが、色気があるかといわれれば微妙なタイプだ。華奢な体つきには幼さが色濃く残っているし、本人もそのことは自覚しているのだろう。

そして吸血鬼に血の渇き――吸血衝動をもたらすのは、食欲ではなく性欲だった。古城が雪菜の血を吸うためには、雪菜に対して性的な興奮を感じなければならない、ということだ。

「わたしでは駄目……ですか？」

雪菜がか細い声で訊いてくる。いやいや、と古城は首を振り、

「いや、姫柊が駄目とかそういうことじゃなくて……さすがに、この状況ではちょっと、な」

ひび割れた壁や背後の階段をちらちらと見遣って顔をしかめる。すぐ傍で紗矢華たちが〝薔薇〟の眷獣と死闘を繰り広げているのに、そんなところで血を吸えと言われても困る。

喩えるなら、砲弾の飛び交う戦場で食事をしろと命じられているのと同じだ。どんなご馳走が目の前に並んでいても、とても味わう気にはなれない。

「周りのことが気になって、集中できないということですか」

雪菜が納得したようにうなずいた。理解してもらえたか、と占城は少しホッとする。

「わかりました。では、先輩。目を閉じてください」

「あ、ああ」

雪菜に言われるがままに占城は瞼を閉じた。それを確認した雪菜が、なにやら動き出す気配がある。聞こえてくるのはかすかな衣擦れの音だった。もちろん理由があっての行動なのだろうが、彼女がなにを考えているのかさっぱりわからない。

意外に長い時間が過ぎて、さすがに不安を覚え始めたとき、柔らかな布地が、占城の目元を覆う気配があった。目隠しをされているのだと占城は気づく。

「姫柊？　これは……？」

「気にしないでください。制服のインナーです。ハンカチでは長さが足りなかったので」

「え？　制服のインナーって……」

雪菜がさっきまで着ていたキャミソールのことだと気づいて、占城は激しく混乱した。女子のキャミソールで目隠しされる——いったいどんなシチュエーションだ、と思う。

「なんかいい匂いがするんだが……石鹸みたいな」

「嗅がないでください！　解説しなくていいですから！」

「いやそんなこと言われても……あとなんか、なんだこれ……？」

雪菜に手を握られたことに気づいて、古城は首を捻った。そのまま彼女に導かれて、古城の指先がなにかに触れる。

高価な磁気のように滑らかで、それでいて包みこむようなりを宿した、人肌特有の心地好い温度。掌が無意識に吸い寄せられていく。

「ひ、姫柊……これって……」

雪菜の脇腹に直に触れているのだと気づいて、古城は言葉を詰まらせた。

目隠しで視覚を奪われているせいで、触覚が普段よりも鋭敏になっているのかもしれない。皮膚と皮膚が融け合うようなむず痒い快感が、指先の神経に伝わってくる。

「どう……ですか……？」

雪菜が精いっぱい羞恥心を隠した声で訊いてきた。答えを探そうとした古城だが、感動が大きすぎて上手く言葉にならない。

「ああ、すごいな。なんて言えばいいのかわからないけど、あの、あんまり触られると……くすぐったい、です」

占城の言葉に満足したのか、雪菜が安堵したような口調でそう言った。

緊張のせいか雪菜の呼吸が少しだけ速くなっている。研ぎ澄まされた古城の感覚に、彼女の体温や髪の匂い、息づかいや心臓の鼓動までもが伝わってくるようだった。

雪菜のしなやかな肉体は、引き締まっていながらも柔らかかった。華奢な骨格と美しい曲線を描く筋肉、その映像を脳裏に思い描いた瞬間、占城の全身を凄まじい渇きが襲ってきた。

かつてなく激しい吸血衝動だ。

「せ、先輩!?」

雪菜の背中に手を回して、古城は彼女を強引に抱き寄せた。自由になった両腕で、雪菜の全身を思うままに撫で上げていく。彼女の耳元に頬を埋め、甘い髪の匂いを吸いこんだ。そして無防備な耳たぶを甘噛みする。

「そこは、違っ……」

強い電気に打たれたように、雪菜が背中を仰け反らせる。同時に占城の左手は、雪菜の胸の膨らみをそっと包みこんでいた。

「ま、待ってください……駄目です……い、いや……」

雪菜が懸命に抗う素振りをみせる。だがその言葉とは裏腹に、彼女の抵抗は弱々しかった。半ば本能的に雪菜の首筋を探し当てる。

鋭く伸びた占城の牙が、雪菜の肌を破って彼女の中に挿しこまれていく――

「……っ！」

雪菜の肩が、古城の腕の中で小さく震えていた。溢れ出した彼女の血を、占城は丁寧に舐め取っていく。雪菜は剣巫。強い力を持つ巫女の一員だ。霊力を帯びた彼女の血を取りこむことで、占城は全身に沸騰するような強烈な魔力を覚えた。

占城の血の中に眠っていた獣たちが、歓喜の雄叫びを放っているような感覚がある。

それでも占城の渇きが癒えることはなかった。吸血鬼としての本能が、雪菜の血を更に貪ることを望んでいる。

その欲求に必死に逆らって、古城は牙を抜こうとした。これ以上続ければ、雪菜が危険だという予感があったのだ。

無抵抗に抱かれていた雪菜が、占城の背中に両手を回してきたのは、その直後だった。

「駄目、先輩……やめないで……もっと、吸ってください……」

自分から占城が離れないようにと、雪菜が全身を密着させてくる。

雪菜の血の余韻に痺れるような愉悦を覚えながら、占城は弱々しく首を振った。

すでに占城は、相当な量の血液を雪菜から奪っている。すでに彼女は限界に近いはずだった。

大量の血液を失うことが危険という単純な話ではない。たらす危険があるのだ。

血液感染による疑似吸血鬼化――彼女を占城の〝血の従者〟に変えてしまうという危険が。

「駄目だ、姫柊……これ以上は、おまえの身体が……」

「でも、今のままじゃ、ディセンバーさんに勝てないかもしれません……から……」

小刻みな痙攣を繰り返していた雪菜の身体から、急速に力が抜けていく。赤く頬を上気させ、彼女は荒い呼吸を続けていた。やはり彼女の体力は限界だったのだ。

「姫柊……」

占城（こじょう）は、目隠しのキャミソールを取った。近くに置かれていたソファの上に、雪菜の身体を横たえる。制服とインナーシャツを脱いだ雪菜が身に着けているのは、胸元を覆（おお）うシンプルなブラだけだった。透きとおるよ

うな白い肌が、ほのかな桜色に染まって驚くほど綺麗だ。
そのせいで再び吸血衝動が刺激され、耐え難い喉の渇きに占城がうめく。と、
ガタッ、という不審な物音が、そんな古城のすぐ背後から聞こえてきた。
「だ……？」
「駄目、グレンダ……！」
振り返った占城が目にしたのは、柱の陰から半分だけ顔を出しているグレンダと唯里だった。
古城に血を吸われる雪菜の姿を、ずっとのぞき見ていたのだろう。唯里の顔は、興奮で耳の先まで真っ赤に染まっている。
一方のグレンダは、占城たちの様子をもっと近くで見ようとして、唯里に首根っこをつかまれたところだ。
さっきの物音の原因は、そのときに唯里が倒してしまった彼女の剣だった。
「唯里……さん……？」
雪菜がうっすらと目を開けて唯里を見る。唯里は慌てて首を振り、
「ち、違うの、雪菜……のぞくとか、そんなつもりじゃなくて……ほら、志緒ちゃんたちも大丈夫そうだし、グレンダが疲れてたから、雪菜たちと一緒に休ませてあげようと思って……違うの。ていうか、なにも見てないし！」
言い訳を続ける唯里の口元に、たらり、と深紅の液体が流れた。唯里の血だ。
強く頭を振り過ぎたせいか、あるいは精神的な動揺と興奮が原因なのか、唯里が鼻血を出してしまったのだ。
その血の匂いに引き寄せられたように、占城が唯里に向かって歩き出す。
「こ、占城くん……待って……え？」
後ずさりした唯里の背中を、なぜかグレンダが押さえつけている。まるで、続きを見せろと占城に訴えてい

るかのようなグレンダの表情だ。

「先輩……非常事態ですから、今回だけは特別に許してあげます。今回だけですよ……！」

不満そうに頬を膨らませていた雪菜が、諦観したような声でぼそりと言う。

その言葉で鎖から解き放たれたかのように、占城が唯里に近づいた。

「ゆ、雪菜ー……!?　許すってなに？　グレンダもなんで、わたしを捕まえてるの!?」

戸惑う唯里を、古城が壁際に追い詰める。唯里は、

首を振り、

「ま、待って、その……嫌じゃないけど、わたし、初めてだし……心の準備が、まだ……」

「悪いな、唯里さん。少しだけ我慢しててくれ」

抵抗を諦めた唯里の細いおとがいを、占城がそっと持ち上げた。

露わになった細い首筋に、占城が荒々しく牙を突き立てる。

「う、嘘……み、見ないで、雪菜……あ……」

一瞬の痛みに身を硬くした唯里が、やがて脱力して古城に身体を預けてきた。彼女の声に、甘い吐息が混じり始める。体内に流れこんだ新たな血が、占城の渇きを癒していく。

そんな占城たちの姿を半眼で眺めて、雪菜は、もう、と拗ねたような溜息をついていた。

7

島の上空を覆い尽くす魔法陣からは、今も眷獣たちが召喚され続けていた。

降下を続ける眷獣の群れを、紗矢華と志緒の呪術砲撃が撃退する。やがて新たな眷獣が生み出される。そして迎撃。その繰り返しだ。

戦況的には拮抗しているが、それがいつまでも続くものではないと、紗矢華たちはもちろん理解していた。武神具の助けがあるとはいえ、紗矢華たちの呪力には限界がある。おまけに呪矢の残りもわずかだ。そのどちらかが尽きてしまえば、もはや〝薔薇〟の眷獣に対抗する手段はない。そうなる前に、魔法陣を操る術者を見つけ出し、無力化する――それが絃神島を救う唯一の方法だ。

「煌坂、呪矢はあと何本残ってる？」

銀色の洋弓――六式降魔弓・改を構えたまま、志緒が訊く。彼女の呼吸はかすかに乱れ、表情にも疲労の色が濃い。呪術砲撃の連続使用は、志緒の肉体にもかなりの負担なのだ。

だがそれは紗矢華も同じだった。特に紗矢華の六式重装降魔弓は、威力が大きいぶん、呪力の消費量が桁外れに多い。

それでも紗矢華は、疲れを隠して平然と答えた。

「予備を入れてあと六本！　そっちは？」

「こっちも同じだ。今の感じだと、保ってあと三、四分ってところだな」

「あもう……キリがないんだけど……！」

口では文句を言いながらも、紗矢華はきっちりと新たな呪矢を放つ。その流れるような美しい射姿に、さすが、と志緒は目を奪われた。

志緒の意識に、一瞬の空白が生まれたのはそのせいだ。

「――っ!?」

ふと気づけば彼女の頭上には、深海魚に似た不気味な眷獣の顎が迫っていた。

呪矢の再装塡が間に合う距離ではない。それを理解して志緒は表情を凍らせる。

完全に志緒のミスだった。見習い攻魔師である彼女の、実戦経験の少なさが原因だ。

されれば、生身の人間である志緒などひとたまりもない。吸血鬼の眷獣に押し潰

「斐川志緒――！」

振り返って叫ぶ紗矢華の姿が、やけにゆっくりと感じられた。焦りに表情を歪めた紗矢華を、あの子でもあんな顔をするんだな、と志緒は他人事のように冷静に眺めている。

自分が死ねば、きっと唯里は悲しむだろう、と思う。そのことがひどく心残りだ。

一方で、志緒は奇妙な既視感を味わっていた。

つい数日前にも、志緒はこんなふうに死にかけたのだ。

そのとき志緒を救ってくれたのは、暁牙城と名乗る中年男だった。そして――

「〝双角の深緋〟――！」

ゴッという凄まじい爆音とともに、志緒の眼前で〝薔薇〟の眷獣が消滅する。

巨大な双角獣の咆吼を喰らって、横薙ぎに消し飛ばされたのだ。

「え……!?」

志緒たちを護るように出現したのは、緋色の鬣を持つ美しい眷獣だった。〝タルタロスの薔薇〟によって無作為に喚び出された不完全な眷獣たちとは違う。桁外れに強大な魔力を宿した、吸血鬼の真祖の眷獣だ。

「大丈夫か!? あんた……えーと、志緒さん、だっけ？」

「あ、暁……古城……」

ボロボロのパーカーを着た少年が、倒れそうになった志緒の背中を支えてくる。その横顔に、一瞬、彼の父親の面影を見て、志緒は慌てて首を振った。

間一髪で志緒を救ってくれたのは、休息していたはずの古城だった。

雪菜に連れて行かれてからのわずかな時間でなにがあったのか、疲れ切っていたはずの彼の肉体に、膨大な魔力が満ちているのがわかる。

「あ、ありがとう、暁占城。助かった」
「こっちこそ、頼りきりで悪かったな。あとは任せろ！」
志緒に屈託なく笑いかけた占城が、攻撃的な視線を頭上へと向けた。
古城の意思を汲んだ緋色の双角獣が、衝撃波の咆吼を放って〝薔薇〟の眷獣たちを覆っていた。見る間に数を減らしていく。
圧倒的だった。上空を蹂躙する。その威力は
「紗矢華さん――！」
「遅れてごめんなさい、煌坂さん！」
グレンダを連れた雪菜と唯里が、古城のあとを追いかけて戻ってくる。
彼女たちを見返した紗矢華は、かすかな違和感を覚えて、むむ、と眉間にしわを刻む。姿を消す前の二人とは、どこか雰囲気が変わっていた。心なしか衣服も乱れている気がする。
「羽波唯里、顔が赤いけど、大丈夫？　なんか目も潤んでるし……雪菜も……？」
「だ、大丈夫、大丈夫。なんでもないよ」
唯里がムキになって否定しながら、自分の首筋に無意識に手を当てた。それを見た紗矢華がハッとする。唯里たちの雰囲気が変わった原因に、思い当たることがあったのだ。
「暁古城、あんたまさか、また――！」
「煌坂、術者を見つけたわ！　三時方向、距離六千二百！」
占城に詰め寄ろうとした紗矢華を、志緒が真剣な口調で呼んだ。
紗矢華はクッと唇を噛んで、志緒に教えられた方角へと意識を向ける。今は古城たちを問い詰めている場合ではない。
「――距離六千二百？　海の上？」
送りこんだ式神を媒介にして、紗矢華が敵の術者の位置を霊視する。

そこには奇妙な島が浮かんでいた。紘神島と同じ人工の大地だが、その面積の大半はすでに海中に沈んで、三日月のような歪な姿を晒している。

海上に残されたわずかな土地には、壊れかけたビルだけが建ち並んでいた。人工島管理公社からも見放されたその場所は、まるで無人の廃墟のようだ。紘神島からわずか数キロの海上に、そんな不気味な街が存在していたのだ。

「人工島・旧南東地区……廃棄区画か……！」

「廃棄区画？」

呆然と呟く古城に、紗矢華が訊き返す。古城は形容しがたい複雑な表情でうなずいた。

り混じった奇妙な表情だ。

「紘神島二十七号廃棄区画。ほんの九カ月ばかり前に海に沈んだ、初期の人工島の跡地だよ」

「なんでわざわざそんなところに……？」

紗矢華が訝しげな口調で言う。しかし古城は、自嘲するように薄く笑っていた。なぜもっと早く気づかなかったのか、と自分を責めているような態度だった。ディセンバーが最後に現れるとすれば、その場所以外にはあり得なかったのに、と――

「行きましょう、先輩」

雪菜が古城の隣に立って呼びかける。ああ、とうなずきかけた古城が、当惑の表情を浮かべて動きを止めた。

「だけど、行くってどうやって……？」

途方に暮れたように呟いて、古城は廃棄地区の方角に目を向ける。かつて紘神島本島と廃棄地区の間に存在した連絡橋は今はない。廃棄地区への交通手段は船だけだ。

とはいえ、渡し船を雇うにしても、廃棄地区に行きたがる船主が都合よく見つかるとは思えなかった。ただ

でさえ今の紘神島は極度の混乱状態なのだ。

「まだ飛べる、グレンダ？」

そんな占城の困窮を見かねたのか、唯里が龍族の少女に問いかける。

グレンダは、「だっ！」と謎のガッツポーズを取りながら、力強くうなずいた。

「だ、だったら私も一緒に――」

話に乗り遅れそうになった紗矢華が、慌てて自分の存在をアピールする。それを遮ったのは志緒だった。

「待って、煌坂！」

「なによ!?　なにか文句でも――」

条件反射で文句を言おうとした紗矢華が、志緒の横顔を見て言葉を呑みこんだ。

志緒は頭上を見上げたまま、戦慄したように震えている。

紘神島上空を覆う魔法陣に、異様な変化が起きていた。

すべての薔薇の花弁が散って、四個の球体へと変貌していたのだ。

それは巨大な種子だった。

落とされたのだ。

〝タルタロスの薔薇〟の最終形態。咲き誇る真紅の花弁が散り、新たに種が産み

おびただしい数の〝薔薇〟の眷獣たちは、四つの種子に魔力を奪われて、干涸らびるように次々と消滅していた。種子たちが取りこんだ魔力の量は、もはや紗矢華たちが理解できるスケールを超えている。

その異常な量の魔力を内包したまま、種子が割れる。

魔法陣の殻を破って出現したのは、四体の獣たちだった。

一体は猛禽のようであり、一体は鰐の姿に似ていた。またほかの一体は龍に似て、そして最後の一体は虎に酷似している。いずれも全長二十メートルを超える巨大な怪物たち。吸血鬼の眷獣と同じ、濃密な魔力の集合

体だ。

「四聖獣……！」

獣たちの姿を見上げて雪菜がうめいた。聞き慣れない単語に、占城が眉を寄せる。

「なんだ、それは？」

「天の四方を司るとされる四体の幻獣――風水術における力の象徴です」

「たしか絃神島って、そもそも四神に対応して造られた都市なのよね……」

怯えたような声で呟いたのは、紗矢華だった。

東西南北――四基の超大型浮体式構造物で絃神島が構築されているのは、風水術を応用して人工島の安定化を図っているからだといわれている。卓越した風水術士の千賀毅人が、その事実を知らないはずもない。そして〝タルタロスの薔薇〟の術式は、その千賀が協力して生み出したものなのだ。

「人工島の構造を利用して実体化させたんだとしたら、あの四聖獣は、真祖の眷獣以上の化け物よ。絃神島そのものを消滅させることだってできるはず！」

「こいつがタルタロス・ラプスの本命かよ……！」

占城がうんざりしたように嘆息した。今まで経験した中でも、極めつけに絶望的な状況だ。

「覚悟はいいわね、斐川志緒」

「そっちこそ、やることはわかってるんだろうな」

紗矢華と志緒が睨み合いながら、それぞれ洋弓を構える。

志緒がちらりと唯里を見た。

「私たちが時間を稼ぐ。唯里は暁 占城たちを連れていって」

「うん、わかった。グレンダ、お願い！」

「だっ！」

唯里に命じられたグレンダが、着ていた服を豪快に脱ぎ捨てた。
そして出現した鋼色の龍族が、古城たちを乗せて空へと舞い上がっていく。

8

弾丸が、アスファルトの路面を抉り取った。
ガードレールのわずかな隙間を撃ち抜く、対物ライフルの精密射撃だ。砕けた弾丸の破片を浴びて、矢瀬が派手に転倒する。
「痛ってエ！」
「も、基樹!?　大丈夫なの……？」
建物の陰に伏せたまま、浅葱が矢瀬のほうへと戻ってくる。来るな、と彼女を掌の動きで追い払い、矢瀬はふてぶてしく笑ってみせた。
「破片が飛んできただけだ。心配ない」
鮮血の滲む足首を押さえて、矢瀬は道路の向かい側に視線を向けた。
紘神島の上空では凄まじい数の眷獣が暴れているが、逆に地上には静けさが戻っている。暴走していた登録魔族のほとんどが、意識を失ってしまったせいだ。
魔法陣に召喚された眷獣の群れは、占城や獅子王機関の連中がどうにか抑えてくれているだろう。だが、その均衡も長くは保たないだろう。魔族登録証のハッキングを解除しない限り、タルタロス・ラプスの攻撃は終わらないのだ。
「それよりも、浅葱。おまえ、百メートル走のタイムっていくつだ？」
「百メートル？」

矢瀬の唐突な質問に、浅葱が面喰らったような表情を浮かべる。
「春に測ったときは、十三秒ちょうどくらいだったけど」
「スパイクなしでそれかよ……おまえって本当に無駄な高スペックの塊だよな……」
陸上部員並じゃねーか、と矢瀬は呆れ顔で息を吐く。
浅葱もさすがにムッとしたように矢瀬を見返して、
「なによそれ？　あんたね、あたしにケンカ売ってる場合？」
「悪い悪い。それよりも、次の交差点を渡った正面にある白いビル、わかるな？」
「右側の無駄にでかいヤツね？」
浅葱が、顔を上げて建物の人り口を確認する。人工島管理公社の出張所が入ったビルである。
「あの地下にキーストーンゲートに直結してる通路がある。こういう緊急事態に備えて造られた抜け道だ。公社でも一部の人間しか知らねえ」
「そこまで行けば、狙撃される危険はないってこと？」
「ああ。通路の目的からして、事前に爆弾を仕掛けることも不可能だ。だろ、モグワイ？」
『まあ、そうだな』
矢瀬が得意げに眉を上げ、モグワイが素っ気なく答えてくる。
『ただし問題は、交差点を渡ってる間、狙撃手から丸見えになるってことだな。嬢ちゃんの脚でも七秒ちょいってところか。あの狙撃手が見逃してくれるとは思えねーな』
「七秒……」
浅葱が、ぐっと唾を呑みこむ気配があった。
片側二車線の幅広の交差点には、身を隠せるような場所はどこにもない。全力疾走する女子高生など狙撃の的だ。乗り捨てられた車が何台か近くに駐まってはいるが、あの対物ライフルの威力なら、乗用車の車体

など紙も同然に撃ち抜いてくるだろう。
「ほかの道はないわけ？」
「ないことはないが、遠回りすれば相手の思うつぼだろ。時間もねーしな」
上空の魔法陣を見上げて、矢瀬は頼りなく首を振る。
数百体を超える眷獣の群れは、いつの間にか姿を消していた。代わりに出現したのは具体的な効果は不明だが、ろくでもない現象が起きていることはわかる。
「つーわけで、俺が合図したら走ってくれ。地下に降りたら、そこから先の道順はモグワイが知ってるはずだ。〝C〟に辿り着いたら、あとは任せる」
「わかったけど……あんたはどうするのよ？」
「囮になって、狙撃手の気を惹きつけとく。なんせ、脚がこのザマでな」
矢瀬は軽薄な口調でそう言って、自分の足首を指さした。
血塗れの傷口を見た浅葱が、うっ、と怯えたように息を呑む。どう見ても飛んできた破片に当たっただけの怪我ではなかった。傷口が骨近くにまで達している。
「基樹……まさか、あんた撃たれてたの……!?」
「かすっただけだ。心配ない。それよりも早く準備しろ。モグワイ、浅葱の援護を頼む」
矢瀬は、浅葱に反論の時間を与えない。
浅葱は長い溜息をついて、無言のまま低く身構えた。走りやすい靴ではないが、気にしない。全力で交差点を渡りきることだけに意識を集中する。
『ケケッ、任せな。カウントダウン。行くぜ――』
モグワイが秒読みを開始した。矢瀬がポケットから取り出したカプセル錠剤を、口に含んで噛み砕く。浅葱は目を閉じて静かに呼吸を整えた。

9

そして運命の一瞬が訪れる。

タルタロス・ラプスの狙撃手――カーリは獣人だった。

完全な人間の姿になることも、獣の姿に変わることもできない。髪を長く伸ばしてみても、小型犬に似た大きな獣の耳を、他人の目から隠すことは不可能だった。

筋力の最大値や敏捷性は、常人の三倍から五倍程度。極めて力の弱い獣人だ。

男性であれば、一般人でも、カーリを凌ぐ筋力の持ち主はめずらしくない。

その脆弱な肉体ゆえに、獣人種族としては際立って脆弱だ。ある程度鍛えたの社会でも魔族の共同体でも、カーリは幼少時より苛烈な虐待を受けていた。無能と誹られ、暴力を浴びた。人間その境遇は〝魔族特区〟を訪れても変わることはなかった。

実の両親からも見放され、餓えに苦しみ、寒さに凍えて死を待つばかりだったそのとき――カーリはディセンバーに拾われたのだ。

タルタロス・ラプスの一員となったカーリは、千賀から狙撃の技術を学んだ。

皮肉なことにカーリの肉体は、狙撃手としての天性の才能を持っていた。

強烈な対物ライフルの反動に耐える筋力と、人間の武器を操る繊細さ――脆弱な獣人というカーリの個性は、その最適なバランスを備えていたのだ。聴覚や嗅覚、暗視能力といった獣人ならではの優れた五感も、狙撃手としての強力な武器だった。

カーリはたちまち千賀を抜いて、タルタロス・ラプス最強の狙撃手となった。

人を殺すことへの罪の意識はなかった。

狙撃はカーリが生まれて初めて手に入れた存在意義なのだ。

カーリは、タルタロス・ラプスの目的には興味がない。〝魔族特区〟に対する恨みもない。ただディセンバーを喜ばせるためだけに、カーリは人を殺す。

彼女の仲間という証を得るために、カーリは狙撃を続けるのだ。なのに――

「どうして……!?」

カーリが放った弾丸を藍羽浅葱が回避した。

ガードレールのわずかな隙間を利用した精密射撃だ。

れるはずのない一撃だった。なのに藍羽浅葱には当たらない。

藍羽浅葱の傍にいる少年が、ギリギリで彼女を庇ったからだ。まるでカーリの行動を、すべて見抜いているかのような動きだった。

おそらく彼も普通の人間ではないのだろう。なんらかの能力を使っているのだ。呪術か魔術、あるいは霊視などの超感覚か。いずれにせよ、カーリの狙撃そのものを妨害できるほどの強い力ではないらしい。

カーリはライフルの弾倉を交換した。装弾数は五発。持参した最後の弾倉だった。しかしカーリに焦りはない。一発でも残っていればそれで十分だ。その一発を目標に撃ちこめば、その時点でカーリの勝ちなのだから。

残されたすべての弾丸を使ってでも、藍羽浅葱を確実に仕留める――カーリは冷静にそう考えている。

「来る……」

カーリは口の中だけでそう呟いて、再び伏射姿勢を取った。

藍羽浅葱は道路を横切って、その先のビルに入ろうとしている。道路の幅は、歩道を入れて約三十メートル。狙撃可能時間は五秒から六秒といったところだろう。カーリにとっては余裕のある時間だ。その気になれ

ば、残りの弾丸すべてを撃ちこむことすら可能である。

獲物が動き出す気配を、カーリは理屈ではなく直感でとらえた。

最初に飛び出したのは、同行者の少年のほうだった。明らかな陽動。囮である。

乗せない。呼吸を乱すこともなく、藍羽浅葱が現れるのを待つ。そして――

「くつ――!?」

藍羽浅葱が交差点に飛び出した瞬間、カーリはかすかに動揺した。照準器越しのカーリの視界を、眩い閃光が照らしたのだ。

交差点に乗り捨てられていた数台の乗用車――そのヘッドライトが一斉に点滅を始めていた。まったく予期せぬその輝きに、カーリの集中が乱される。

「ハッキング……！」

リモコンキー機能を搭載した乗用車は、車外からでもヘッドライトの操作が可能だ。誰かがその機能を利用して、カーリの狙撃を妨害したのだ。

単純な目眩ましに過ぎないが、狙撃手を惑わすにはそれなりに効果的だった。

カーリが状況を把握するまでにかかった時間は一秒ほど。浅葱はすでに、交差点の真ん中近くにまで達している。だがそれでもカーリの圧倒的な優位は動かない。

疾走する制服の少女の背中を、カーリは正確に照準した。

引き金にかけた指に、ほんの少しだけ力をこめる。

その瞬間、

『サセルカヨ……！』

大気を裂くような叫びとともに、凄まじい暴風がカーリを襲った。

衝撃でカーリの身体が転がった。カーリが放った弾丸は、大きく狙いを外して道路に跳ねる。

唖然として立ち上がるカーリが見たのは、大気の屈折が生み出した奇妙な人影だった。

その人影の輪郭は、藍羽浅葱を護っていた少年の姿によく似ている。

「大気精霊!?　いえ、生き霊ですか！　そんなもので、私が――」

カーリが腰のホルスターから武器を抜いた。大口径のオートマチック拳銃だ。貫通力よりも制圧力を優先した弾丸が、大気圧によって形成された少年の分身を粉砕する。その衝撃は分身の肉体を通じて、術者本体にも逆流したはずだ。

だが、少年の分身は止まらない。

「なっ!?　分身が破壊されれば、術者も相応のダメージを負うはず――なのに、どうして!?」

凄まじい勢いで再生した暴風の塊が、再びカーリを攻撃してくる。カーリはその衝撃に抗いながら、残った弾丸を乱射した。

頭部。腹部。そして心臓。思いつく限りの急所を粉々に吹き飛ばす。

暴風の塊はなおも戦闘を続けようとしていたが、人間の姿を保つだけの力はもはや残されていなかった。カーリに向かって手を伸ばし、そのまま霧散して見えなくなる。

「やりました……暗殺を続行します」

カーリが再びライフルを抱き上げる。藍羽浅葱は、すでに目的のビルに入っていた。

だ。カーリに残された選択肢は、彼女を追跡し、自らの手で殺すことだけだ。

だが、ビルを降りようとしたカーリの耳元で、亡霊の囁きにも似た低い声がする。

『マダダッ……！』

「え!?」

横殴りの強い衝撃に、カーリの身体がよろめいた。破壊したはずの暴風の塊が、再び少年の形となってカーリを殴りつけたのだ。

重い対物ライフルが、反動でカーリの手から離れた。屋上の縁にぶつかって、そのまま地上へと落下する。

「銃……が！」

カーリが咄嗟に身を乗り出して、ライフルをつかみ取ろうとした。

その対物ライフルはカーリにとって、タルタロス・ラプラスとの絆の象徴だ。もしそれを失ってしまったら、ディセンバーとのつながりも断たれてしまう。その恐怖がカーリから冷静さを奪った。致命的な隙だった。

『オオオオオオオ――ッ！』

暴風の塊が、少年の声で咆吼する。最後の力を振り絞って放たれた衝撃波が、不可視の鎚となってカーリを襲った。

狙撃地点として選ばれたビルの屋上から、獣人の少女が宙を舞った。

荒れ狂う大気に翻弄されて、カーリは受け身を取ることもできない。吹き下ろす強烈な突風が、無防備な彼女を地面に叩きつける。

小柄な身体が地面に跳ねた。

咳きこむ彼女の唇から鮮血がこぼれる。

彼女のすぐ傍には、いくつかの部品を撒き散らして壊れた、対物ライフルが転がっていた。必死にそれに手を伸ばそうとして、少女は力尽きたように動きを止める。

「……ごめんなさい、ディセンバー……私……こんなところで……！」

全身を襲う苦痛すら忘れて、カーリが力無く呟いた。

渦巻く風が、彼女の頭上を通り過ぎて消えていく。

10

歩道の隅に倒れこんだまま、矢瀬基樹は激しい嘔吐を続けていた。その吐瀉物は鮮血で赤く染まっている。〝重気流躰〟を破壊されたことによるダメージの逆流と、能力増幅剤の過剰摂取が原因だ。

「さすがに、ちょっとキメ過ぎちまったか。悪酔いしそうだぜ……」

投げやりな口調で呟いて、矢瀬は地面に転がった。もはや身動きもできないほどに消耗していたが、今の矢瀬にはどうでもいいことだ。

タルタロス・ラプスの狙撃手を倒して、浅葱はすでにキーストーンゲートに向かった。彼女をどうにか護りきった。それを誇らしく思っているわけではない。達成感というよりも、最低限の義務を果たしたという安堵のほうが強かった。

矢瀬が浅葱の世話を焼くのは、保育園時代からの習性のようなものだ。まったく手間のかかる幼なじみだ、と矢瀬は血塗れの苦笑を洩らす。

そんな矢瀬のほうに向かって、ふらふらと近づいてくる人影があった。

中性的な雰囲気を持つ、人工生命体の少年だ。

ふらついているように見えたのは、彼の周囲で陽炎が揺れているせいだった。発火能力が生み出した高温の大気が、少年の全身を覆っているのだ。

「おまえか……？」

人工生命体の少年が、殺意に満ちた視線を矢瀬に向けてくる。

矢瀬は無表情に彼を見返した。単純に質問の意味がわからなかったのだ。

「おまえが、カーリをやったのか!?」

少年が再び訊いてきた。矢瀬は無意識に失笑を洩らす。少年の正体にようやく気づいたのだ。

タルタロス・ラプスの発火能力者。矢瀬の父親を地下駐車場ごと爆破した爆弾魔だ。矢瀬にとって彼は父親の仇だが、矢瀬は彼にとって仲間の仇ということになる。〝魔族特区〟破壊集団の一員と、その〝魔族特区〟

に飼われた密偵（スパイ）――どのような形であれ、出会ってしまえば殺し合うしかない関係だ。

そして今の矢瀬には、彼と戦う力はない。

立ち上がるだけの体力も残されていない。

「悪いな、あとは任せたぜ……うちの幼なじみを泣かすなよ、占城（こじょう）……」

独り言（ごと）のように親友の名を呟（つぶや）いて、矢瀬は気怠（けだる）げに目を閉じた。

少年が伸ばした掌（てのひら）の中で、灼熱（しゃくねつ）の炎が渦（うず）を巻く。軍用兵器として造られた人工生命体（ホムンクルス）の炎だ。矢瀬の身体（からだ）

など、一瞬（いっしゅん）で消し炭（ずみ）に変えるだろう。

たとえ無抵抗の人間が相手でも、少年に手加減する意思はないらしい。

臨界に達した炎の塊（かたまり）を、少年が矢瀬に向かって解き放つ――

しかし予想していた衝撃（しょうげき）や苦痛が、矢瀬を襲（おそ）ってくることはなかった。

「う……？」

矢瀬がうっすらと目を開ける。その視界に映ったのは翼（つばさ）だった。虹色（にじいろ）に輝（かがや）く巨大な翼が矢瀬を庇（かば）うように広がって、少年の炎を防いでいたのだ。

「――柄にもなくずいぶん働いたようだな、矢瀬基樹（もとき）。褒（ほ）めてやろう」

驚（おどろ）く矢瀬の背後から、傲岸（ごうがん）な声が聞こえてくる。

のは、人形めいた容姿の小柄な女性だ。虚空（こくう）を波紋のように揺らして、なにもない空間から現れた

レースで縁取（ふちど）られた日傘をくるりと回して、南宮那月（みなみやなつき）が着地する。

「那月ちゃん……どうしてここが……？」

矢瀬（やぜ）が間の抜けた表情で、担任教師の名前を呼んだ。

那月（なつき）は、不愉快そうに小さく鼻を鳴らす。

「街中であれだけ派手にライフルを撃ちまくっているやつがいれば、嫌でも気づくさ。なあ、アスタルテ」

「同意」

恭しい口調で返事をしたのは、那月とともに現れた人工生命体の少女だった。

彼女が身に着けている衣装は、背中の大きく開いたメイド服だ。矢瀬を救った虹色の翼が、そのほっそりとした背中から生えている。膨大な魔力を帯びた翼は、自らの意思を持つように自在に動いて、爆弾魔の少年が放つ炎を受け止めていた。

「ロギ、とか言ったか。さて、どうする？」

那月が冷ややかな口調で訊く。

「大人しく投降して、千賀毅人の居場所を吐けば、貴様も悪いようにはしないぞ？」

「誰が――！」

激昂したロギが再び炎を放った。しかし結果は同じだった。アスタルテの翼が炎を受け止め、そのまま安全な方向に撥ね飛ばす。

「問答無用か。ならば仕方ないな――アスタルテ、ここは任せる」

那月が厳かな声で、人工生命体の少女に命じた。

薄水色の大きな瞳を揺らして、アスタルテが首肯する。

「命令受諾」

その瞬間、アスタルテの背中から、新たな翼が出現した。

否――それは、翼ではなく腕だった。アスタルテの身長よりも巨大な眷獣の腕だ。

出現した眷獣は宿主である少女を体内に取りこんで、完全な人の形へと変わる。虹色に輝く人型の眷獣の姿へと。

「人工生命体（ホムンクルス）が、眷獣を……!?」

ロギの放つ炎が次々とアスタルテを襲（おそ）った。

高熱で路面のアスファルトが融解（ゆうかい）し、電離した大気が激しい爆発（ばくはつ）を引き起こす。

タルテは無傷のまま、防御する素振りすら見せなかった。

アスタルテの正体は、眷獣共生型人工生命実験体――世界で唯一の、眷獣を宿した人工生命体（ホムンクルス）なのである。

彼女の眷獣〝薔薇の指先（ロドダクテュロス）〟には、物理攻撃は通用しない。少年の〝発火能力（パイロキネシス）〟では、アスタルテを傷つけることはできないのだ。

「なぜだ!?　おまえだってボクと同じ、兵器として造られた実験体じゃないのか!?　なのに、どうして〝魔族特区〟なんかのために働く……!?」

「肯定、私とあなたは同じです」

アスタルテが、ロギの言葉を認めた。抑揚の乏しい彼女の声に、かすかな哀（かな）しみの響（ひび）きが混じっている。

「私も、かつてこの島を破壊しようとしました」

「だったら――」

「彼らがあのとき私を止めてくれたから、私は失われていたはずの大切な人々と出会えた」

無感情なはずのアスタルテの瞳（ひとみ）に、強い意思の光が宿っている。それはロギに対する怒りや哀（あわ）れみの感情ではなかった。同類である少年を救おうとする強い想（おも）いだ。

「だから、今度は、私があなたを止めます――執行せよ（エクスキュート）、〝薔薇の指先（ロドダクテュロス）〟」

アスタルテの眷獣（けんじゅう）が、炎に包まれた人工生命体（ホムンクルス）の少年を殴りつける。少年の小柄な肉体は、ひとたまりもなく吹き飛んだ。

「なんだよ、それ……ちくしょう……」

路上にぐったりと倒れたまま、ロギはそのまま動きを止めた。

アスタルテはそんな彼の姿を、無言のままいつまでも見下ろしていた。

11

ディセンバーは、寂れた広場から海を眺めていた。

その場所は、かつて多くの人々で賑わう商業施設だったのだろう。残されたポップな装飾やカラフルなワゴンが、その愉しげな雰囲気の名残を留めている。

しかし、今、広場にいるのはディセンバーとラーンだけだった。

広場の片隅には、ゴミの山が積み上げられている。動かなくなった建設機械や自動車の部品。テレビや冷蔵庫などの家電製品。おそらく人工島・旧南東地区が廃棄された直後に、心ない人々が不法に投棄したものだ。

その廃棄物の中にまぎれて、真新しい発電機と通信機、そして防水処理を施された大型のコンピューターが稼働していた。ディセンバーたちが事前に持ちこんで、粗大ゴミの下に隠しておいたのだ。コンピューターにつながるネットワークケーブルの一部は、ラーンが首に巻きつけたマフラーの下から伸びている。

「〝カインの巫女〟が、キーストーンゲートに入った」

分厚いコートを着たラーンが、膝を立てて地面に座ったまま、起伏の乏しい声で言う。

彼女は首と背中の端子を経由して、脳を、直接コンピューターネットワークに接続することができるのだ。

その結果、ラーンは並の技術者では比較にならないほどのハッキング能力を手に入れた。魔族登録証のハッキングも、彼女だから成し遂げることができたのだ。

しかし、藍羽浅葱の能力は、そのラーンの〝性能〟をも上回る。

「プログラム〝タルタロスの薔薇〟のネットワーク占有率、七十七パーセントまで低下。魔族登録証四千八百個の反応をロスト」

「そっか……あなたでも止められないなんて、さすがね、藍羽浅葱……」

ラーンの報告を聞きながら、ディセンバーは寂しげに微笑んだ。

予想されていたこととはいえ、藍羽浅葱がキーストーンゲートに辿り着いたことで、戦つあった。魔族登録証に感染させたウイルスが、駆除されてしまうのも時間の問題だ。そ陣への魔力供給が途絶え、四聖獣は実体を維持できなくなる。

その前に絃神島を破壊できるかどうか――タルタロス・ラプスの戦いは、そんなシンプルな領域へと収束を始めていた。

すでにカーリやロギとは連絡が取れなくなっている。藍羽浅葱の暗殺は失敗したのだ。

「わかったわ、ラーン。もういい、逃げて。あとはあたしだけで大丈夫だから」

ディセンバーがマフラー姿の少女に呼びかける。

しかしラーンは、表情を変えないまま小さく首を振った。

「ごめんなさい」

「ラーン……？」

「逃げられない。離れたくない……気持ち……いい……」

ネットワークに意識を接続したまま、ラーンはうっとりと声を出す。その姿にディセンバーは動揺した。〝巫女〟がキーストーンゲートに入ったことで、〝C〟が活性化を始めたのだ。

魔族登録証の制御が奪い返されただけではない。ネットワークを経由して、〝C〟の意思がラーンを汚染し始めている。

「駄目、ラーン！　相手はこの人工島そのものを掌握している化け物よ。いくらあなたでも、そんな膨大な情報流人に脳が耐えられるわけない！」

ディセンバーが、ラーンの肩をつかんで激しく揺さぶった。しかしラーンは反応しない。青白い肌を薔薇色

に染めて、酩酊したように視線を彷徨わせている。
「これが……〝C〟の記憶……綺麗……あ……ああ……」
「ラーン！　接続を解除して、ラーン！」
絶叫するディセンバーの掌が、眩い火花とともに弾かれた。限界を超えて脳に流入してくる情報を処理しきれずに、ラーンの肉体が暴走を始めているのだ。
「ありがとう……ディセンバー……私……わかった……」
「待って、ラーン！　行っては駄目！　ラーン！」
ディセンバーが、ラーンにつながっていたネットワークケーブルを強引に引きちぎった。
その瞬間、ラーンの肉体は激しく痙攣し、糸が切れたようにその場に倒れこむ。
「ごめんね、ラーン……大好きよ。カーリ、ロギ……みんな……」
苦悶を続ける少女の身体を、ディセンバーが横たえた。乱れたマフラーをそっと巻き直し、優しく髪を撫でてやる。
「……ラーンの脳内にはね、常人の十六倍もの微細化された神経回路が張り巡らされているの。そのことによって、彼女には戦略級コンピューター並の情報処理能力が与えられた」
誰に聞かせるということもなく、ディセンバーが語り始める。
その声は、強い海風に吹かれながらも、不思議とよく通った。
「もちろん生きた人間の脳が、そんな膨大な情報を処理できるわけがない。細胞の代謝だけで、あっという間に神経が焼き切れるわ。だから彼女に与えられたのは、死霊魔術によって動く、死者としての肉体だったの。彼女はいわば、脳改造版フランケンシュタインのモンスター――といったところね」
ディセンバーは、音もなく立ち上がって振り返る。虹色に輝く彼女の金髪が、ふわりと風に煽られて広がった。炎のように輝く碧い瞳が、真っ直ぐに一人の少年を映し出す。

「そんな彼女が、生まれ故郷である〝魔族特区〟を滅ぼしたいと願うのは、おかしいから。きみはどう思う、暁古城？」

「それを判断するのは、俺じゃない」

少年が、迷いを断ち切るように静かに言った。

寂れた広場に着地していたのは、翼を持つ鋼色の龍だった。この忘れられた廃墟の人工島に、龍が彼を運んできたのだ。世界最強の吸血鬼――第四真祖、暁古城を。

「たしかにその子たちの怒りには、正当な理由があるのかも知れない。千賀が言ってたように、この島のせいで、大勢の犠牲者が生み出されるのかも知れない」

古城がそう言って頭上を仰ぐ。〝タルタロスの薔薇〟によって生み出された四体の聖獣たちが、魔力の炎をまとって絃神島を睥睨していた。

四聖獣の実体化は完全ではない。獣の輪郭を保っているのは、約七割といったところだろう。紗矢華と志緒の呪術砲撃が魔法陣の一部を破壊して、四聖獣の召喚を妨害したせいだ。

そして〝タルタロスの薔薇〟そのものも、ゆっくりと消滅を始めている。魔族登録証の機能が修復されて、地上からの魔力供給が途絶えたのだ。間違いなく浅葱の仕業だった。

「だけど、おまえらが絃神島を壊したいと思ってるのと同じくらい、俺はこの島で暮らしてる連中を護りたいと思ってんだよ！　だから俺は、おまえらを止めるぞ、タルタロス・ラプス！　ここから先は、俺の戦争だ！」

「あたしは認めない！　そんな理屈――！」

ディセンバーが、古城の言葉に抗うように絶叫した。

彼女の背後に眷獣の影が浮かび上がる。眷獣の瞳が放つ魔力が古城の意識を捕らえ、古城の身体がぐらりと揺れた。眷獣による精神攻撃だ。古城の肉体だけでなく、第四真祖の眷獣までも支配しようとする強烈な意思

その圧倒的な支配力を断ち切ったのは、眩い銀光の一閃だった。

「いいえ、先輩。わたしたちの戦争です」

銀色の槍を構えた雪菜が、古城を庇うように立っている。

倉庫街での一戦で、証明されていたことだった。ディセンバーの攻撃は、雪菜に配能力を、雪菜の〝雪霞狼〟が無効化するからだ。

「くっ！」

自らの不利を悟ったディセンバーが、不法投棄された廃棄物の山に手を伸ばす。に仕込まれていた術が起動した。

地鳴りのような震動とともに、廃棄物の山が盛り上がり、多数の金属の残骸をまとった人型の巨人が出現する。それは法奇門によって生み出された傀儡だった。千賀毅人の石兵だ。

轟、と生命を持たないはずの傀儡が咆吼する。

全身を金属の鎧で覆った石兵が、巨体に似合わぬ敏捷さで雪菜を襲った。だが、が、滑らかな断面を残して地面に落下する。

石兵の腕を斬り落としたのは雪菜ではない。銀色の長剣を携えた、もう一人の剣巫だ。

「わ、わたしたちもいるからね、いちおう……」

占城たちの前に着地した唯里が、控え目な声で告げてくる。そんな唯里を応援するように、グレンダが、だっ、と拳を突き上げてはしゃいでいた。

ディセンバーが喚び出した石兵は四体だった。かつて特区警備隊を蹂躙したその怪物たちを、唯里は一方的に撃退していく。疑似空間切断能力を持つ唯里の六式降魔剣・改の前には、金属傀儡の装甲は無意味なのだ。

想定外の伏兵の出現に、切り札を失ったディセンバーは呆然と立ち尽くす。

「終わりだ、ディセンバー」

彼女を冷たく睨んで、古城が言った。

そんな古城を見返して、ディセンバーは吹っ切れたように微笑んでみせる。

「まだよ、暁古城！　〝タルタロスの薔薇〟が散ってでも、召喚された四聖獣は残ってる。あたしの仲間が召喚してくれた――絃神島を破壊する力は！」

「なに……!?」

ディセンバーの眷獣が放つ魔力が、古城ではなく、上空に待機する四聖獣へと向けられた。

四聖獣の召喚はいまだ不完全だ。だが、実体化を終えた七割だけでも、四聖獣の持つ魔力は絃神島は壊滅的なダメージを受けるだろう。

しかし〝タルタロスの薔薇〟を失った今、タルタロス・ラプスには四聖獣を操る手段がないのではないか――古城がそう疑った瞬間、

「疾く在れ、〝鷹羯の瞳晶〟――！」

ディセンバーが、自らの眷獣を初めて完全に解き放っていた。

全長十数メートルにも達する巨大な眷獣。それは銀水晶の鱗を持つ美しい魚竜だった。前肢は半透明の翼であり、野羊に似た螺旋状の角もまた光り輝く水晶柱だ。

四真祖の眷獣とまったく同質のものだ。

その眷獣がまとう禍々しい気配は、古城の眷獣によく似ている。大気を震わす存在感も、魔力の密度も、第四真祖の眷獣もまた、世界最強の吸血鬼である占城の眷獣すら支配する。

そう。ディセンバーの眷獣は、

なぜなら彼女の眷獣は、第四真祖の眷獣そのものだったのだ。

「第四真祖の眷獣、か……やっぱり、そういうことだったんだな……」

勢いを増すディセンバーの魔力に気圧されながら、古城が唸った。

正統な第四真祖の後継者である占城以外にも、第四真祖の眷獣を従える者は存在する。

っていた。彼女の正体を知っていたのだ。

「あなたがディセンバーと名乗ったとき、すぐに気づくべきでした」

銀色の槍を構えたまま、雪菜が言った。

「古代ローマでは、毎年二月が一年の始まりとされていた――だから、現代の暦とは二カ月のズレが存在する。そうですね。十二月を表すディセンバーという言葉には、〝十番目の月〟という意味がある」

「十番目……やっぱり、そういうことだったんだな……」

占城が痛みに耐えるような声で呟いた。

第四真祖の正体は、占の時代に〝殺神兵器〟として生み出された人工の吸血鬼だ。

の時期が過ぎ去り、役目を終えた第四真祖は封印された。

そして第四真祖の復活を恐れた人々は、第四真祖の十二体の眷獣を、それぞれ異なる場所に封印したのだ。

眷獣を封印するためだけに造られた新たな人造吸血鬼――〝焔光の夜伯〟と名付けられた十二人の少女の中に。

「おまえはアヴローラと同じ、第四真祖の封印体だったんだな、ディセンバー！……！」

「きみは、本当になにもわかっていなかったのね、暁占城。自分が何者なのかさえ」

クスッ、とディセンバーが悪戯っぽく微笑んだ。かつてアヴローラ・フロレスティーナと呼ばれていた少女と同じ顔で。

「そうかもな」

古城は彼女の言葉を認めた。第四真祖の復活の儀式で、古城は記憶の大部分を奪われている。ディセンバー

の正体に最後まで気づかなかったのも、そのせいだ。

「あたしは、十二番目と違って、記憶も曖昧なくらい遠い昔に目覚めたの。四十年くらい前にタルタロス・ラプスの存在を知って、彼らの仲間として二つの〝魔族特区〟を滅ぼした。〝焔光の宴〟にかかわらなかったのは、そのころ第三真祖に捕らわれていたせい」

「第三真祖……ジャーダが、おまえを匿っていたのか……」

「匿っていた……結果的にはそうなるわね。おかげでラーンたちとも再会できたわけだし」

ディセンバーが笑うように目を伏せた。彼女と、まだ見ぬ六番目以外の封印体は、すべて〝焔光の宴〟で消滅している。この人工島・旧南東地区を滅ぼした、第四真祖復活の儀式に巻きこまれて――

「あたしが解放されたのは、絃神島に行くと第三真祖に伝えたからよ。きみは彼女に気に入られているのね、暁 占城。その理由、少しだけわかった気がするわ」

「ディセンバー――おまえ、身体が……」

小柄な少女の肉体が、金色の粒子に包まれて、さらさらと崩れ始めていた。

通常の吸血鬼の霧化とは違う。彼女の存在そのものが消滅しようとしているのだ。

「あたしたち番号持ちは、第四真祖の眷獣の封印そのものが来ると決めたときから、こうなることは覚悟してた。〝タルタロスの薔薇〟が完全に起動していれば、封印を解かずに済んだのだけど。少し残念、かな」

ディセンバーが晴れやかな表情で笑う。そして彼女は、誇らしげに頭上を指さした。

「あたしが封印していた――そしてあたし自身でもある十番目の眷獣〝麝羯の瞳晶〟は、吸血鬼の持つ〝魅了〟の能力を司る眷獣よ。だから、こんなことだってできる」

絃神島の上空に出現した四聖獣が、ディセンバーを護るように集まってくる。

四聖獣は、魔術装置としての絃神島によって召喚された、宿主を持たない眷獣だ。

〝タルタロスの薔薇〟

が失われた今、彼らを制御できる者は存在しないはずだった。

ディセンバーの眷獣は、そんな四聖獣をも支配することができるのだ。

「きみが絃神島を護るというのなら、このあたしを倒してみせて。それができたなら、きみを第四真祖だと認めてあげる！」

「待て、ディセンバー――！」

制止しようとした古城の目の前で、ディセンバーが力尽きたようにくずおれる。

代わりに動き出したのは、彼女の眷獣に操られた四体の聖獣たちだった。

彼らの攻撃対象は古城――いや、古城たちがいる人工島の大地そのものだ。四聖獣の魔力をもってすれば、古城を攻撃する余波だけで絃神島を破壊することができるのだ。

「くそ！　疾く在れ、〝甲殻の銀霧〟――！」

古城が自分の眷獣を召喚した。銀色の濃霧に包まれた巨大な甲殻獣が、四聖獣の一体――海面を割るように突っこんできた漆黒の鰐鮫を迎撃する。

古城に手加減する余裕はなかったし、その必要のない敵だった。無制限に解き放たれた魔力の塊同士が激突し、すでに壊れかけていた人工島の大地を大きく揺さぶる。

だが、ディセンバーが支配している四聖獣は一体ではない。

りも、古城の眷獣の力が上回っていたのだ。

甲殻獣を噛み砕こうとした鰐鮫の顎が、魔力の輝きを浴びて霧散した。不完全な形で実体化した四聖獣よりも、古城の眷獣の力が上回っていたのだ。

と降りそそいだ。

鰐鮫に気を取られた古城の背後で、真紅の猛禽が炎を吐く。その炎は灼熱の火球と化して、占城の頭上へ

「六式降魔剣・改――！」

唯里の放った剣撃の軌跡が、四聖獣の放った火球を受け止めた。疑似空間切断が生み出した障壁だ。障壁の

持続時間はほんの一瞬。

助かったぜ、と唯里に視線で訴え、古城が獰猛に牙を剝く。

だが、古城が体勢を立て直すには十分な時間だった。

「疾く在れ、〝双角の深緋〟！」

古城が召喚した緋色の双角獣が、四聖獣の猛禽へと突撃する。衝撃波の塊を正面から喰らって、炎に包まれた猛禽の翼が四散した。

しかし息つく暇もなく、残る二体の四聖獣が降下を開始する。純白の猛獣――白虎は古城の頭上へと。そして龍神――青龍が狙っていたのは、絃神島の本島だった。

人工島の中心部を直撃すれば、たとえ一体だけでも、絃神島全土を沈め得るだけの威力を、四聖獣たちは持っている。ほかの四聖獣の攻撃は囮。ディセンバーは最初から、絃神島だけを狙っていたのだ。

古城の攻撃は白虎に阻まれて、青龍を止めることができない。間に合わない――

その場にいた誰もが絶望を覚えた瞬間、横殴りの閃光が龍神を襲った。

立て続けにもう一撃。紗矢華と志緒の呪術砲撃だ。

もちろん獅子王機関の制圧兵器といえども、四聖獣を倒すほどの力はない。それでも一瞬、青龍を怯ませる程度の効果はあった。それは絃神島の運命を変える一瞬だ。

「〝龍蛇の水銀〟――！」

古城が召喚した双頭龍が、動きを止めた青龍の喉を喰いちぎる。空間そのものを削り取る、〝次元喰い〟の一撃だ。断末魔の雄叫びを上げることすらできず、青龍の巨体が消滅する。

残る四聖獣は一体だけ。眼前に迫った白虎へと、古城は魔力を帯びた右腕を向けた。

「焔光の夜伯の血脈を継ぎし者、暁古城が、汝の枷を解き放つ！」

見えない壁に阻まれたように、白虎の巨体が制止する。古城の放つ膨大な魔力が、白虎の突進を喰い止めて

いるのだ。巨大な魔力の激突に大気が軋み、青白い稲妻が周囲に満ちる。

だが、占城の呪文の詠唱はそこで途切れていた。

全身を襲う重圧に耐えかねたように、占城がその場に膝を突く。

四聖獣とは異質な魔力が、古城に攻撃を仕掛けていた。第四真祖の魔術耐性すら凌駕する精神攻撃。〝ダビ・クリユスタルス 麿羯の瞳晶〟の精神支配だ。ディセンバーの眷獣が、〝魅了〟の力で、古城の眷獣召喚を妨害している。

だが占城は、ディセンバーの精神攻撃を受けながら、白虎と拮抗する力を放ち続けていた。倉庫街での戦闘のときとは違う。今の古城は圧倒的な支配力で、自らの眷獣を完全に掌握していた。でも、その支配を破れない。ディセンバーの眷獣の力体内に取り入れた強大な霊力——雪菜と唯里の血の効果だ。

「——獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る！」

膨大な魔力が渦巻く戦場に、凛とした少女の声が響き渡る。

光り輝く銀色の槍をかざして、疾走していたのは雪菜だった。彼女の瞳が見つめているのは、銀水晶の鱗に覆われた第四真祖の眷獣だ。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

吸血鬼の真祖すら斃し得る破魔の霊槍が、ディセンバーの眷獣を貫いた。

占城の全身を縛っていた重圧が消え、大気を青白い閃光が満たした。

「疾く在れ、五番目の眷獣〝獅子の黄金〟！」

黄金の輝きに包まれた眷獣が、古城の前に出現する。その咆吼は四聖獣最後の一体を瞬時に粉砕し、最後の一片まで焼き払った。

紘神島の上空に渦巻いていた魔法陣の断片が、今度こそ完全に消滅する。

人工島の鳴動が止み、澱んでいた大気を爽やかな海風が洗い流した。眩い陽光が、占城たちの横顔を照らし

てくる。容赦ないその陽射しを鬱陶しげに見上げて、占城は長い溜息をついた。

「先輩！」

「占城くん！」

「だっ!?」

雪菜と唯里、そしてグレンダが、よろめく占城に駆け寄ってくる。不安げな顔の彼女たちに、心配ない、と占城は気怠く笑ってみせた。

疲弊した身体を引きずるようにして立ち上がり、占城はゆっくりと歩き出す。

占城が視線を向けた先には、金色の霧に包まれた少女の姿があった。

近づく占城を見返して、彼女は儚げに微笑んだ。

「きみの勝ちだね……占城……」

「ディセンバー――」

「最後にお願いがあるんだ、占城。ラーンたちを……カーリやロギをちゃんとした研究機関に連れて行ってあげて欲しい。あの子たちはこのままじゃ、そう長くは生きられないから……」

「……わかった」

約束する、と占城は力強くうなずいた。あらためて言われるまでもないことだった。

紘神島でなら、それができるはずだった。この島は〝魔族特区〟なのだから――

「約束だったね、暁占城。きみに十番目の眷獣の力を与えてあげる」

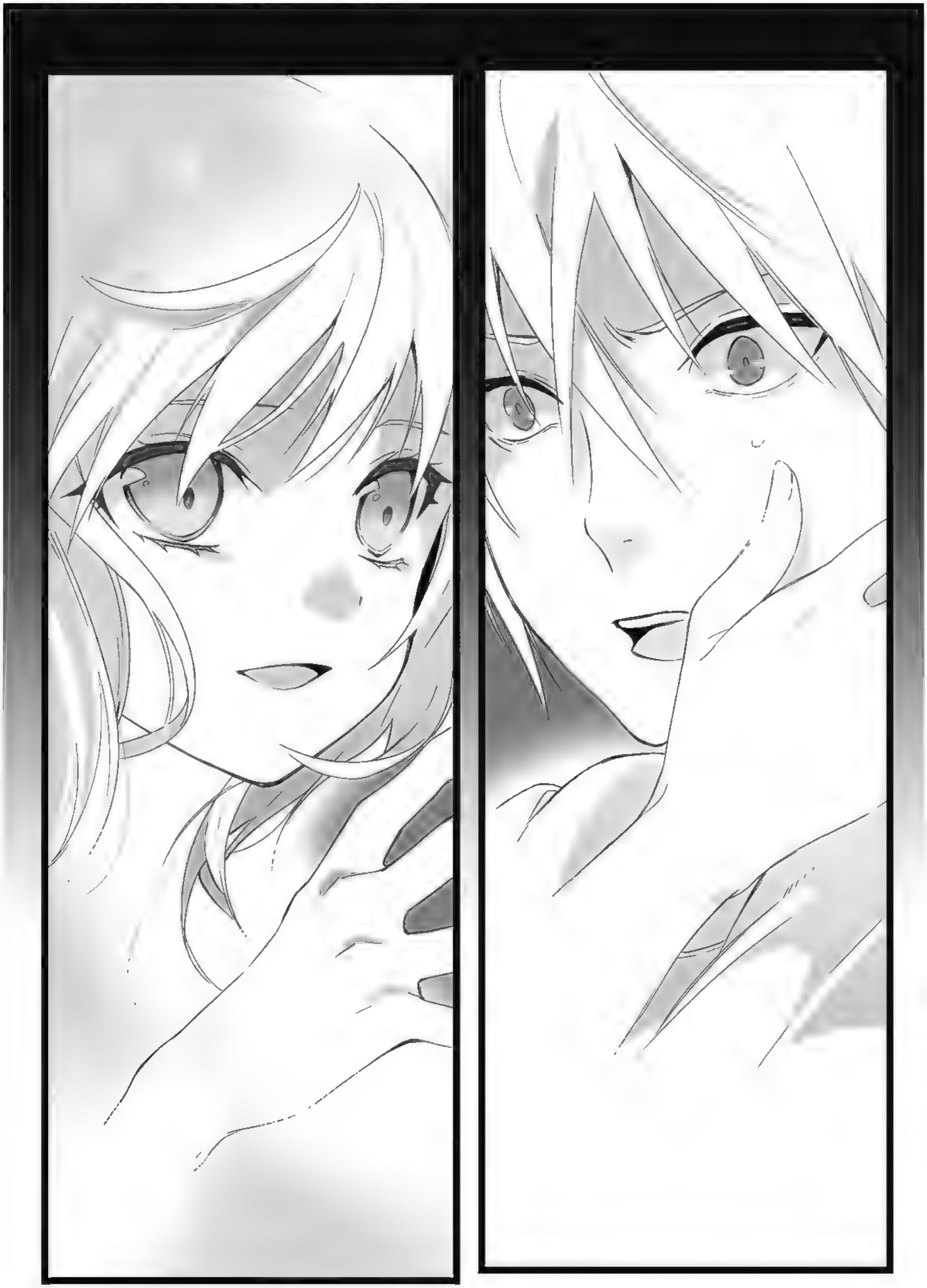
「待ってくれ……ディセンバー！……俺は、そんなもの……」

古城が、薄れていく少女の小さな身体を抱き上げる。彼女の力を奪うために、占城は戦ったわけではない。

彼女の消滅を望んでなどいないのだ。

しかしディセンバーは、愉(たの)しげに目を細めただけだった。

「そんな哀(かな)しそうな顔をしなくても、大丈夫。あたしは、ずっときみの傍(そば)にいるから……だから、あたしの意識が消える前に、きみの中に――」



「ディセンバー……！」

占城（こじょう）の頬（ほお）に伸ばしたディセンバーの指先から、力が抜けた。彼女の姿が金色の霧（きり）に変わって、占城の腕の中

から消えていく。

「十二番目の……アヴローラを護って、暁占城。あの子がきみの希望……だから……」

それが十番目の〝焔光の夜伯〟――ディセンバーの最後の言葉だった。

12

無言で唇を噛む古城の背中を、雪菜たちは言葉もなく見つめていた。

「消えたのか……ディセンバー……」

四聖獣消滅の気配を感知して、千賀毅人は静かに呟いた。

絃神島の周辺を流れる気脈が、正常な状態へと戻っている。〝タルタロスの薔薇〟が消滅し、千賀毅人は静かに呟いた。

も破られたのだ。第四真祖と戦って敗れたということは、ディセンバーはすでに暁占城に取りこまれたと考えていいだろう。

カーリとロギ、そしてラーンの敗北も確認した。タルタロス・ラプスは負けたのだ。

「四聖獣をも凌駕する第四真祖の力……世界最強の吸血鬼の呼び名は伊達ではない、か。だがそれでも、タルタロス・ラプスの目的は果たされる。そうだろう、ディセンバー？」

自分自身に言い聞かせるように呟いて、千賀は通路を下りていく。

千賀が向かっていた場所は絃神島の中心――キーストーンゲートの最下層だった。

そこには、絃神島四基の人工島を連結するための要石が置かれている。かつてロタリンギアの殲教師が、ある目的のために襲撃した場所だ。その要石を破壊してしまえば、絃神島は自らの質量によって崩壊する。絃神島の最大の急所なのである。

厳重に封印されたその区画には、何人も足を踏み入れることはできない。卓越した空間制御能力を持つ南宮

那月でも無断侵入は不可能だ。キーストーンゲートの内部は強固な防壁に覆われて、さらには外部からの侵入を拒む結界が何重にも張り巡らされている。その結界を解呪できる人物は、絃神島の設計者である絃神千羅と、彼の盟友――矢瀬顕重だけだといわれていた。

「いや、そうか。もう一人だけ例外がいるのだったな」

「――っ!?」

誰もいないはずの通路に不意に声が響いて、千賀は驚きに足を止めた。

声は千賀の進行方向、すなわちキーストーンゲートの最下層から響いてくる。

「絃神千羅が封印術式を発注したのは、当時欧州の大学に勤めていた風水術の権威――貴様の師匠にあたる人物だったか。当然、貴様はそのデータを持っているわけだ。なあ、千賀毅人よ」

「馬鹿な……どうしてここがわかった……いや……」

目の前に現れた人影を睨んで、千賀が吼えた。隠し持っていた拳銃を無意識に抜き放つ。

そんな千賀の狼狽を、愉快そうに見上げていたのは、眼光鋭い和服姿の男だった。

年齢は五十代の半ばだろうか。決して大柄ではないが、凄まじい威圧感がある。中世の剣豪を思わせる雰囲気の持ち主だ。

「なぜ貴様が生きている、矢瀬顕重!?」

千賀がかすれた声で訊く。

そこにいたのは、地下駐車場に仕掛けられた爆弾によって、瓦礫に埋まったはずの男だった。

人工島管理公社名誉理事の矢瀬顕重。タルタロス・ラプラスの計画の障害の一人だ。

千賀は矢瀬顕重の返事を待たず、拳銃の引き金を引いていた。

だが千賀が放った弾丸は、相手の身体に触れる前に、火花を散らして弾かれる。

まるで目に見えない透明な刃に、ことごとく撃ち落とされているように――

「そうか……貴様……過適応能力者……！」

不可解な現象の正体に気づいて、千賀が頬を引き攣らせた。矢瀬顕重の力の正体は、先天的な超能力だ。呪文の詠唱を必要としないその力には、当然、発動までのタイムラグもない。地下駐車場の爆発を生き延びたのも、その力によるものだろう。

「紘神島の封鎖、人工島管理公社の混乱、そして反対勢力の粛清――おまえたちは、実に良い仕事をしてくれたな。礼を言うぞ」

「なに……？」

矢瀬顕重の厳かな声に、千賀は愕然と肩を震わせた。

待どおりの成果を上げてくれて満足だ、と。

「まさか……貴様たちは、最初から俺たちを利用して……」

そう言いかけた千賀の腹部を、焼けるような激痛が走り抜けた。矢瀬顕重の〝見えない刃〟の攻撃だ。よろめく千賀の全身を、さらに無数の刃が襲った。

千賀は鮮血を撒き散らして、その場に崩れ落ちる。

「これですべてのお膳立ては整った。大義であったな、タルタロス・ラプス」

倒れ伏した千賀の横をすり抜けて、矢瀬顕重が立ち去っていく。

千賀は絶望のうめきを洩らしながら、その背中に手を伸ばそうとした。

「待て、矢瀬顕重……貴様らは、そこまでして魔族の殺戮を望むのか――咎神の末裔どもめ！」

矢瀬顕重は千賀の問いかけに答えない。千賀の耳に届くのは、遠ざかる彼の足音だけだ。

失血で霞む意識の中で、千賀は、ようやく自らが犯した過ちに気づいていた。タルタロス・ラプスの存在は

間違っていた。そして、もうなにもかもが手遅れだ。

「う……うおおおおおお――――っ！」

千賀の悲痛な絶叫が、無人の通路に響（ひび）いていく。

それは、すべての始まりを告げる嘆きの音だった。

終章
Outro

那月がそこに辿り着いたときには、もうすべてが終わっていた。

ようやく混乱から立ち直った特区警備隊の監視網が、キーストーンゲート内に異変を検知。侵入者を確保するために那月が派遣されたのだ。

そして現場に到着した那月が見たのは、血塗れで倒れた千賀毅人の姿だった。

「やあ、那月……もう動けるようになったのか……それはよかった」

苦しげな呼吸を続けながら、千賀が那月を見上げて言う。

那月は表情を変えないまま、彼の負傷を確認した。全身に無数の裂傷と刺傷。その多くは、内臓にまで達しているほどだ。確実に致命傷だった。出血量はとっくに危険域を超えていた。まだ意識があるのが不思議なくらいだ。

「誰にやられた？」

なぜここにいるのか、とは那月は訊かなかった。キーストーンゲート最下層を訪れた時点で、千賀がやろうとしたことはわかっている。問題なのは、彼をここで待ち受けて倒した者がいる、という事実のほうだ。

「それを聞いて、今のおまえになにが出来る？」

千賀が愉快そうに笑って言った。

彼のその言葉で那月は気づく。千賀を傷つけたのは那月が手出しできない存在――すなわち、〝魔族特区〟の医療技術をもってしても、彼はもはや助からない。千賀自の為政者側の人間なのだと。那月を苦しめないために、千賀はあえて敵の名前を伏せたのだ。

「待っていろ、すぐに病院に運んでやる」

「構うな。もう必要ない」

千賀が那月の申し出を拒絶する。〝魔族特区〟の医療技術をもってしても、彼はもはや助からない。千賀自身、それをわかっている。

「十番目以外のタルタロス・ラプスのメンバーは確保した。全員、重傷だが命に別状はない」

「そうか」

那月が告げた情報に、千賀は安堵の表情を浮かべた。

「では、すまないが彼らを頼む。わかっているだろうが、あいつらは俺に道具として利用されていただけだ。彼ら自身に罪はない」

「貴様の証言として、伝えておこう」

那月が事務的な口調で言う。それでいい、と千賀はうなずいた。

タルタロス・ラプラスの裁判において、千賀の証言は、生き残った彼の仲間たちに有利に働くだろう。仲間たちに対する千賀の思いが、真実であるかどうかは別として。

「十五年前――おまえが、たった一人で復讐を終わらせて、俺たちの前から消えたときには、失望したよ。だが、今にして思えば、正しかったのはおまえのほうだったな」

千賀が懐かしげな表情で呟いた。

咳きこむ彼の口元から、血の塊がこぼれ落ちる。通路には死臭が漂い始めている。

「俺はガキどもに人殺しの技術を教えることで、あいつらに依存していたんだ。共依存というやつか。おまえはそれに気づいていたんだな、那月」

千賀がジャケットの襟の裏から、小さなチップを取り出した。データ保存用のマイクロメモリだ。血塗れの震える指先で、それを那月に差し出してくる。

「おまえの教え子たちは、自らの意思で〝魔族特区〟を護ることを選んだ……その判断は愚かだが、俺には少し眩しいよ。おまえは、いい生徒に恵まれたようだ」

「……これは？」

「勝者には戦利品があって然るべきだろう？　その中身をどう使うかは、おまえが決めろ」

那月がチップを受け取ったことを確認して、千賀は静かに目を閉じた。その口元には微笑が浮かんでいる。

「負けたはずなのに、悪くない気分だ……俺を止めたのが、おまえたちで……よかった……」

千賀の身体から力が抜ける。那月はそれを無表情に眺めていた。

「さよなら、先生」

空間を波紋のように揺らして、那月が消える。

薄暗い無人の通路には、血溜まりの痕跡だけが残されていた。

†

頭上には蒼穹が広がっていた。見慣れた〝魔族特区〟の青空だ。

空を埋め尽くしていたはずの真紅の魔法陣は消滅し、出現した四聖獣の姿も消えている。獅子王機関〝二

〝聖〟閑古詠は、焼け焦げた瓦礫の中に埋もれて、その空を呆然と見上げていた。

紘神島を破壊するはずだったタルタロス・ラプスの攻撃は、始まったときと同様に、いつの間にか唐突に終わりを告げた。おそらくそれは暁古城と、彼の友人たちの功績だろう。

彼女には、なにもできなかった。

古詠の手の届かない場所で、なにもかも終わってしまったのだ。

「助かった……の……？」

頼りなく呟く古詠の声には、隠しきれない苦痛が混じっている。肋骨の何割かはへし折れて、内臓も傷ついているのだろう。かすかに身じろぎするだけで、右脚と左腕に激痛が走る。古詠の制服はズタズタに破れ、白い布地は出血で赤く染まっていた。

それでも古詠はかろうじて生きていた。

古詠の周囲には、焼け焦げた鉄骨の残骸が転がり、大気には樹脂の焼ける嫌な臭いが満ちている。地球周回

軌道からの、対地レーザー砲撃の痕跡だ。

そして占詠が倒れている場所は、人工島北地区第一層――

人工の大地の地下だった。

「自分自身を攻撃することで、レーザーの直撃を免れたのかい。さすがだネ、〝静寂破り〟」

身動きできずにいる占詠の耳に、芝居がかった男の声が聞こえてくる。

陽光の中に浮かび上がった輪郭は、長身の青年貴族のものだった。占詠を見下ろす彼の頭上には、レーザー衛星の砲撃をよけられないと悟った瞬間、占詠は〝静寂破り〟と名付けられた能力――絶対先制攻撃の権利を発動した。

攻撃対象は足元の地面。そして古詠自身の肉体だった。

砲撃が穿った破壊の痕跡が、ぽっかりと口を広げている。

紘神冥駕と遭遇した場所が人工島北地区だったのは偶然だが、結果的にそのことが古詠を救った。研究所街である北地区は、紘神市内で唯一、広大な地下空間を持つ階層構造の街だからだ。

古詠の〝静寂破り〟は、静止した時間の中を動ける能力ではない。存在しない時間の中で占詠が誰かを攻撃しても、古詠自身の肉体が移動することはない。だからこそ暁 占城や紘神冥駕は、相討ち狙いという戦法を選んだ。

だが、その規則には例外がある。それは占詠が、占詠自身を攻撃したときだ。

レーザー砲撃が降りそそいだとき、古詠は、すでに衛星の照準範囲にはいなかった。絶対先制攻撃の能力によって、大地に穿った穴の底へと、占詠の肉体は吹き飛ばされていたのだ。

占詠の全身に刻まれた負傷は、自分自身への攻撃と、そして古詠は生き延びた。小さくない代償と引き換えに。落下の衝撃によるものだった。

「ディミトリエ……ヴァトラー……」

傷だらけの無防備な姿を晒したまま、古詠が青年貴族の名前を呼ぶ。
今の古詠に、彼と戦う力はないどころか、古詠は死にかけているのだ。
それでも古詠に恐怖はなかった。ただひとつ疑問だけが、古詠の意識を支配している。
「あなたは、なぜ――」
なにもせずに傍観していたのか、と古詠は訊く。
〝焔光の夜伯〟――
戦闘狂であるヴァトラーから見ても、彼らには戦う価値があったはずだ。
なのにヴァトラーは最後まで、手を出そうとはしなかった。
古詠はそれを疑問に思う。
「待ってたんだよ、時が満ちるのをサ」
青年貴族の答えは単純だった。
それだけで古詠はすべてを理解する。
彼は戦わなかったのではない。ただ待っていただけだ。戦いの準備が整うのを。彼が戦うべき強敵が、それに相応しい力を手に入れるのを。
「これで、十体……さて、そろそろ始めようか、〝静寂破り〟」
ディミトリエ・ヴァトラー――〝戦王領域〟の貴族が、空を見上げて美しく笑う。
古詠は、かすかな絶望を覚えて彼の言葉を聞いていた。
始まる。そう、始まるのだ。この〝魔族特区〟で。
宴の続きが――

〝魔族特区〟破壊集団タルタロス・ラプス。彼らが召喚し

廃棄地区にいる占城たちの回収に来たのは、特区警備隊の警備艇だった。紗矢華たちが獅子王機関経由で手を回してくれたのだ。

最初ははしゃいでいたグレンダも、今は唯里の膝枕で眠っている。紘神島まで、文字どおり飛んできたのだから無理もないことだが、やはり彼女も疲れていたのだ。

四聖獣が消滅して、まだ三時間ほど。だが、街は落ち着きを取り戻しているように思えた。

建物の被害は甚大だが、意外なほどに負傷者は少ない。都市の安全性が優れていたというよりも、市民の避難対応が異様なほどに素早く正確だったせいである。この程度の非常事態には、彼らはもう慣れっこなのだ。

彼らは紘神島の住人――〝魔族特区〟の民なのだから。

「やれやれ……ようやく戻ってこれたか……」

その紘神島の景色を海上から見上げて、占城が気怠く呟いた。警備艇が港に到着したのだ。

拘束具付きの担架に乗せられ、最初に運び出されたのはラーンだった。

彼女は意識不明のまま今も眠り続けている。肉体そのものに異常はなく、夢を見続けているような状態らしい。ネットワーク越しに接触した膨大な〝情報〟が原因だろう――というのが、彼女を霊視した雪菜たちの見立てだ。

「あいつら、これからどうなるんだろうな？」

目を閉じたままのラーンを見送って、占城は長い溜息を洩らす。

彼女たちタルタロス・ラプスのメンバーは、自らの意思で紘神島を破壊しようとしていた。逆らえない相手に利用されていただけの、アスタルテや優麻とは根本的に違う。

ましてや、タルタロス・ラプスは国際指名手配の重罪人。そして未登録魔族でもある。最悪、異界に存在す

る永遠の牢獄――〝監獄結界〟に永久隔離される可能性すらあり得た。

「もちろん彼女たちの罪が消えるわけじゃありませんけど、彼女たちの置かれていた環境には情状酌量の余地があります」

不安げな占城の横顔を見つめて、いつもの生真面目な口調で雪菜が言った。

「それに、紘神島の全住民が証人です。〝イロワーズ魔族特区〟のときとは違いますから――」

「事件を揉み消したり、一方的な処分はできない、ってことか」

「はい」

占城の呟きに、雪菜がうなずく。たしかにそれは悪くない情報だった。

人工島管理公社といえども、ラーンたちを勝手に裁くことはできない。ましてや彼女たちが獄中で暗殺されるようなことにはならないはずだ。

「私たちからも、獅子王機関経由で減刑を依頼してみるね。表向きは志緒ちゃんや煌坂さんの活躍で四聖獣が制圧されたことになってるし、少しは効果が期待できるんじゃないかな」

唯里が古城を励ますように言ってくる。占城は微笑んで彼女を見た。

「助かるよ。ディセンバーと約束しちまったからな」

ラーンたちの行く末を、古城はディセンバーに託された。それに、古城にはほかにも彼女たちを気にかける理由がある。

千賀毅人やディセンバーは、紘神島の存在によって、大勢の犠牲が出ると言っていた。

その理由を知っているのは、彼女たちだけだ。ディセンバーが、自ら消滅する危険を冒してまで紘神島を破壊しようとした理由――それを占城は聞かなければならない。彼女たちから、聞き出さなければならないのだ。

「さて、じゃあ、俺(おれ)たちも降りるか。ほら、起きろ、グレンダ。着いたぞ」
占城は船を降りるために、眠っていたグレンダを起こそうとした。
グレンダは寝ぼけた表情のまま、ぼんやりと頭を上げて首を振る。続けて立ち上がろうとした唯里が、バランスを崩してよろめいた。
わっ、と転倒しそうになる唯里を、近くにいた占城が受け止める。
「大丈夫か、唯里さん？」
「こ、占城くん!?　ごめんね。ちょっと脚が痺(しび)れちゃって」
「脚？　ああ……」
そういうことか、と占城は納得する。グレンダを長いこと膝枕していたせいで、脚の感覚が麻痺(まひ)してしまったのだろう。
「わかった。じゃあ、ちょっとジッとしててくれ」
「え？　古城くん……？」
きょとんとする唯里の背中に手を回して、古城は彼女を抱きかかえた。いわゆるお姫様抱っこの状態だ。それを隣で見ていた雪菜が「先輩!?」と大きく目を剝いた。
「古城くん!?　な、なにを……!?」
「とりあえず上まで運ぶよ。この船、けっこう揺れるから、力が入らないままじゃ危ないだろ。あ、嫌だったらやめるけど」
「い、嫌じゃない……かな。その、少し驚(おどろ)いただけで。でも、いいの？」
唯里は古城の首に手を回して、ちらちらと背後の雪菜を見る。雪菜は明らかに不機嫌な表情で占城(こじょう)をむっつりと睨(にら)んでいる。しかし占城はそれに気づかない。
「唯里(ゆいり)さんには今回世話になったからな。悪かったな。無理やりあんなことをして……」

「う、うん。非常事態だったから、仕方ないよね」

唯里が、頬を赤らめながら首を振る。占城が彼女の首筋に刻んだ噛み傷は、もうほとんど消えていた。キスマークのようなかすかな赤らみが、うっすらと残っているだけだ。

「でも、次はもう少し優しくして欲しいなあって。今日は初めてで、ちょっと恐かったし」

唯里が囁くような声で言う。独り言が声に出ていることに、おそらく気づいていないのだ。

「次……？」と思わず占城が訊き返し、

「次……？」と雪菜が眉を震わせた。

そして首を傾げた占城の耳元を、ヒュン、と殺意に満ちた銀光が駆け抜けた。

「――って、ぬおっ!?」

古城が短い悲鳴を上げて、凍りついたように動きを止める。ドスッ、と鈍い音を立て、船の外壁に突き刺さっていたのは金属製の呪矢だった

矢を放ったのは、銀色の洋弓を構えたショートヘアの少女。桟橋の上に仁王立ちした斐川志緒が、唯里を抱きかかえた占城を睨んでいた。

「第四真祖っ！　貴様、唯里になにをしたんだ、このケダモノっ！」

「し、志緒ちゃん!?」

驚く唯里のすぐ背後に、ふわりと着地した人影があった。

長いポニーテールの髪をなびかせた煌坂紗矢華が、長剣の切っ先を古城に向けている。

「暁　占城お……まさか、あなた、私たちに戦わせておいて裏でこそこそと淫らな行為を……！」

「煌坂さん……!?　待って、違うの、あれは――」

「そこを退いて、羽波唯里！　その変態を斬れないから！」

「待て、煌坂。とどめは私にやらせろ！」
「駄目だってば、志緒ちゃん。私は嫌じゃなかったし、そんなに痛くなかったし――」
慌てふためく唯里の言い訳が、志緒と紗矢華の怒りを更に煽った。
事情がよくわかっていないグレンダが、だっ、だーっ、とノリノリで叫んでいる。
「姫柊。頼む、こいつらに事情を説明してやってくれ」
追い詰められた占城が雪菜に助けを求めた。唯里との吸血行為があったのは事実だが、あれはディセンバーの精神支配に対抗するためのやむを得ない選択だったのだ。しかもその方法を、占城に提案したのはほかならぬ雪菜である。
しかし雪菜は、唯里を抱き上げたままの占城を、半眼のまま冷ややかに眺めて息を吐き、
「知りません」
「おい!?」
「――どうせ、わたしはただの監視役ですから。そうやって、ほかの子たちのことだけ大事にしてればいいんです、先輩のばか！」
「なんだそれ!?」
なぜか機嫌を損ねている雪菜を、俺がなにをした、と占城は絶望的な気分で見つめる。
志緒と紗矢華の怒声が響き、それを必死でなだめている唯里。そして面白がっているだけのグレンダの声を聞きながら、古城は投げやりに空を見上げた。
「勘弁してくれ……」
占城の弱々しい呟きが、海風に流されて消えていく。
ディセンバーと名乗っていた少女の笑い声が、耳の奥でかすかに聞こえた気がした。

キーストーンゲート第零層――

〝C〟と名付けられた部屋の奥に、藍羽浅葱は立ち尽くしていた。

「嘘……そんな……」

冷気の漂う薄暗い空間。浅葱が洩らした息が白く凍りつく。

彼女が見つめる視線の先には、螺旋状の広大な空間が広がっていた。

その壁一面にぎっしりと刻まれているのは、呪文のような奇妙な文字の羅列だ。

見知らぬ文字を刻んだ古い石板が、〝C〟の壁面を埋め尽くしているのだ。

人類の歴史上、かつて存在したことのない文字。

人類以外の者が残した記録。記述。記憶。情報――

「これが〝C〟……咎神の……棺桶……」

怯えた声で、浅葱が呟く。

術者の意識によって現実を塗り替える魔術の世界において、情報とはすなわち力そのものだ。

式神や使い魔、錬金術の知識によって生み出される人工生命体の例を引くまでもない。

情報は金銭を生み、創造と破壊を生み、生命を生み、そして神すらも生み出す。

ならば、この空間に封印された、存在しないはずの情報が生み出すものはなんなのか。

この膨大な情報すべてを記憶し、処理できる者がいるとすれば、それは――

「モグワイ……あんたは……！」

藍羽浅葱――〝カインの巫女〟と呼ばれた少女が絶叫した。

†

その残響に応えるように、石板に刻まれた文字たちが淡く発光を始める。
暗闇（くらやみ）の中で声がした。
奇妙に人間臭い人工知能の、嘲（あざけ）るような笑い声が。
ケケッ……

あとがき

四カ月ぶりです。お久しぶりです。前巻のあとがきでのお約束どおり、また少しだけ刊行ペースを上げてみました（ドヤ顔ふたたび）。でもさすがに今回はきつかった。

そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド13』をお届けしております。

今回のテーマは原点回帰です。前巻、前々巻とややイレギュラーな展開だったので、この巻のエピソードではストライク・ザ・ブラッドらしさというのを、なるべく意識して打ち出してみました。それはたとえば人工島や魔族特区という舞台の特殊性であったり、第四真祖という存在の秘密だったり、過去との向き合い方や、矢瀬や那月の生い立ちであったり、というようなことです。あとは浅葱が不幸な目に遭うと、だいたいストライク・ザ・ブラッドらしくなるという法則……なにはともあれ、お楽しみいただけたら幸いです。

さて新キャラの話。今回登場したタルタロス・ラプスの面々は、個人的にとても気に入ってしまって、書いてすごく楽しかったです（そして少しつらかった）。彼らはそれぞれ、人と魔族が共存している世界の負の側面を体現している存在なので、一歩間違えば彼らが主人公サイドだった可能性もあると思うし、できることなら彼らの活躍や、彼らが過ごしていた何気ない日常をもっと描きたかったなあ、と。彼らが突きつけた選択に対して、占城や雪菜が出した答えがこの先どんな結果をもたらすのか、一緒に見届けてもらえたら嬉しいです。

さてさて、すでに発表されておりますが、『ストライク・ザ・ブラッド』は前回のＴＶアニメ版に引き続き、新たにＯＶＡが制作されることになりました。応援してくださった皆様には、ひたすら感謝です。ストーリーは完全新作のオリジナルで、三雲も少しだけお手伝いさせてもらっています。新作ドラマＣＤも含め、ほかにも様々な展開を予定していますので、なにとぞよろしくお願いします。

また『月刊コミック電撃大王』誌上ではコミック版『ストライク・ザ・ブラッド』も連載中、単行本も現在六巻まで発売中です。ついに夏音（かのん）とラ・フォリアも登場して大変盛り上がってます（私のテンションが）。最新話はウェブでも読めますので、ぜひともチェックしていただければ。コミカライズを担当してくださっているTATE先生、いつもありがとうございます。

そしてイラストを担当してくださったマニャ子さま、お忙しい中、今回も本当にお世話になりました。特にこの巻のカラー口絵はいつにも増して素晴らしくて、リアルで鼻血を噴きそうになりました。やー、矢瀬つちもイケメンだった。

そして本書の制作・流通に関（かか）わってくださったすべての皆様にも心からお礼を申し上げます。

もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗（みくもがくと）

三雲岳斗（みくもがくと）
大分県出身。主に小説などを書いてる人。隠していたわけではないのですが実はネクタイ好きです。ネクタイはいいよね。男子にも、巨乳にも貧乳にも、スーツにも海パンにも似合う最強アイテム。ネクタイの魅力をもっと上手く描けるように頑張ります！

イラスト／マニャ子（こ）
佐賀県出身、東京都在住。フリーのイラスト、原画描きです。最近はソーシャルゲームのイラストを沢山描いてます。…いつも同じプロフィールを使っていたら、謎の着る毛布愛好者みたいになってました…。因みに今も着ています。

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.dengeki.com/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「三雲岳斗先生」係
「マニャ子先生」係

本書は書き下ろしです。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド13

タルタロスの薔薇（ばら）

三雲岳斗（みくもがくと）

発　行　　2015年7月30日

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
http://dengekibunko.dengeki.com/

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア／プログラム／データ／情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社KADOKAWAおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。
法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

(C)2015 GAKUTO MIKUMO

※2015年6月10日発行の電撃文庫『ストライク・ザ・ブラッド13 タルタロスの薔薇』初版に基づき制作